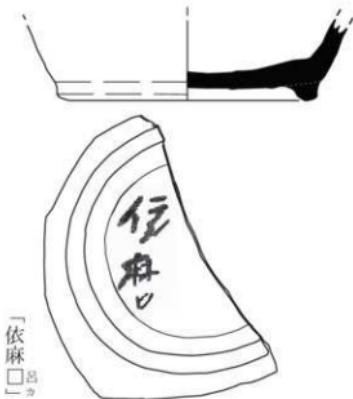


赤星石道遺跡・赤星灰塚遺跡

国道 325 号線改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告



赤星石道遺跡・赤星灰塚遺跡

国道 325 号線改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告



2020

熊本県教育委員会



赤星石道跡・赤星灰塚跡 遠景（菊池市街地を望む）



赤星石道跡 全景（南東より）

卷頭圖版 2



SK001 出土遺物



SK002 出土 須惠器耳皿・土師器耳皿

攝影：牛嶋 茂氏

序

赤星石道遺跡及び赤星灰塚遺跡は熊本県菊池市赤星に所在し、この地域は、古代菊池郡に属します。菊池郡には、古代山城の鞠智城が7世紀後半に築かれており、日本古代史上においても重要な地域です。また、南北朝の頃には菊池氏が菊池城（限府城）などを本拠として勢力を延ばし、九州一円に影響を及ぼすほどの有力な武士団として著名です。

熊本県教育委員会では、この赤星石道遺跡及び赤星灰塚遺跡について平成29年度から30年度まで国道325号線改築工事に伴う発掘調査を実施しました。

その結果両遺跡は、奈良時代後半から平安時代にかけての集落跡であることが明らかになりました。とりわけ、赤星石道遺跡では、平安時代における規則的な配置をとる建物群や越州窯系青磁の出土から菊池郡内の有力な集落のひとつであると評価することができます。また、「依麻^昌」と記された墨書き土器の出土からこの地の開発・経営を推し進めた人物の存在を示唆することができます。

菊鹿盆地の平野部には、菊池郡家、古代官道が想定されており、菊池郡の中心地域と評価されていますが、本遺跡はその東に位置し、古代官道や菊池川水系の水上交通を含めた交通の要衝として今回の成果が重要になります。

こうした成果を皆様に知っていただくため、このたび、熊本県文化財調査報告第339集として『赤星石道遺跡・赤星灰塚遺跡』を刊行することいたしました。

菊池川中流域の古代集落の実態の一端を示す本書が研究者のみならず、県民の皆様に幅広く活用され、地域の歴史を理解する一助になることを願います。

最後に発掘調査並びに本書の作成にあたり地元の皆様、熊本県北広域本部菊池地域振興局、菊池市教育委員会の関係機関各位に多大な御理解と御協力をいただきました。さらに多くの方々から御指導・御助言をいただき、ここに心よりお礼申し上げます。また、現地作業、資料整理に関わった職員・作業員諸氏の労苦に対しても謝意を表します。

令和2年3月31日

熊本県教育長 古閑 陽一

例 言

- 1 本書は菊池市赤星に所在する赤星石道遺跡・赤星灰塚遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
- 2 赤星石道遺跡及び赤星灰塚遺跡の発掘調査は、県北広域本部菊池地域振興局土木部工務課の依頼を受け、熊本県教育委員会が実施した。整理作業・報告書作成は熊本県文化財資料室で実施した。
- 3 調査体制（所属等は調査当時のものである）。

平成 29 年度（赤星灰塚遺跡 現地調査）

調査主体者 熊本県教育長 宮尾千加子 調査責任者 文化課長 岡村郷司
調査総括 課長補佐 村崎孝宏 調整担当 文化財調査第二係長 岡本真也
調査担当 文化財保護主事 尾崎潔久 事務担当 教育審議員兼課長補佐 松永隆則
主幹兼総務文化係長 左座 守 主事 竹馬牧子

平成 30 年度（赤星石道遺跡 現地調査）

調査主体者 熊本県教育長 宮尾千加子 調査責任者 文化課長 岡村郷司
調査総括 課長補佐 村崎孝宏 調整担当 調査班長 長谷部善一
調査担当 文化財保護主事 濱田 洋 参事 矢野裕介 井鍋誉之（派遣専門職員 静岡県）
事務担当 教育審議員兼課長補佐 松永隆則 主幹兼総務班長 一寶直也 主事 竹馬牧子

令和元年度（赤星灰塚遺跡 赤星石道遺跡 資料調査）

整理主体者 熊本県教育長 古閑陽一 調査責任者 文化課長 中村誠希
整理総括 課長補佐 長谷部善一 調整担当 調査班長 宮崎敬士
整理担当 主幹 矢野裕介 参事 井鍋誉之（派遣専門職員 静岡県）
事務担当 課長補佐 伊藤 昭 主幹兼総務班長 津田光生 主事 伊藤千恵子

- 4 発掘調査における実測図作成等は矢野裕介、濱田 洋（熊本県文化課）、齋部麻矢、飛野博文
大庭孝夫（派遣専門職員 福岡県）、西野元勝（派遣専門職員 鹿児島県）、井鍋誉之（派遣専門職員
静岡県）、山口豊（研修生 上天草市）が行い、遺構写真撮影は尾崎、矢野が行った。
卷頭図版の遺物撮影は牛嶋 茂氏が行った。
- 5 赤星石道遺跡の基準杭の打設及びグリッド杭設置は（株）有明測量開発社が行い、赤星灰塚遺跡では、
(有)坂井設計コンサルタントが実施した。
- 6 赤星灰塚遺跡出土の遺物実測図及びトレース図作成は（株）有明測量開発社に委託した。
- 7 調査にあたり、以下の方々から指導・助言を受けた。（順不同、敬称略）
小田富士雄 佐藤 信 小畠弘巳 綱田龍生 松川博一 酒井芳司 小林 啓 小田和利
- 8 本書の編集は、井鍋が担当し、熊本県教育庁教育総務局文化課が実施した。
- 9 本報告書に係わる出土遺物及び実測図、写真等の記録は、熊本県文化財資料室で保管している。

凡 例

- 1 個々の遺構名は遺構の種別を表す英大文字の分類記号と 3 枝の遺構番号の組み合わせで示す。
S B : 振立柱建物 S K : 土坑 S P : 小穴 S D : 溝 S X : 不明遺構
- 2 掲載遺物番号は通し番号とし、本文、挿図、表、図版の番号は一致する。
- 3 本書で扱う座標値は世界測地系に準拠し、レベル数値は海拔高である。
- 4 本書で使用した地図は下記に記した。

国土地理院発行地形図 菊池（縮尺 二万五千分の一）

本文目次

巻頭図版

序

例言

凡例

目次

第1章 調査の概要	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の方法と経過	2
第2章 遺跡の環境	5
第1節 地理的環境	5
第2節 歴史的環境	6
第3節 基本層序	8
第3章 調査の成果	9
第1節 赤星石道遺跡	9
1 遺構	9
2 遺物	25
第2節 赤星灰塚遺跡	41
1 遺構	41
2 遺物	45
第4章 総 括	49
第1節 菊池市赤星所在の集落遺跡の性格について（矢野）	49
1 菊池市赤星所在の集落遺跡	49
2 菊池郡内の集落遺跡との比較	49
3 遺跡の性格	51
第2節 まとめ	53
1 特筆すべきことがら	53
2 今後の課題	56

図版

抄録

挿図目次

図 1 赤星石道遺跡・赤星灰塚遺跡の位置	1	図 23 SD001 実測図	24
図 2 予備調査トレンチ配置図	4	図 24 SK001 出土遺物 - 1	26
図 3 赤星石道遺跡・赤星灰塚遺跡の発掘調査地	4	図 25 SK001 出土遺物 - 2	27
図 4 赤星石道遺跡・赤星灰塚遺跡の立地環境	5	図 26 SK001 出土遺物 - 3	28
図 5 赤星石道遺跡・赤星灰塚遺跡周辺遺跡地図	6	図 27 SK002 出土遺物 - 1	29
図 6 赤星石道遺跡・赤星灰塚遺跡の基本土層	8	図 28 SK002 出土遺物 - 2	30
図 7 赤星石道遺跡構成配置図	10	図 29 SK002 出土遺物 - 3	31
図 8 SB001 実測図	11	図 30 SK005・SK013・SK014 出土遺物	32
図 9 SB002 実測図	12	図 31 SR, SP, SD, SX 出土遺物	33
図 10 SB003 実測図	13	図 32 包含層出土遺物 - 1	34
図 11 SB004 実測図	14	図 33 包含層出土遺物 - 2	35
図 12 SB005 実測図	15	図 34 赤星灰塚遺跡構成配置図	42
図 13 SB006 実測図	16	図 35 SB001 実測図	43
図 14 SB007 実測図	17	図 36 SB002 実測図	44
図 15 SB009 実測図	18	図 37 SX001 実測図	45
図 16 SB010 実測図	19	図 38 SB, SK, SP, SX, 包含層出土遺物	46
図 17 SK001 実測図	20	図 39 NR001 出土遺物	47
図 18 SK002 実測図	21	図 40 菊池郡内における古代遺跡分布図	50
図 19 SK005 実測図	21	図 41 赤星石道遺跡建物配置図	53
図 20 SK013 実測図	22	図 42 大型土坑と出土遺物	54
図 21 SX001 実測図	22	図 43 菊池川中流域の古代集落遺跡	55
図 22 SX002 実測図	23		

表目次

表 1 調査工程表	3	表 8 土製品（土錐）観察表	40
表 2 遺跡地名表	7	表 9 鉄製品観察表	40
表 3 挖立柱建物計測値（1）	9	表 10 石製品観察表	40
表 4 土器観察表（1）	36	表 11 挖立柱建物計測値（2）	41
表 5 土器観察表（2）	37	表 12 土器観察表	48
表 6 土器観察表（3）	38	表 13 石製品観察表	48
表 7 土器観察表（4）	39		

図版目次

卷頭図版 1 赤星石道遺跡・赤星灰塚遺跡 遠景（菊池市街地を望む） 赤星石道遺跡 全景（南東より）	図版 7	SK001 遺物出土状況 全景（北東より） SK001 遺物出土状況 上層（北より） SK001 遺物出土状況 下層 - 1（北より） SK001 遺物出土状況 下層 - 2（北より） SK002 遺物出土状況（南西より） SK002 遺物出土状況詳細（南西より） SK002 土層堆積状況（南西より）
卷頭図版 2 SK001 出土遺物 SK002 出土 須恵器耳皿・土師器耳皿	図版 8	SK005 遺物出土状況（西より） SK013 遺物出土状況（南西より） SX002 遺物出土状況 全景（南西より） SX002 遺物出土状況 - 1（南西より） SX002 遺物出土状況 - 2（南西より） 赤星灰塚遺跡 全景（北西より） 赤星灰塚遺跡 SB001 完掘状況（西より） 赤星灰塚遺跡 SB002 完掘状況（南西より）
写真 1 道構削削作業 写真 2 測量作業 写真 3 道構実測作業 写真 4 遺物復元作業 写真 5 遺物実測作業 写真 6 遺物撮影作業 写真 7 赤星石道遺跡の基本層序 写真 8 赤星灰塚遺跡の基本層序	図版 9	SK001 出土遺物 - 1 SK001 出土遺物 - 2 SK001 出土遺物 - 3 SK002 出土遺物 - 1 SK002 出土遺物 - 2 SK005・SK013 出土遺物 SK009, SP159, SD003, SX001 出土遺物 SX002, 包含層出土遺物 包含層出土遺物 赤星灰塚遺跡出土遺物
図版 1 赤星石道遺跡 全景（東より） 赤星石道遺跡 全景（西より）	図版 10	
図版 2 SB001 検出状況（南より） SB001 半裁状況（南より）	図版 11	
図版 3 SB003 検出状況（西より） SB003 完掘状況（西より）	図版 12	
図版 4 SB004 検出状況（西より） SB005 検出状況（西より）	図版 13	
図版 5 SB002・SB007 検出状況（南より） SB006 完掘状況（西より）	図版 14	
図版 6 SB009 検出状況（北より） SB009 完掘状況（北より）	図版 15	

第1章 調査の概要

第1節 調査に至る経緯

国道325号線改築事業 国道325号線は、福岡県久留米市から宮崎県西臼杵郡高千穂町に至る一般国道で、熊本県内では山鹿市から大津町までの区間と阿蘇南郷谷を横断する区間に大きく分けられる。菊池市から大津町の区間は、県北地域と阿蘇地域及び熊本都市圏を結ぶとともに阿蘇くまもと空港などの交通拠点を結ぶ主要幹線道路となっており、企業活動や観光地へのアクセスとしても重要な役割を果たしている。

菊池市管内の国道325号線の改築事業は、平成18年12月25日付け菊池工第74号により、熊本県教育庁教育総務局文化課は、用地取得できた道路予定地内（菊池市森北から旭志伊坂）で平成24年度に予備調査を実施し、一部の区域で埋蔵文化財を発見するに至った。

そこに今回、平成28（2016）年4月14日、16日の2度にわたり、熊本県熊本地方を震源とする震度7の地震が発生し、「平成28年熊本地震」と命名された。この地震は布田川断層と日奈久断層が連動し引き起こされたもので、この断層に沿って甚大な被害が発生した。中でも最も大きなインフラ被害が生じたものでは、国道325号線の阿蘇大橋や大規模な斜面崩落が挙げられる。

熊本県では、国道325号線が県北部から阿蘇くまもと空港を結ぶ主要幹線道路であることから「創造的復興に向けた重点項目」に位置付け、平成29年度以降、国道325号線の阿蘇大橋の復旧をはじめとした道路拡幅工事が加速された。

平成29年度には、埋蔵文化財が確認された範囲を中心に調査面積、調査期間、調査費用を算定するための予備調査を2回実施し、赤星石塚遺跡では平成29年8月23日付け教文第1211号、赤星石道遺跡では、平成30年4月17日付け教文第95号で埋蔵文化財を確認した旨を熊本県菊池地域振興局宛てに通知した。協議の結果、工事に先立ち、記録保存を目的とした発掘調査が必要となった。このことを受け、工事の実施にあたっては、熊本県知事から文化財保護法（昭和25年法律第214号）第94条第1項に基づく平成30年1月5日付け北工第276号、平成30年5月29日付け北工第20号の通知が提出され、予備調査の結果に基づき平成30年2月9日付け教文第2536号、平成30年6月7日付け教文第679号において発掘調査の実施を通知した。

平成30年度からは文化庁の震災派遣により県外からの文化財専門職員（以下、「派遣専門職員」）の支援を受け、赤星石道遺跡の現地調査及び整理作業を行った。

発掘調査で出土した文化財は、調査終了後、遺失物法に基づく文化財の発見届を平成30年11月14日付け教文第1931号で菊池警察署に通知した。

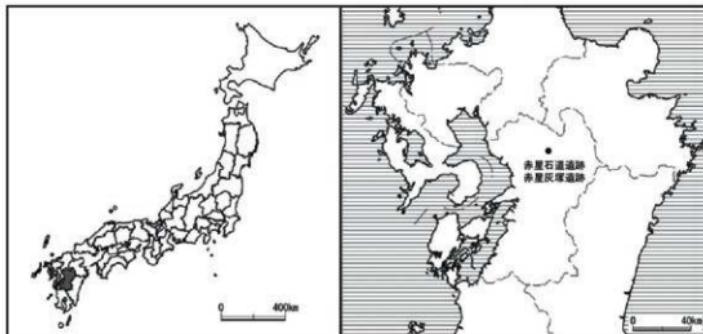


図1 赤星石道遺跡・赤星灰塚遺跡の位置

第2節 調査の方法と経過

1 調査方法

調査区の設定 本発掘調査を実施するにあたり、調査対象地に国家座標軸（世界測地系）に基づき、赤星石道遺跡では、5 m間隔のグリッド、赤星灰塚遺跡では10 m間隔のグリッドを設定した。赤星石道遺跡の基点は、調査区の北西隅（X = -4070 Y = -17230）とし、赤星灰塚遺跡の基点は、調査区の北西隅（X = -4220 Y = -16870）とし、番号を付した。

表土掘削 赤星石道遺跡及び赤星灰塚遺跡の地形は南東側が高く、北西側にかけてゆるやかに傾斜している。調査対象地の耕作土は現地表から平均0.4 mほどは、バックホウを用い、除去した。バックホウのパケットは平爪を装着し、排土移動にはバックホウ及び4トントラックを用い事業予定地内に仮置きした。

遺物包含層の掘削 遺物包含層の掘削は移植ごてまたは鋤簫を用い、人力で行った。遺物包含層は、乾燥すると土が硬質になり、掘削が困難になるため、散水しながら掘削した。

遺構検出・掘削 遺構の検出には、移植ゴテまたは鋤簫を用い、人力で行った。小穴、柱穴が多くいため、掘立柱建物を想定し、遺構検出に努めた。

遺物出土量の多い土坑は土層観察用のアゼを設定し、遺構埋没状況の把握に努め、埋土の特徴的な遺構については土層断面図を作成した。

遺構測量 遺構平面図の作成は、グリッドを基準に縮尺20分の1を基本に人力により行った。遺構内の主要な出土遺物は出土状況図を作成し、個別Naを付して取り上げを行った。

写真撮影 遺構等の写真撮影はフルサイズのデジタルカメラを主体に、作業状況等の写真についてはコンパクトデジタルカメラを用いた。高所からの撮影は、高所作業車を用い、遺跡の全景写真、周辺地形を含めた遠景写真を撮った。

2 調査の経過

発掘調査

赤星灰塚遺跡 現地調査は、平成29年度12月より着手した。12月中旬にはバックホウを用い、表土除去作業を行った。表土除去後は基準杭及びグリッド杭を打設した。遺物包含層及び遺構検出は、人力で掘削し、1月には遺構掘削及び平面図作成は人力で行った。2月初旬にはラジコンヘリによる空撮を行い、モノクロ・カラーリバーサルフィルムを用いた。現地調査は2月末で終了した。



写真1 遺構掘削作業



写真2 測量作業



写真3 遺構実測作業

赤星石道遺跡 現地調査は平成 30 年度 7 月より着手し、7 月第 4 週にバックホウによる表土除去作業を行った。表土除去後には、測量用の基礎杭、グリッド杭を打設した。

8 月より人力による遺物包含層掘削、遺構検出作業を開始した。土質は乾燥しやすく硬質になるため、包含層掘削は困難であった。8 月下旬には遺構掘削、遺物出土状況図作成などの作業を行った。

9 月には遺構・遺物の広がりが認められたため、北壁の一部を拡張し、再度、包含層掘削、遺構検出作業を実施した。

10 月前半には遺構実測図・遺物出土状況図を作成した。併せて、高所作業車による遺跡全景を撮影し、現地調査を終了した。

遺跡説明会 赤星石道遺跡においては発掘調査終了時の 10 月 6 日に現地説明会を予定していたが、台風 25 号の影響により中止となった。代わりに熊本県装飾古墳館において、12 月 8 日に赤星石道遺跡の発掘調査成果を報告した。

整理作業 赤星石道遺跡及び赤星灰塚遺跡の出土品や遺構図面などを整理する基礎的な作業は現地作業と並行して行い、両遺跡とも本格的な整理作業は、現地作業終了後の平成 30 年度、令和元年度に熊本県文化財資料室で実施した。

赤星灰塚遺跡の出土遺物の実測・トレース作業については業務委託し、それ以外の作業は、すべて熊本県教育委員会が実施した。令和 2 年 3 月にすべての作業を完了し、2 遺跡分の報告書（本書）を刊行した。



写真 4 遺物復元作業



写真 5 遺物実測作業



写真 6 遺物撮影作業

表 1 調査工程表

	遺跡名	平成 29 年度					平成 30 年度					令和元年度									
		12	1	2	7	8	9	10	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3		
現地調査	赤星灰塚遺跡	■																			
	赤星石道遺跡					■															
資料調査	赤星灰塚遺跡						—		■												
	赤星石道遺跡								■												

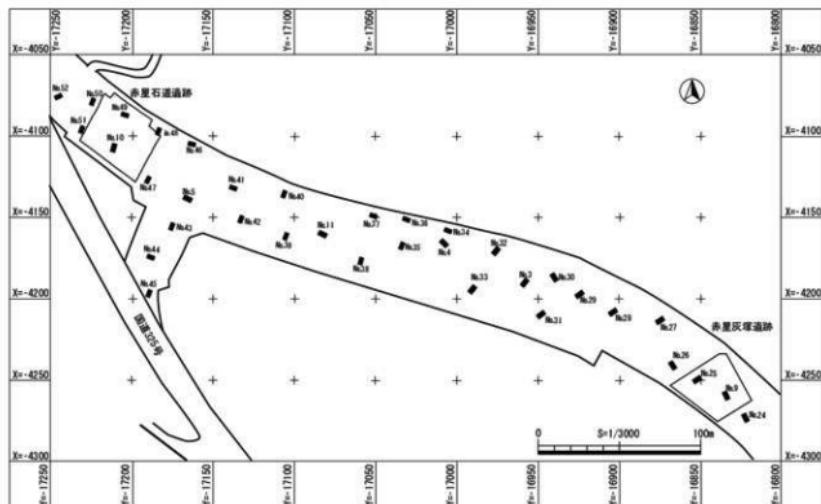


図2 予備調査トレンチ配置図

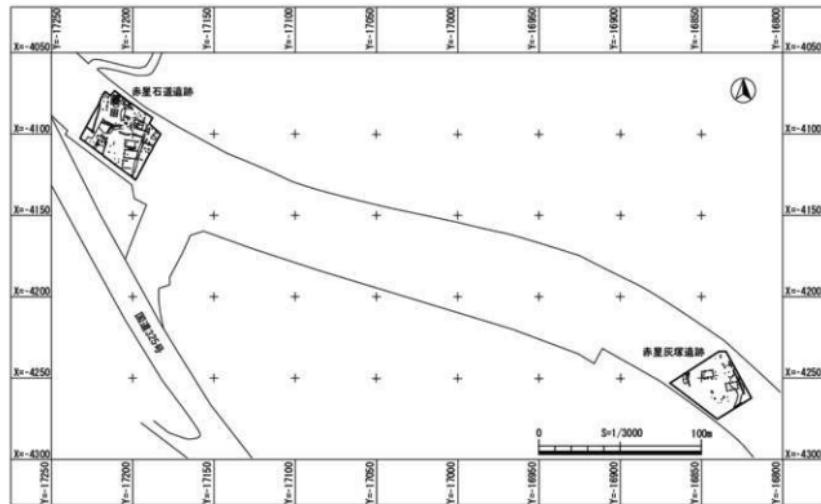


図3 赤星石道跡・赤星灰塙跡の発掘調査地

第2章 遺跡の環境

第1節 地理的環境

赤星石道遺跡・赤星灰塚遺跡が所在する菊池市は、熊本県北部に位置し、北に八方ヶ岳、東に阿蘇外輪山の一角をなす鞍岳がそびえ、東部の急峻な山地から南西側へ開けた地形となっている。

菊池市街地を流れる菊池川は、東の阿蘇外輪山に源を発し、迫間川、合志川、千田川などを合わせながら、菊鹿盆地を貫流し、玉名平野を出たあと、有明海に注ぐ一級河川である。現在、菊池川は、流域面積 996km²、流域延長 71km を有し、流域内人口は約 21万人、利水は主に農業用水や発電、大牟田有明工業用水として利用されている。

菊池川上流域の地質は、阿蘇外輪山から菊池台地を中心に溶結凝灰岩からなる阿蘇火碎流堆積物 (A13) で構成される。中流域の山地では、低位・中位 (t1・t2) 段丘堆積物が広く分布し、下流域では有明海の海退等により形成された沖積平野が広がっている。

菊池市を形成している東高西低の地形は、阿蘇の溶結凝灰岩をはじめとする堆積物とそれを菊池川などの河川が浸食・開析して形成されたもので、赤星石道遺跡・赤星灰塚遺跡は菊池川中流左岸域の沖積扇状地上にあたる。この扇状地上には、菊池川に注ぐ小河川による微高地の高まりが複数存在する。この微高地に弥生時代から古代にかけての遺跡が分布している。

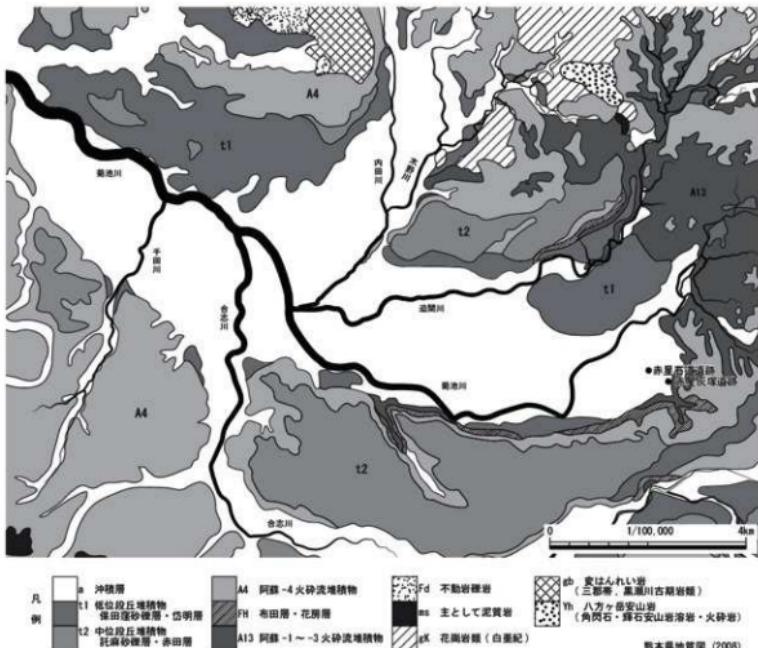


図4 赤星石道遺跡・赤星灰塚遺跡の立地環境

第2節 歴史的環境

赤星石道遺跡・赤星灰塚遺跡が所在する菊池市には多くの遺跡が分布している。とくに菊池川流域には弥生時代から中世に至る集落遺跡が多く認められ、ここでは、菊池川流域の古代の遺跡を中心に紹介する。

律令制下における地方行政区分では五畿七道に分けられ、さらに国一郡一里（郷）に分けられていた。肥後国は奈良時代前半には、13郡106郷302里に分けられていたとされ、その後、859年には合志郡から山本郡が分置され、13郡から14郡となっている。

菊池川中流域には菊池郡、合志郡、山鹿郡があり、調査事例も増加してきている。赤星石道遺跡・赤星灰塚遺跡から北西に約500mの位置には赤星福土・水溜遺跡（092）が立地しており、昭和51年度の調査で、赤星福土遺跡においては方形土坑、掘立柱建物が確認された。方形土坑の性格は火葬墓とされているが、明確ではない。時期は9世紀中頃から後半とされている。主な遺物は墨書き器が3点、柱穴群周辺において炭化米が確認されている。

また、赤星福土遺跡の東側に隣接する赤星水溜遺跡においては、竪穴建物、掘立柱建物、溝状遺構が確認されている。主な遺物は越州窯系青磁、黒色土器が出土している。赤星福土・水溜遺跡は遺跡として分かれているが、立地状況から赤星石道遺跡及び赤星灰塚遺跡を含めて、赤星遺跡群として捉えることが可能で、9世紀代を中心とした集落であろう。

西寺遺跡（086）は菊鹿盆地の平野部に位置する。かつて土壘が幅5～6m、高さ1.5mの規模で北側、東側、南側の一部で遺存していたとされる。周辺からは大量の布目瓦が出土しており、土壘や8世紀の出土瓦からこの一帯を菊池郡家と想定している。

十連寺跡（007）はうでな台地の南側斜面にある。塔心礎石が残り、瓦が出土し、古くからその存在が知られており、昭和40年代に調査が行われ、出土した瓦から奈良時代中期の鴻臚館式系統の瓦であることが判明



図5 赤星石道遺跡・赤星灰塚遺跡周辺遺跡地図

している。東に三重塔、西に金堂、北に講堂をもつ法起寺式の伽藍と推定されており、この十連寺は菊池郡家に付属する都寺とされる。

鞠智城（100）は肥後國菊池郡に属し、郡9郷のうちの城野郷に比定されており、山鹿市から菊池市にかけての米原台地に所在する。鞠智城は白村江の敗戦後、大野城（太宰府市ほか）、基肄城（基山町ほか）などとともに唐・新羅の侵攻に備えて西日本各地に築かれた古代山城である。周長3.5km、面積55haの外郭を有する。昭和42年から調査が始まり、今年度で34次までの調査が行われている。調査では八角形建物、72棟の建物跡、貯水池跡、門礎石、土壙跡などの遺構が検出されている。

うてな遺跡（003）は菊池市北部のうてな台地上に立地する。46軒の堅穴建物、掘立柱建物5棟、道路遺構が確認されている。七ツ枝地区では、150軒の堅穴建物、20数棟の掘立柱建物が検出されている。堅穴建物を主体としたがらも遺物は三彩瓦片、銅碗片、墨書き器などが出土しており、官街関連の大規模な集落が展開していたと想定されている。

南北朝になると菊池川流域には南朝方として九州一円に影響を与えた菊池氏に間連する遺跡が多く認められる。現菊池神社が位置する守山城（054）や隈府の街並み（172ほか）が残っており、なかでも隈府土井ノ外遺跡（068）では、14世紀後半から15世紀前半にかけて二重の堀を有する方形居館跡が検出されており、菊池一族の居館跡の可能性が指摘されている。

表2 遺跡地名表

菊池市(210)

遺跡番号	遺跡名	所在地	時代	種別
041	大塚	菊池市長田（通称大塚）	弥生～古世	包蔵地
046	光丸跡	菊池市西泊間	中世	寺社
054	守山城跡及び内裏尾跡	菊池市隈府守山、高野瀬	中世	城
056	正觀寺の碑石群	菊池市隈府1128（通称 正觀寺）	中世	寺社
057	菊池武光外歴代墓碑	菊池市隈府（通称正觀寺）	中世	墳墓
066	神楽古墳	菊池市野間口神楽	古墳	古墳
068	九種の大塚寺跡	菊池市大塚寺	中世	寺社
069	隈府土井ノ外遺跡	菊池市隈府1332	中世	包蔵地
071	無量山西福寺跡	菊池市西寺	中世	包蔵地
072	赤星山魔の墓	菊池市西寺水町	中世	墓
076	深川	菊池市深川河原跡	縄文～古墳	包蔵地
077	深川古墳	菊池市深川古墳	古墳	古墳
078	赤星	菊池市赤星ノ前	古墳	包蔵地
079	赤星ヤンボシ古墳	菊池市赤星前畠	古墳	古墳
080	天城社古墳	菊池市赤星塚	古墳	古墳
083	菊之城跡	菊池市北宮城ノ堀	弥生～中世	城
085	西寺郡家及び土豊跡	菊池市西寺（通称 高田）	古代・中世	包蔵地
087	西寺	菊池市西寺（通称 高田）	古代・中世	包蔵地
088	南園	菊池市西寺園	古代・中世	包蔵地
090	菊池氏墓所	菊池市北宮城の堀	中世	墓
091	菊之池跡	菊池市深川	中世	包蔵地
092	赤星福士・水澤	菊池市赤星福士・水澤	縄文～古代	集落
101	正觀寺地藏堂	菊池市隈府（通称 正觀寺）	中世	寺社
108	東福寺	菊池市瓦當山	古代	寺社
109	菊池氏墓所	菊池市豆屋敷	中世	墓地
110	止林城跡	菊池市木麻古城	中世	城
115	豆横穴	菊池市豆	古墳	古墳
120	戸崎城跡	菊池市今南山ノ上	中世	城
121	マユノノ横穴	菊池市今	古墳	古墳
147	種面之口	菊池市米原	縄文～中世	包蔵地
150	神楽	菊池市大場寺	古代	包蔵地
151	鞠智城木野神社碑石	菊池市米原長者原	中世	城
161	朱里跡	菊池市	古代・中世	生産
162	朱里跡	菊池市	古代・中世	生産
163	朱里跡	菊池市	古代・中世	生産
164	妙見尾山横穴群	菊池市森北尾山	古墳	古墳
172	隈府外遺跡	菊池市菊池隈府町	奈良	包蔵地
173	隈府東ノ内遺跡	菊池市隈府東の内		
174	隈府内遺跡	菊池市隈府		
175	隈府城跡	菊池市隈府城下		
176	隈府院内遺跡	菊池市隈府院		
177	隈府院外遺跡	菊池市隈府院場		

遺跡番号	遺跡名	所在地	時代	種別
177	隈府城木屋敷遺跡	菊池市隈府堀木屋敷		
178	隈府守山道跡	菊池市隈府守山		
179	隈府北城下道跡	菊池市隈府北城下		
180	隈府北ノ路道跡	菊池市隈府北ノ路		
181	隈府南ノ道跡	菊池市隈府南田		
182	隈府前ノ道跡	菊池市隈府前田		
183	隈府堀木道跡	菊池市隈府堀木		
184	隈府南ノ町道跡	菊池市隈府432-1外4番	弥生後期・中世	包蔵地
185	赤星灰塙遺跡	菊池市赤星灰塙	古代・中世	包蔵地
186	赤星石道跡	菊池市赤星石道	古代	包蔵地

遺跡番号	遺跡名	所在地	時代	種別
001	台城跡	菊池市七城町台城之上	中世	城
003	台（うてな）	菊池市七城町台臺	古墳	包蔵地
007	十津寺跡	菊池市七城町台次	奈良・平安	寺社
008	神尾城跡	菊池市七城町水次屋敷	中世	城
009	水次	菊池市七城町水次	久良ノ上	古墳
012	岡田の無聲塙	菊池市七城町岡田宅地	中世	石造物
014	神山正善寺跡	菊池市七城町岡田寺	中世	寺社
019	岡田	菊池市七城町岡田	奈良～中世	包蔵地
024	増永城跡	菊池市七城町砂田宮ノ前	中世	城
042	鬼尾城跡	菊池市七城町鬼尾城平	中世	城
045	碧樹正善寺跡	菊池市七城町碧尾城平	中世	寺社
051	流川	菊池市七城町流川	縄文～中世	包蔵地

遺跡番号	遺跡名	所在地	時代	種別
025	綿本平野朱里跡	山鹿市鹿本町庄大草ほか	古代・中世	生産
063	内田川渡堀朱里跡	山鹿市鹿本町高橋吉岡ほか	古代～中世	生産

遺跡番号	遺跡名	所在地	時代	種別
100	鞠智城跡	山鹿市菊鹿町木野深迫	1907年 米原県農業試験場	古代
108	鞠智城水門跡	山鹿市菊鹿町木原長者源	古代	城
109	鞠智城わくど石	山鹿市菊鹿町木原長者源	古代	祭祀
111	鞠智城根堤さん	山鹿市菊鹿町木原長者源	古代	祭祀
117	田間賣工力屋敷跡	山鹿市菊鹿町米原（通称 稲佐松）	中世	包蔵地
121	大門口	山鹿市菊鹿町松尾	古代	城

第3節 基本層序

赤星石道遺跡 赤星石道遺跡の基本層位を、図6左に示した。今回の調査区の地形は東側から西側にかけて低く傾斜した微高地上にあたる。

調査では、1層から2層が水田及び畑作に係る耕作土、3層は近世以降の遺物が含まれ、4層が古代の遺物包含層、5層以下が微高地を形成する基盤である。古代の構造面は、5層上面で確認した。

赤星灰塚遺跡 赤星灰塚遺跡の基本層位を、図6右に示した。赤星石道遺跡と同様に微高地上に位置し、東側から西側に向かって低く傾斜している。遺構は、標高52.7mの範囲で検出した。

赤星石道遺跡の調査区からは直線距離にして、約350m以上離れている。1層から3層は水田耕作土及び畑作の耕作土で近現代の遺物もみられる。

遺物量は少ないものの、4層が遺物包含層に相当し、縄文時代晚期から古代の遺物がみられる。

5層以下が微高地を形成する基盤で、赤星石道遺跡と同様の層位である。

赤星石道遺跡及び赤星灰塚遺跡は、同微高地上に位置することから本来は同じ遺跡としてとらえることができる。



写真7 赤星石道遺跡の基本層序



写真8 赤星灰塚遺跡の基本層序

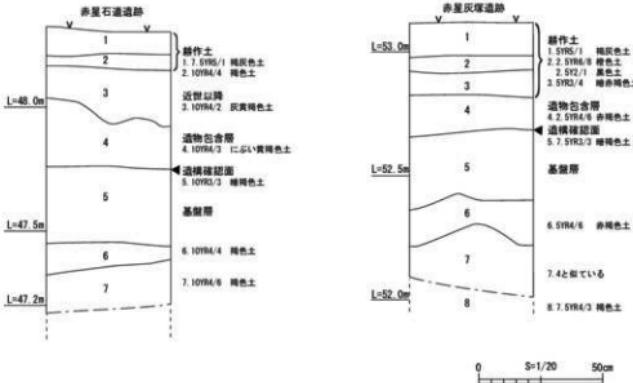


図6 赤星石道遺跡・赤星灰塚遺跡の基本土層

第3章 調査の成果

第1節 赤星石道遺跡

1 遺構

概要(図7)

赤星石道遺跡では9世紀前半から9世紀後半の掘立柱建物、土坑、溝、小穴、不明遺構を検出した。当該期の遺構はほぼ調査区全域にわたり、掘立柱建物を主体とする。調査区中央には谷地形があり、その周囲に建物群が分布していた。南東部分の建物群については建物方向に共通性がみられ、なんらかの規格に基づき、配置されたものと考えられる。北西部分においては、総柱建物群が分布し、建て替えが想定できる。遺物は掘立柱建物からは少なく、土坑内から多く出土している。

掘立柱建物の明確な建て替えは、SB002とSB007のみで重複も少ないことから、存続期間は9世紀前半から9世紀後半と短いことが判断できる。なお、この時期の堅穴建物は明瞭ではないもののSX001がその可能性のあることを指摘しておく。

土坑は、長軸3m以上のものが2基みつかっており、そこから多くの遺物が出土した。土師器を主体とし、底部穿孔の耳皿、皿、口縁部を打ち欠いた長頸壺があることから儀礼行為後に廃棄された土坑と考えられる。

今回の調査で検出した掘立柱建物は、合計9棟である。掘立柱建物のタイプは3×2間の側柱建物、5×2間の側柱建物、3×2間の総柱建物に分類することができ、以下の表にまとめた。

表3 掘立柱建物計測値(1)

遺構番号	桁行×梁行	規模(m)	桁行柱間寸法	梁行柱間寸法	方位	面積(m ²)	備考
SB001	3×2	4.05×3.6	1.35+1.2+1.5	1.8	N-10° -W	14.6	総柱
SB002	3×2	4.5×3.3	1.5	1.65	N-14° -W	14.9	総柱
SB003	5×2	6.75×3.9	1.35	1.95	N-5° -W	27.0	側柱
SB004	3×2	6.3×4.2	2.1	2.1	N-7° -E	26.5	側柱
SB005	3?×2	5.0×4.5	1.8+1.65+1.65	2.25	N-2° -E	—	側柱
SB006	3?×2	6.75×4.5	2.7+2.1+1.95	2.25	N-13° -E	—	側柱
SB007	3×2	4.05×3.6	1.2+1.5+1.35	1.8	N-5° -W	14.6	総柱
SB009	5?×2	6以上×4.5	1.5	2.25	N-14° -W	—	側柱
SB010	3×2	5.4×4.65	1.8	2.25+2.4	N-18° -E	25.1	総柱

凡例

建物方位については、座標北からの數値であり、主軸が東西の場合、90°ずらした南北方向で示した。

桁行梁行柱間寸法は、柱間寸法×開間数で示す。

桁行梁行柱間寸法は、西→東、北→南で示す。

SB001(図8 図版2)

調査区北西部に位置する。棟方位N-10° -WでSB001の棟通はSB002の柱筋と一致する。桁行4.05m(3間)、梁間3.6m(2間)の南北棟の総柱建物である。面積は14.6m²である。桁方向で北から1.35m(4.5尺)、1.2m(4尺)、1.5m(5尺)間隔、梁間の柱間は1.8m(6尺)等間である。柱形状は梢円形ですべての掘方に柱痕を確認することができる。遺物は土師器の細片が出土した。

SB002(図9 図版5)

調査区北西部に位置する。棟方位N-14° -Wで桁行4.5m(3間)梁間3.3m(2間)の南北棟の総柱建物である。桁行の柱間は1.5m(5尺)、梁間の柱間は1.65m(5.5尺)等間である。柱形状は梢円形で径0.7~0.3mである。大半で柱痕を確認できた。遺物は土師器の細片が多く出土し、SP107からは土師器甕の破片が出土した。

SB003(図10 図版3)

調査区南東部に位置する。棟方位N-5° -Wで桁行6.75m(5間)梁間3.9m(2間)の東西棟の側柱建

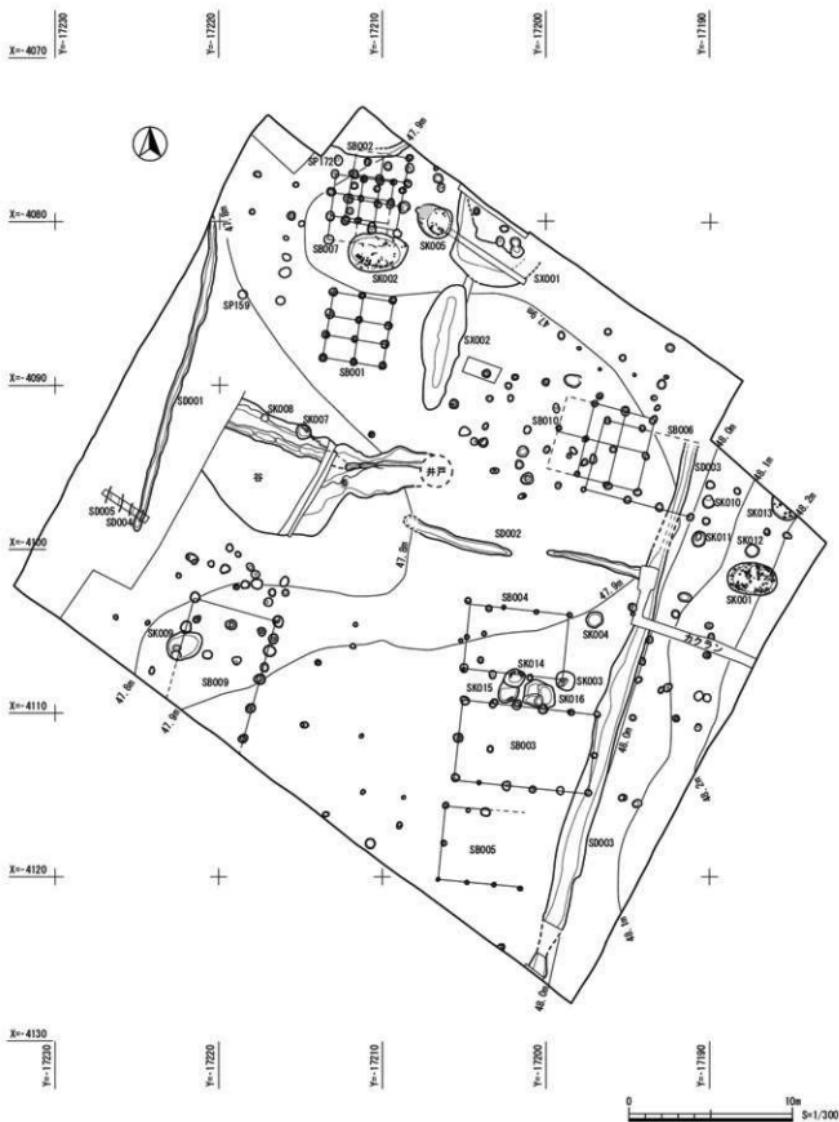


図7 赤星石道遺跡遺構配置図

物である。桁方向の柱間は 1.35 m (4.5 尺) 等間、梁間方向の柱間は 1.95 m (6.5 尺) 等間である。面積は 27 m² である。柱穴形状は梢円形で、径 0.5 m ~ 0.3 m である。深さは 0.3 m ~ 0.2 m で、柱痕は大半で確認できた。遺物は土器器の細片、須恵器壺の破片が少量出土した。

S8004 (図 11 図版 4)

調査区南東部に位置する。棟方位 N- 7° -E で桁行 6.3 m (3 間) 梁間 4.2 m (2 間) の東西棟の側柱建物である。桁方向の柱間は 2.1 m (7 尺) 等間、梁間の柱間も 2.1 m (7 尺) 等間である。面積は 26.5 m² である。柱形状は梢円形で、柱痕は一部で認められた。SP047 の内部から扁平な河原石が検出され、根石と思われる。遺物は土器器の細片と SP047 から須恵器蓋の破片が出土した。

S8005 (図 12 図版 4)

調査区南東部に位置する。棟方位 N- 2° -E で、桁行 5 m (3 間)、梁間 4.5 m (2 間) の東西棟の側柱建物である。桁方向の柱間は 1.8 m (6 尺)、1.65 m (5.5 尺) で構成される。梁間は 2.25 m (7.5 尺) 等間で

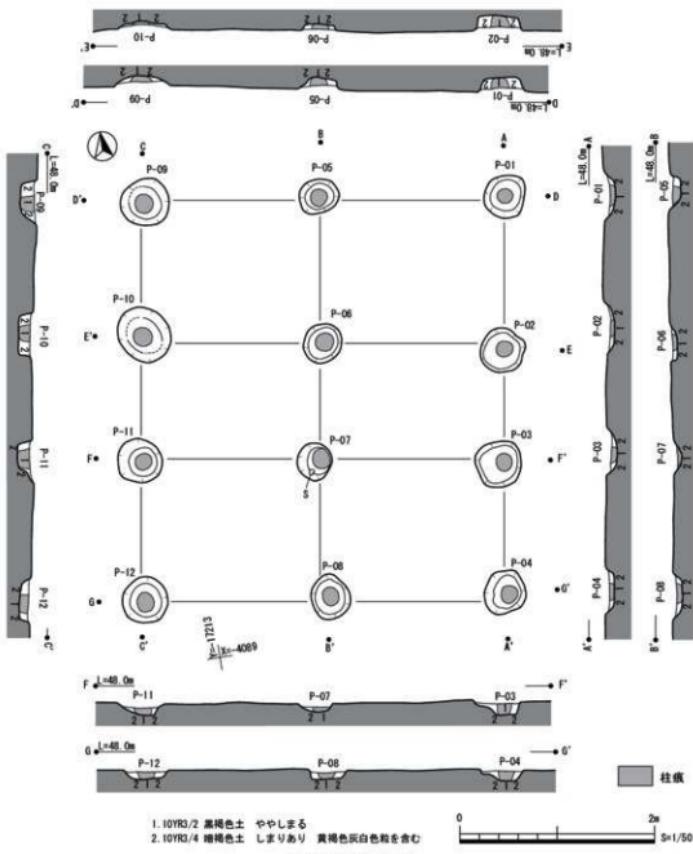
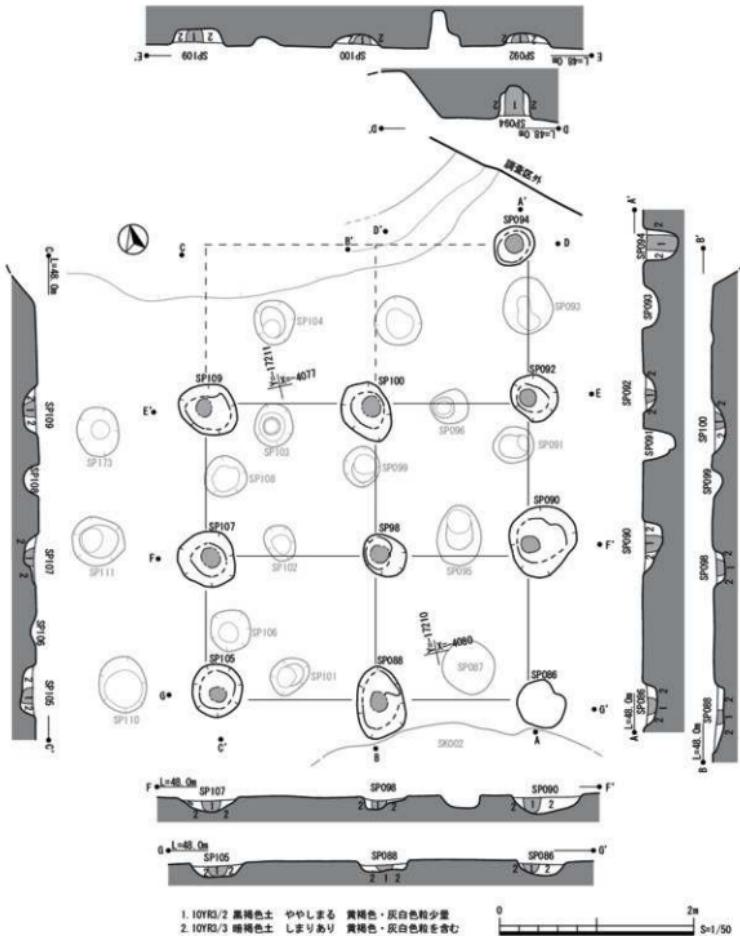


図 8 S8001 実測図

ある。柱形状は円形もしくは梢円形で、深さは0.3m前後であった。そのうち柱痕の確認できたものは3基であり、径0.1m～0.2m程度であった。遺物は土器器細片が出土し、SP044からは土器器甕、須恵器甕の破片が出土した。

SB006 (図13 図版5)

調査区北東部に位置する。棟方位N-13°-Eで桁行6.75m(3間)梁間4.5m(2間)の東西棟の側柱建物である。桁方向の柱間は2.7m(9尺)、2.1m(7尺)、1.95m(6.5尺)と均一ではない。柱形状は梢



円形で、柱痕は不明であった。

S8007 (図14 図版5)

調査区の北西部に位置する。棟方位 N-5° -W で桁行 4.05 m (3間) 梁間 1.8 m (2間) の南北棟の総柱建物である。桁行の柱間は 1.2 m (4尺)、1.5 m (5尺)、1.35 m (4.5尺) 梁間の柱間は 1.8 m (6尺) 等間である。柱形状は梢円形で、径 0.6 ~ 0.5 m である。遺物は土師器の細片が多く出土したが、図示できるものは少ない。

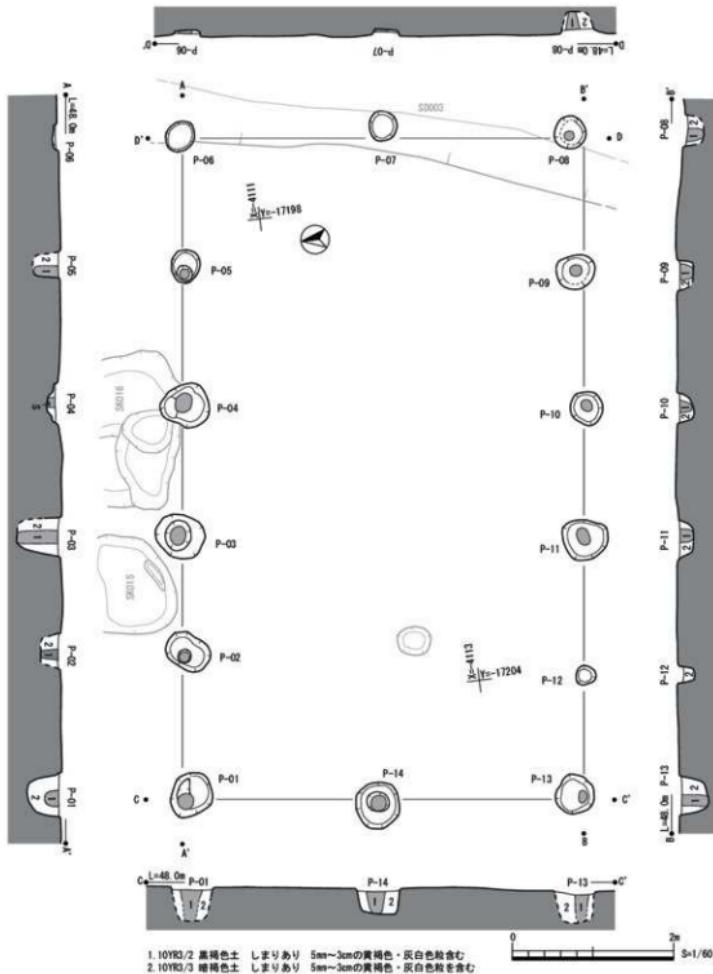


図10 S8003 実測図

SB009 (図15 図版6)

調査区南西部に位置する。棟方位N-14°Wで桁行6m以上(4間以上)梁間4.5m(2間?)の南北棟の側柱建物である。桁方向の柱間は1.5m(5尺)等間である。柱穴形状は楕円形である。径0.6m~0.3mであるものの他の建物と比してやや柱穴の規模は大きい。遺物は土師器無台坏、皿、壺の破片が出土した。
SB010(図16 図版-)

調査区北東部に位置する。棟方位 N-18° Eで桁行 5.4 m (3間) 梁間 4.65 m (2間) の東西棟の総柱

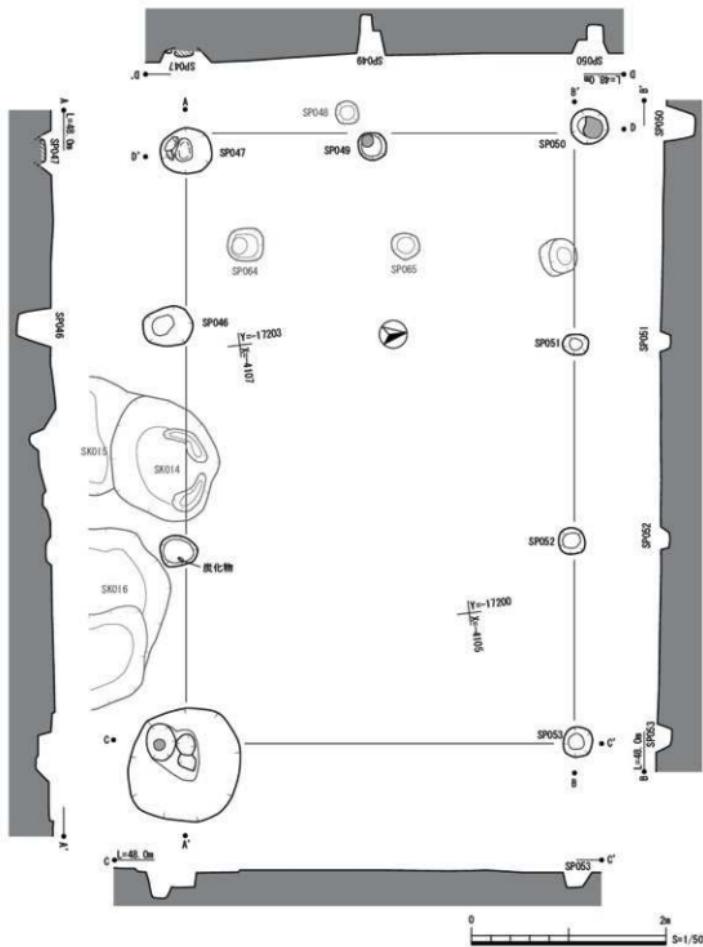


図 11 SB004 実測図

建物である。桁方向の柱間の2間分は1.8 m (6尺) 等間、梁間は2.25 m (7.5尺)、2.4 m (8尺) である。柱穴形状は楕円形で、規模は均一ではない。柱痕は不明瞭であった。遺物は土師器が少量出土した。

SK001 (図17 図版7)

調査区北東部のSK013の南側に位置する。長楕円形を呈し、長径3.08 m 短径1.9 mで深さ0.6 mである。底面はほぼ平坦である。出土状況図は1層から3層まで(上面)、4層から6層まで(下面)を示した。出土遺物の大半が土師器壺類であった。特に注目すべき遺物として須恵器長頸壺(12)、(13)は1層で出土しており、出土状況から埋置されていたと考えられる。いずれも口縁部を欠いており、(12)にいたっては、底部に穿孔が施されていた。このほか須恵器壺(5)、大型の甕(14)、土鍾(47)、砥石(51)、鉄釘などが認められた。SK002と同様に長楕円形の土坑であること、口縁部を意図的に欠いた壺類があることから祭祀儀礼で使用されたのちに廃棄された土坑と考えられる。時期は、9世紀中葉であろう。

SK002 (図18 図版8)

調査区北西部のSB001の北側に位置する。長楕円形を呈し、長径3.3 m 短径2.4 mである。深さは0.9 mで、底面は平坦である。遺物は1層からの出土が大半で、下層にいくに従い、遺物量は少なくなる傾向がある。

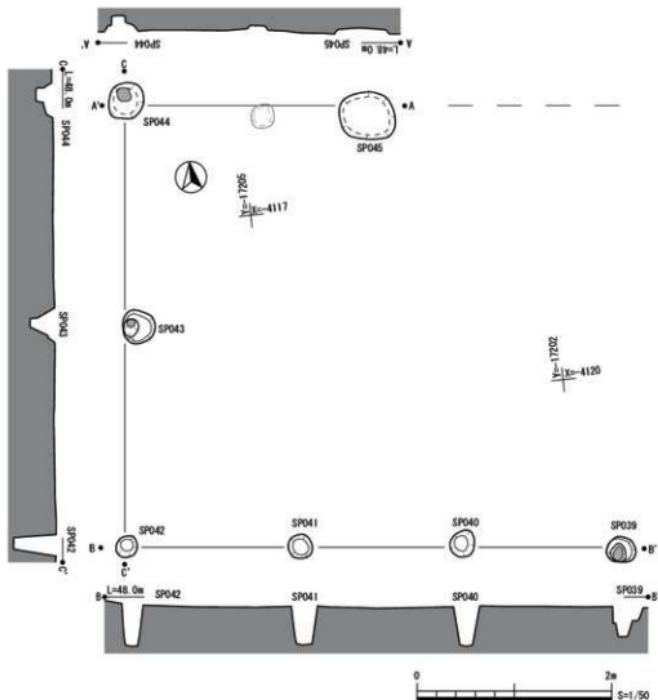


図12 SB005 実測図

概ね遺物は、南半分で多く出土し、中央に向かって下方に遺物が傾いていることから廃棄されたものと考えられる。また、土師器壺類が主体を占め、このほか須恵器壺、皿、壺、甕類、砥石（115）、土鍾などがあるが、中でも土師器耳皿（111）に底部に穿孔が施されたものや須恵器の耳皿（67）が認められることから、祭祀儀礼で使用されたち廃棄された土坑の可能性を指摘できる。時期はSK001と同様に9世紀中葉であろう。

SK005（図19 図版9）

調査区北西に位置する。楕円形を呈し、断堀り状を呈する。テラス部分に焼土範囲が認められる焼土坑である。2層及び3層からの出土が多く、土師器壺類、甕、須恵器甕類、綠釉陶器碗、鉄釘などが出土した。時期は、9世紀中葉であろう。

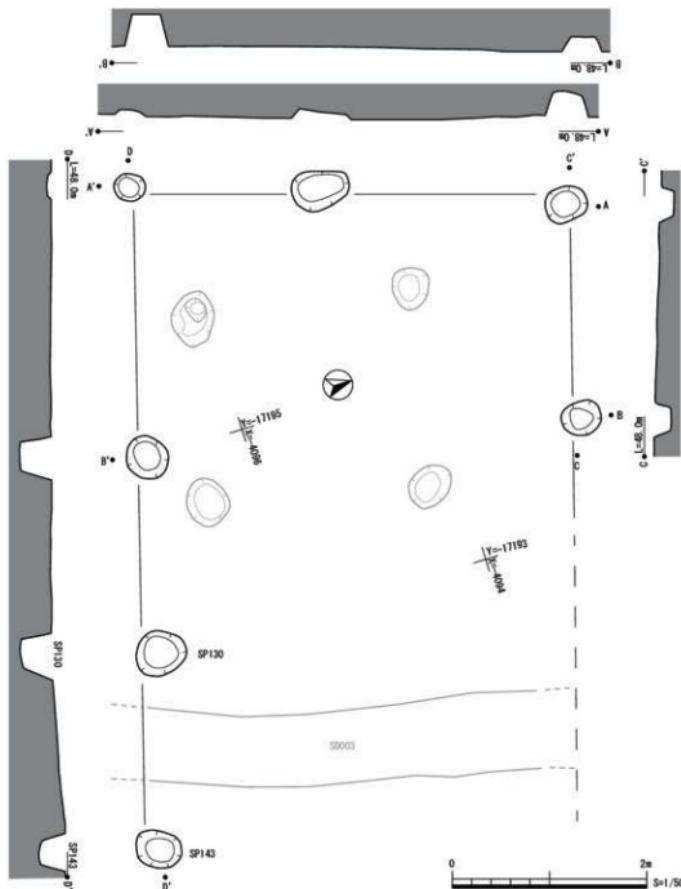


図13 SB006 実測図

SK007 (図7 図版-)

調査区中央西寄りに位置する。楕円形を呈し、長径 0.8 m を呈する。断面は箱状で、深さ 0.4 m である。底面には砂岩製の石が確認された。遺物は出土しておらず、覆土から近世以降と考えられる。

SK008 (図7 図版-)

SK007 の西隣りに位置する。楕円形で長径 0.6 m 深さ 0.4 m である。遺物は出土しておらず、覆土から SK007 と同様に近世以降と考えられる。

SK013 (図20 図版9)

調査区北壁東側に位置する。調査区北壁にかかっているため全体の形状は不明であるが、径 1.9 m の半円形を呈する。深さは 0.2 m である。出土遺物は、土師器坏類が主体を占め、なかでも底部穿孔の土師器皿(128)があることから祭祀・儀礼に関わる土坑の可能性がある。出土土器より 9 世紀中葉と考えられる。

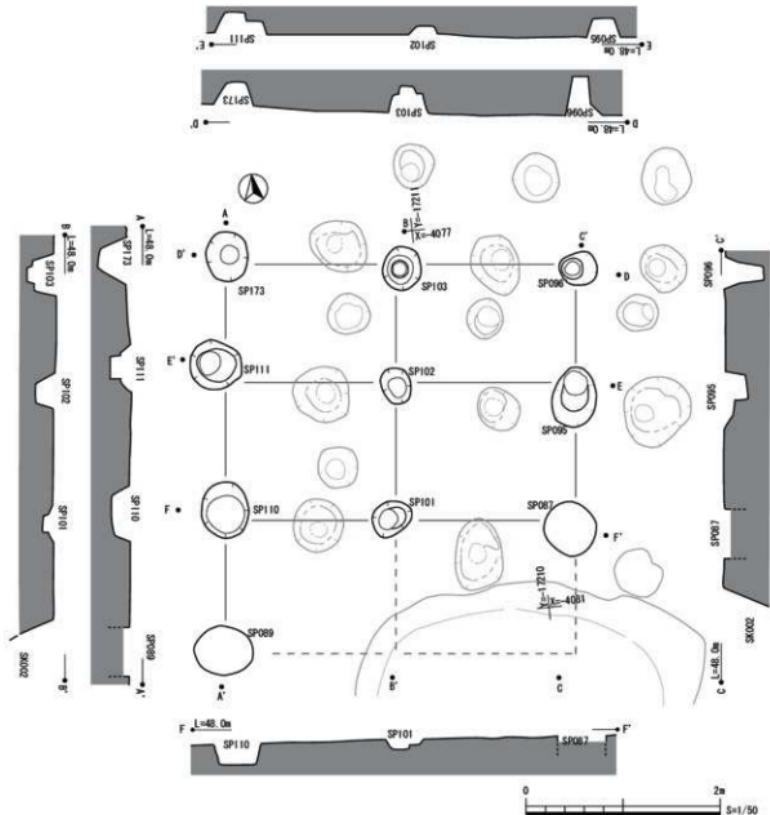


図 14 SB007 実測図

SX001 (図21 図版-)

SX002 の北側に位置し、北壁にかかる。全体の形状は不整形であるものの方形を呈する可能性がある。覆土には焼土が認められるものの、カマドを構成する粘土等は確認できなかった。掘り方は平坦ではないが、小穴が複数みられることからなんらかの作業場もしくは工房の可能性がある。

SX002 (図22 図版-)

SB001 の東側で検出され、長さ 7.9 m 幅 2.4 ~ 1.4 m 深さ 0.2 m である。平面形は不整形で浅い。ただ、SB001 の軸方位に平行しているとともに、出土遺物も SB001 と同時期であることから区画する意図があった可能性が高い。

SD001 (図23 図版-)

調査区西側で検出された。長さは 30 m 幅 0.4 m、深さ 0.1 m で北西側にさらに延びる。遺物はなく、地割に沿っていることから近世以降のものと考えられる。なお、トレンチ調査では、その下層からは奈良～平安

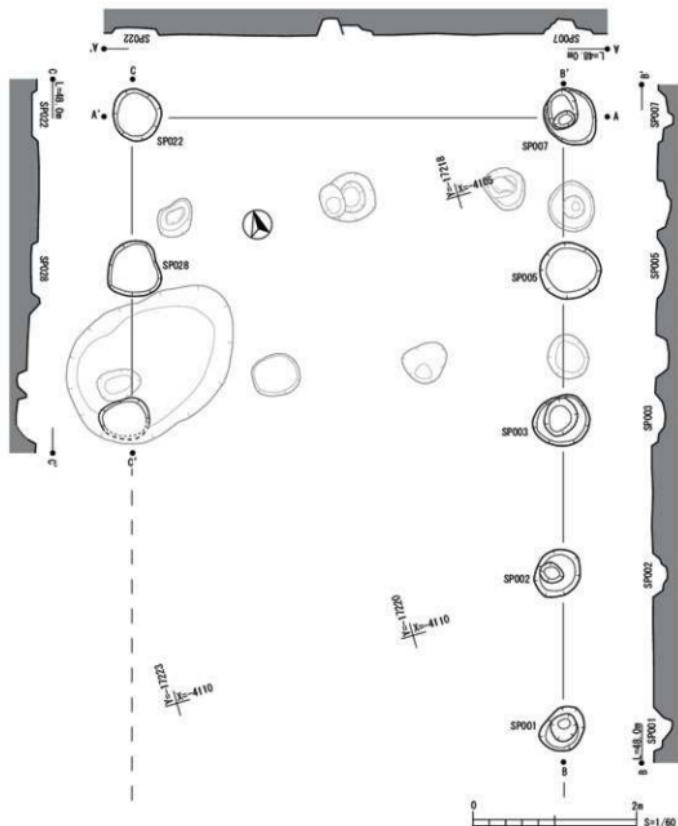


図15 SB009 実測図

時代の溝状の落ち込みが2条確認（SD004・005）できた。この場所は地形の変換点であることから区画溝としての性格が考慮される。

SD003（図7 図版-）

調査区の東側で検出された。長さは34m以上、最大幅1.8m、深さ0.2mである。SD001と平行であることと地割に沿っていることから近世以降のものと考えられる。SD003の東側は一段高くなつておらず、等高線からもこの場所は地形の変換点であることがわかる。

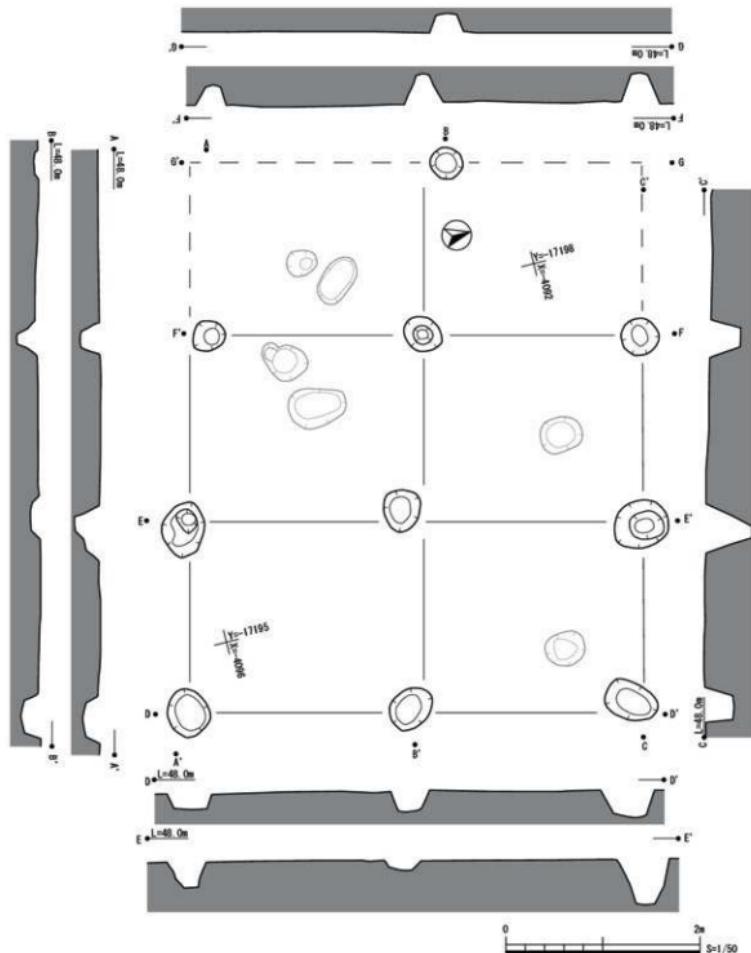


図16 SB010実測図

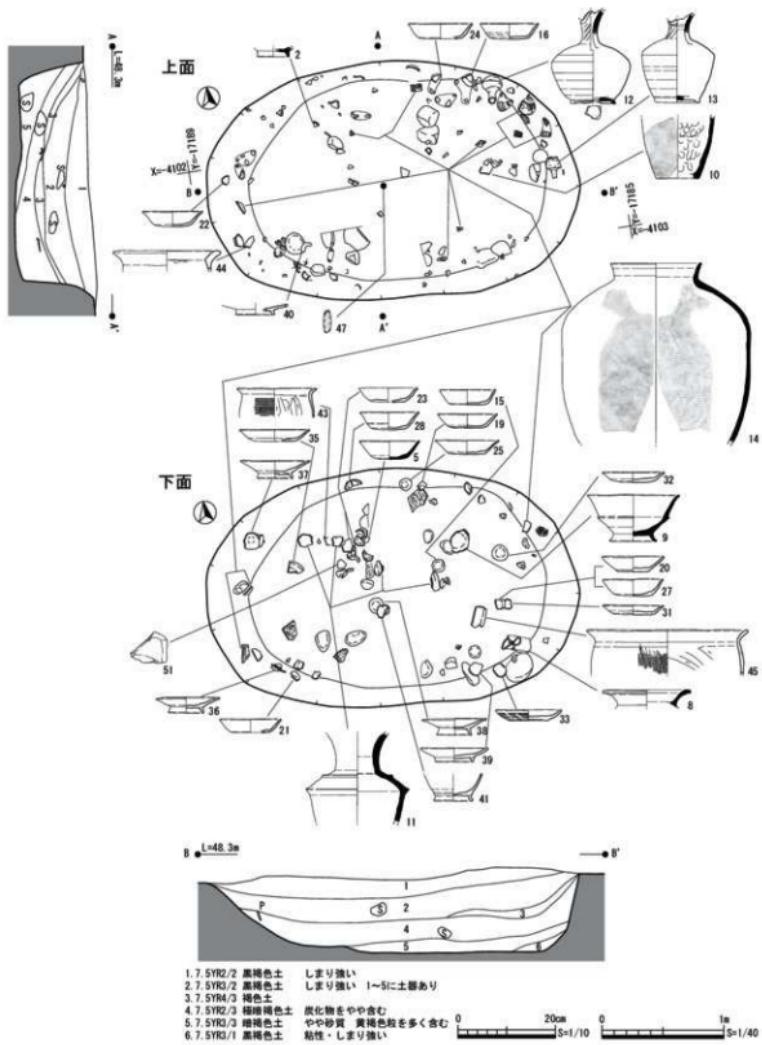


図 17 SK001 実測図

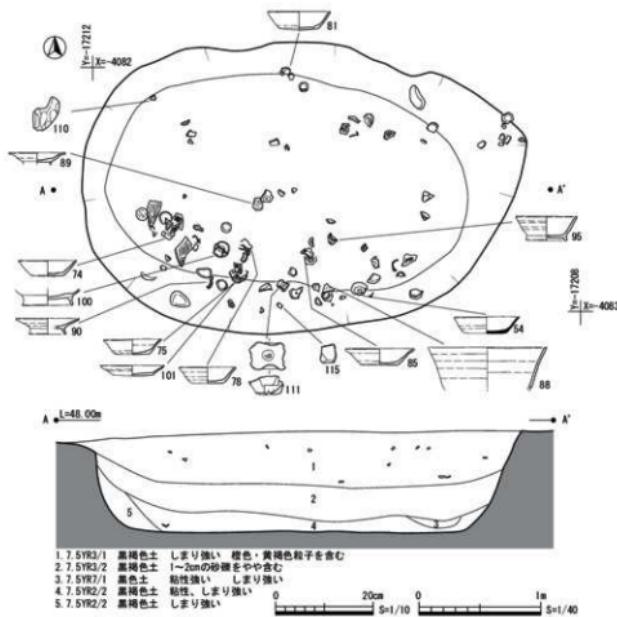


図 18 SK002 実測図

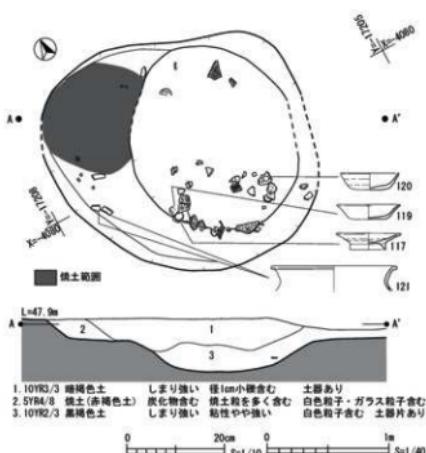


図 19 SK005 実測図

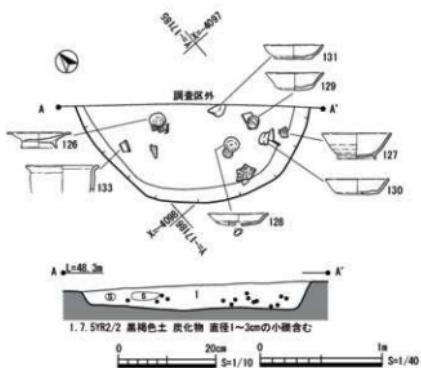


図 20 SK013 実測図

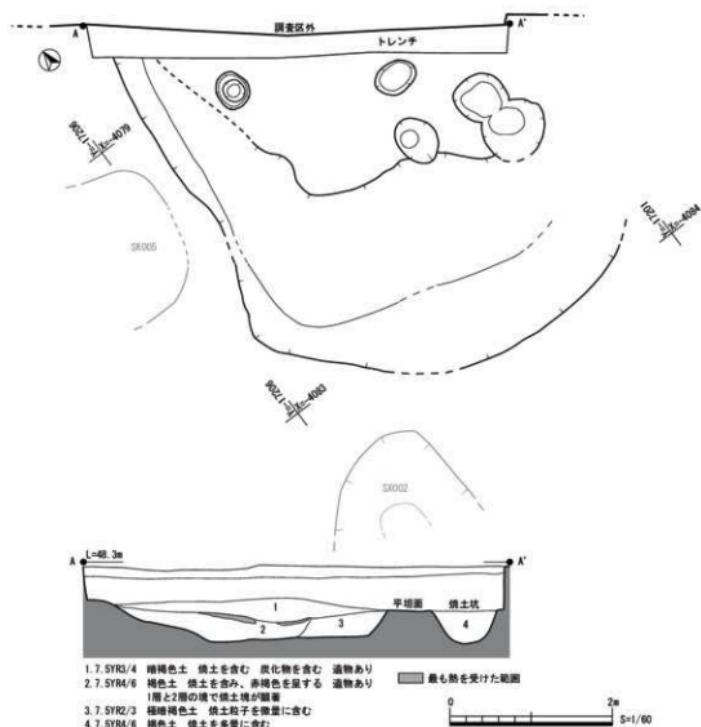


図 21 SX001 実測図

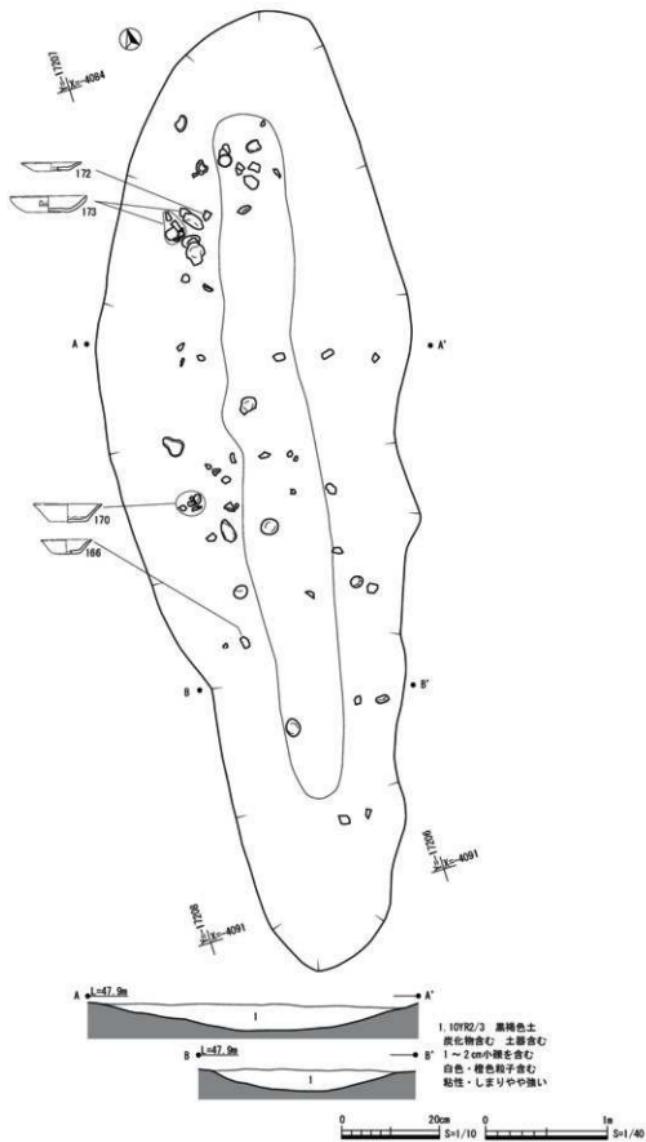


図 22 SX002 実測図

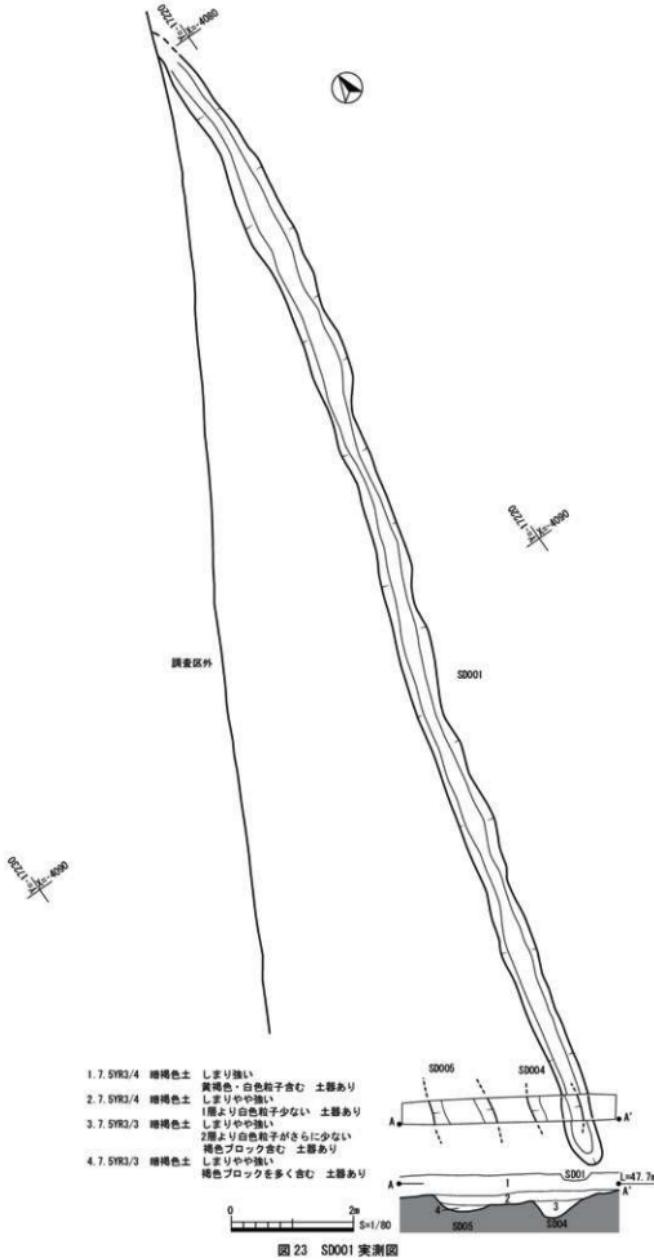


図 23 SD001 実測図

2 遺 物

概 要

赤星石道遺跡では遺物収納箱に換算して45箱分の遺物が出土した。そのうち大半が土器で、土製品（土錐）11点、石製品7点、鉄釘4点が出土した。

土器は土師器、須恵器で構成され、墨書き器1点、図示できるもので縁輪陶器2点、越州窯系青磁4点が出土した。とくに須恵器高台壺裏に「依麻口」を記しており、人名を記した墨書き器として注目される。また、縁輪陶器碗、越州窯系青磁が出土していることからも一般的な集落とは異なる性格を見出すことができる。

9世紀中葉以降の土器が多いため、おのずと須恵器よりも土師器の出土量が多い傾向にある。なかでも壺類が主体を占め壺、瓶などの煮沸具は少ない状況であった。

特殊な土器として、口縁部を打ち欠き、底部穿孔のある須恵器長頸壺、土師器皿、土師器耳皿、須恵器耳皿などが出土した。

SK001 出土遺物（図24・25・26 図版13・14・15）

1は須恵器摘蓋である。2、3は須恵器高台壺である。4、5は須恵器無台壺である。6は脇に低い高台がつく。8世紀代であろう。7は須恵器壺の口縁か。8は須恵器の壺である。9は高台碗である。体部下半に突帯が1条巡る。高台は外反し、ふんばる形態である。焼成は良好で硬質である。8世紀代と考えられる。

10は須恵器である。外面はタタキがつき、内面はナデ調整が施される。11は須恵器長頸壺である。口縁部、底部を欠失している。荒尾座か。体部上半部には2条の突帯が巡る。全面に自然釉がつき、体部に垂壁片が付着する。12は須恵器長頸壺である。口縁部は意図的に打ち欠いている。底部は中央に径3cmほどの穿孔が認められる。体部はやや丸みを帯び体部径に比して頸部径は細い。頸部外面には絞り痕が残る。13は須恵器長頸壺である。体部上半部で屈曲が強い。外面は摩耗している。この土器も口縁部から頸部にかけて意図的に打ち欠いていると考えられる。14は須恵器壺である。内外面ともにタタキが残る。内面には2種のタタキ痕が認められ、体部上位に目の細かいタタキ、下位に目の粗いタタキが施される。頸部は短い頸部が外方に延びる。

15～30は土師器無台壺である。口径11cm台～13cm台で、器高は2.9cm台～3.7cm台である。底部は平底であるが、26、28はやや丸みを帯びる。17、18は箱型を呈する。20は他の個体に比して口径に対し底径は小さい。23はナデにより口縁部が外反する。24は底部外面に板ナデが残る。25は内外面ともに磨滅しており被熱を受けている。28は他よりやや器高が高く、体部下半にロクロ痕が残る。29は強い横ナデにより口縁部に段差がつく。内外面は摩減している。7世紀後半から8世紀代であろう。

31～35は土師器皿である。31、32は横ナデにより口縁部はやや外反する。33の外面はロクロ痕が明瞭で、底部は上げ底である。34は内外面ともに磨減している。35は口径14cm台でナデにより口縁部はやや外反する。

36～40は土師器高台付皿である。36は口縁部が歪むものの丁寧な造りである。37の体部は直線的に延びる。38の口縁部はやや外反し、高台はやや高い。39の高台はやや外反気味に立ち上がる。40は角高台がつく。

41は土師器高台壺である。ハの字に開く高台がつく。

42～45は土師器壺で、鉢状を呈する。42は薄手で、口縁部は外反する。43は小型壺で、外面は横ハケ、内面は下方からナデ調整が認められる。44の口縁部断面は厚手で、強く屈曲する。45の外面は縱ハケ、内面は斜め方向のナデが認められる。

46～49は土錐である。50は鉄釘である。頭部は欠損している。51は砥石である。磨面は4面あり、砂岩である。

SK002 出土遺物（図27・28・29 図版16・17）

52～54は須恵器無台壺である。55は須恵器壺の口縁部である。56は須恵器高台壺である。57は須恵器平瓶の口縁部か。58は須恵器壺の体部片で、外面に格子状のタタキが残る。59は須恵器壺で、頸部は短く垂直に立ち上がる。口縁端部はつまみ上がる。60は壺の底部片で、やや上げ底を呈する。61～63は須恵器壺の口縁部である。64～66は須恵器皿である。67は須恵器耳皿である。片側の折り返しのみ残存している。68

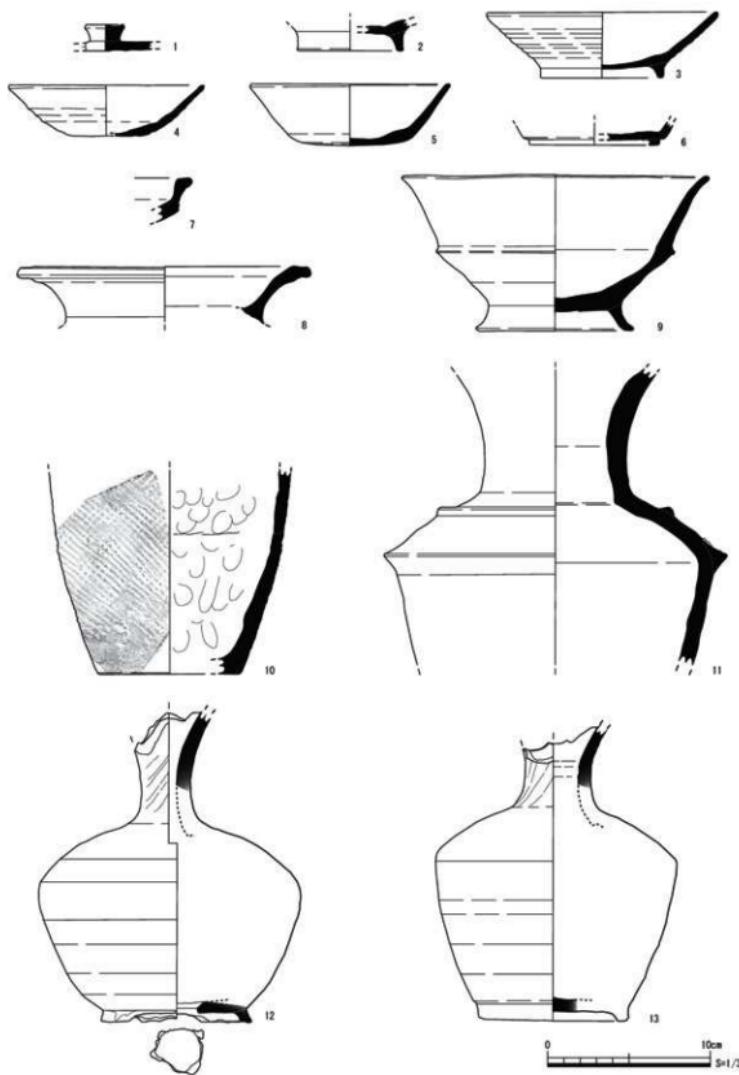
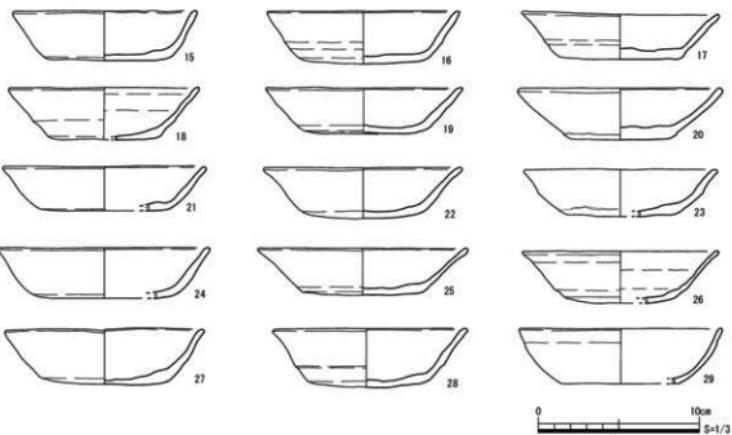
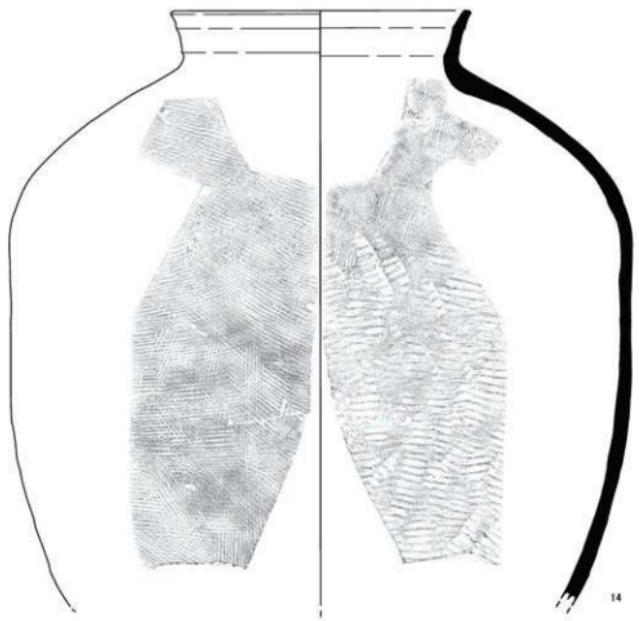


図24 SK001出土遺物 - 1



0 10cm 5=1/3

図25 SK001出土遺物 - 2

~87は土師器無台壺である。これらの壺は口径12cm台~16cm台、器高3.1cm~3.6cm台におさまる。底部は平底のものとやや丸みを帯びるものがある。内外面ともに赤彩が施されるものの磨滅により遺存状況は良好ではない。69は内外面に油煙痕がみられることから灯明壺として用いられたであろう。88は大型の壺であろうか。89~92は土師器高台付皿である。90の口縁部は外反する。90の体部は直線的に延びる。高台は高く、への字に広がる。91は外反しながら立ち上がる。高台は高く厚い。93~100は土師器高台壺である。95、96は器高が5cm~5.7cm台で深い。97は大型であるので鉢と呼ぶべきかもしれない。高台は外方に開き、体部は直線的に立ち上がる。98、99は大型の壺である。98は口径20cmで、体部は直線的である。99はやや内湾しながら立ち上がる。100は高い高台がつく。

101~104は土師器皿である。101の口縁部は内湾しながら立ち上がる。102、103の口縁部は外反する。104は大型の皿で、口径18.2cm、器高1.6cmである。口縁部は外反する。

105、106は黒色土器の皿で内湾しながら立ち上がる。内外面ともに横方向のミガキが認められる。8世纪代と考えられる。

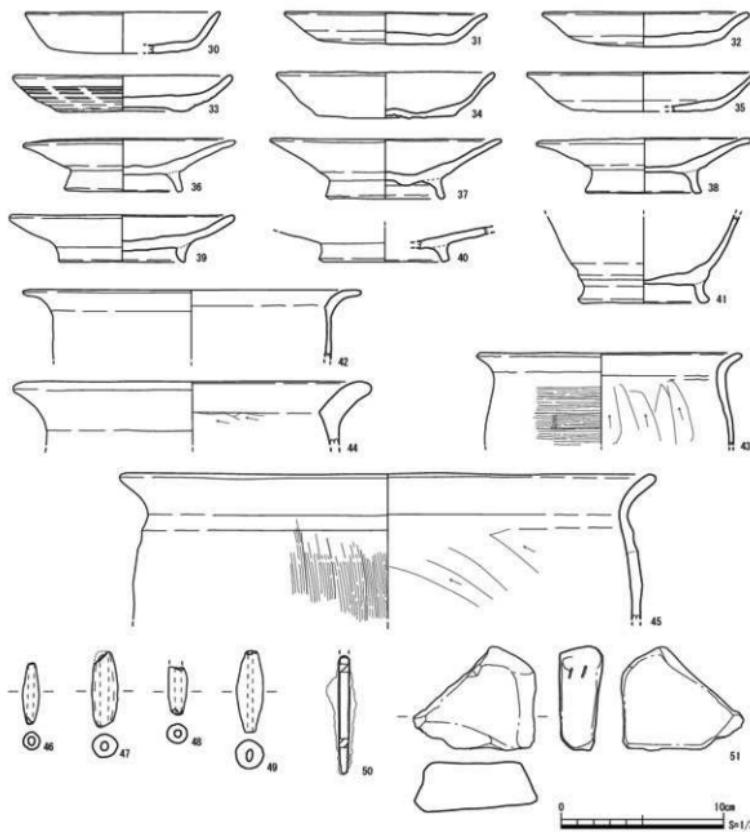


図26 SK001出土遺物-3

107は土師器壺である。口縁部は外方に屈曲し、端部はわずかに下垂する。108は土師器小型壺である。外面の調整は不明であるが、内面は斜め方向の板ナデが施される。109は土師器小型壺で、ロクロ成形である。

110は土師器瓶の把手である。111は土師器耳皿である。折り返し部分は欠損しているが、残存状況からひだをつけている可能性が高い。底部に穿孔が施される。112は縄釉陶器碗である。縄釉はほとんど剥落しており、一部褐黄色を呈する。胎土は灰白色を呈する。113、114は土錘である。115は砥石で、白色凝灰岩である。磨面は2面あり、線状痕がみられる。

SK005 出土遺物（図30 図版18）

116は須恵器高台壺である。壺部は内湾して立ち上がり、端部は丸く仕上げる。全体的に摩耗している。

117は土師器高台壺である。口縁部は直線的に延びる。外面ともに赤彩が施され、外面は高台と壺部との接合痕が観察される。高台はやや内湾しながら外方に延びる。118は土師器高台碗である。内外面に赤彩が施される。低い高台は底部と体部の境につく。119は土師器無台壺である。全体的に摩耗し、赤彩は剥落している。端部にススが付着しており、灯明环として用いられたであろう。120は土師器無台壺である。体部下位は丸みを帯び、外面はヘラ切後、丁寧なナデが施される。焼成は良好である。121は土師器壺である。

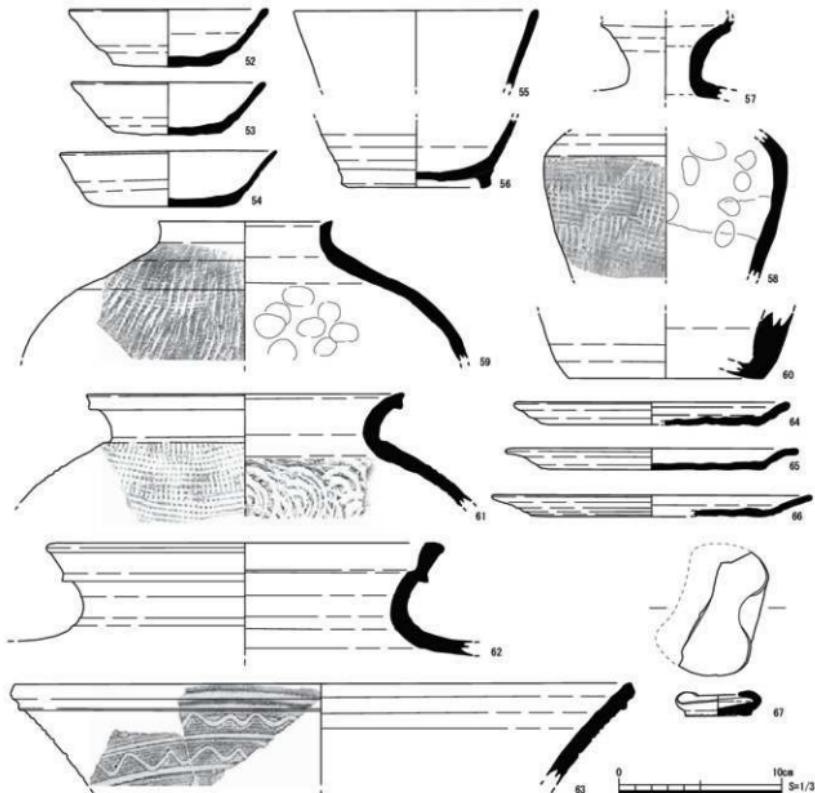


図27 SK005 出土遺物 - 1

頸部は直線的に立ち上がり、口縁部はやや肥厚しながら短く外反する。内外面ともに摩耗している。122は緑釉陶器碗である。胎土は乳白色で、釉薬は薄い黄緑色を呈する。口縁部は短く外方に屈曲する。123は折釘である。

SK013 出土遺物（図30 図版18）

124は須恵器の高台坏で、端部は外方に延びる。表面は全体的に摩耗している。125は須恵器で低い角高台がつく。

126は土師器高台坏である。内外面に赤彩が施される。口縁部は外反する。高台と体部との接合痕が観察される。底部はヘラ切後未調整である。127は土師器高台坏である。やや深い坏部で外方に延びる。高台は低い。底部の調整は摩耗しているため不明。128は土師器皿である。内外面に赤彩が施され、完形品である。底部に径2cmほどの穿孔が認められ、外側から穿たれていた。129は土師器無台坏である。内外面とも磨滅しており調整は不明である。130は土師器無台坏で、内外面ともに赤彩が施される。外面底部はヘラ切後ナデ調整で仕上げている。体部は直線的に延びる。131、132は土師器無台坏である。131は内外面赤彩で、摩耗している。体部はやや内湾しながら立ち上がる。132はやや外方に延びる。133は小型の土師器甕である。内外面ともに摩耗しているが、外面は横方向のハケ調整がみられる。口縁部は斜め上方に短く屈曲する。

134、135は土師器甕である。134は内外面に赤彩が施され、口縁部は短く外反する。135は内外面に赤彩が施され、口縁部は短く外反する。

SK014 出土遺物（図30 図版-）

136は須恵器の高台坏である。色調は白色で硬質である。底部はヘラ切未調整である。高台の端部はやや

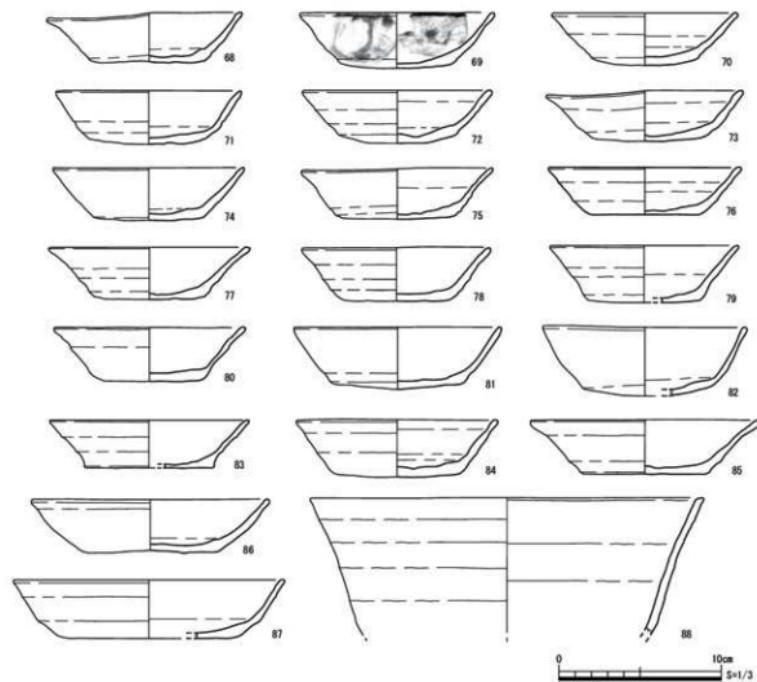


図28 SK002 出土遺物 - 2

外方へ開く。137は須恵器の鉢である。口縁部は内溝することから鉢鉢形を呈する。内外面ともに自然釉が付着する。138は須恵器甕である。口縁端部は欠損している。外面はタタキが残り、自然釉がつく。体部内面には青波海状のタタキが残る。139は須恵器甕である。外面は赤褐色を呈し、タタキが明瞭に残る。体部内面は青波海状のタタキが明瞭に残る。140は土師器甕である。口縁部は短く屈曲する。内外面ともに摩耗しているが、外面はわずかに縦位のハケが残る。141は土師器甕の把手である。外面は摩耗しており、面取りは明瞭ではない。

SB、SP、SD出土遺物（図31 図版19）

142は土鍤である。143は須恵器甕である。口縁部は鋭角に肥厚し、頸部は短く外反する。内外面ともに自

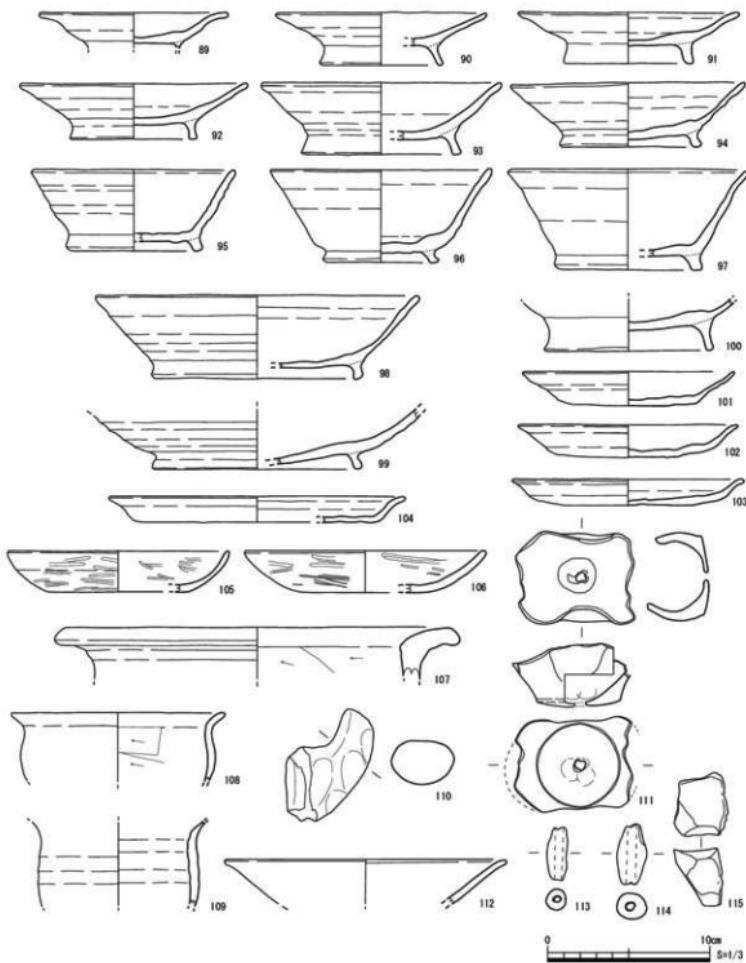


図29 SK002出土遺物-3

然軸が付着する。144は須恵器蓋で、外面は摩耗している。端部は沈線状につく。145は須恵器摘蓋である。ボタン状の低い摘みがつく。外面はケズリ調整後、ナデ調整を施す。146は鉄釘である。木質が一部残る。147は、須恵器摘蓋で、扁平な摘みがつく。全体的に摩耗している。148は越州窯系青磁の底部である。目跡は内外面に残る。大宰府分類I - 5類か。

SX001 出土遺物（図31 図版19）

149は須恵器壺の肩部である。凸帯が1条巡る。150は須恵器の蓋である。硬質でシャープな造りである。口縁部は外反し、端部は斜め方向に延びる。外面はケズリ調整が施される。151は須恵器無台坏である。全

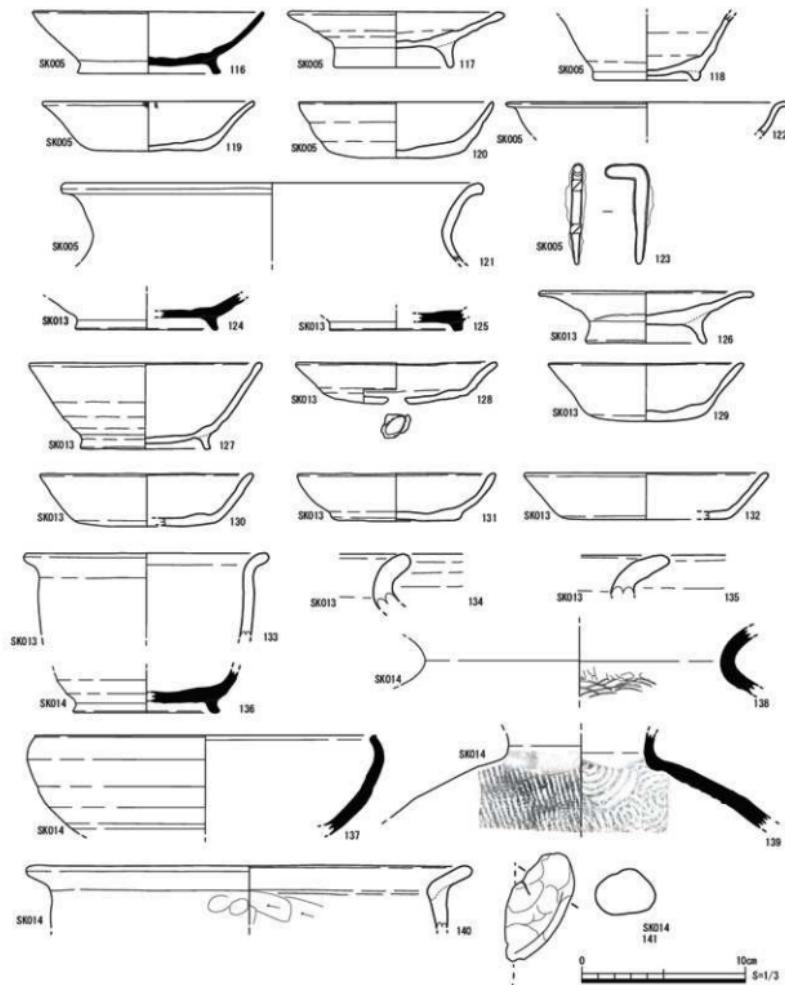


図30 SK005・SK013・SK014出土遺物

体的に摩耗している。口縁部は外反する。152は受け部をもつ須恵器であろうか。153は須恵器壺の底部である。外面にタタキが残る。154は須恵器高台壺である。全体的に摩耗しており、調整は不明。高台は角高台である。155は土師器無台壺である。内外面は赤彩が施されるが大半が剥落している。156～158は土師器無台壺である。内外面は赤彩が施されるものの、大半が剥落している。159は土師器無台壺で、口縁部はやや外反する。160

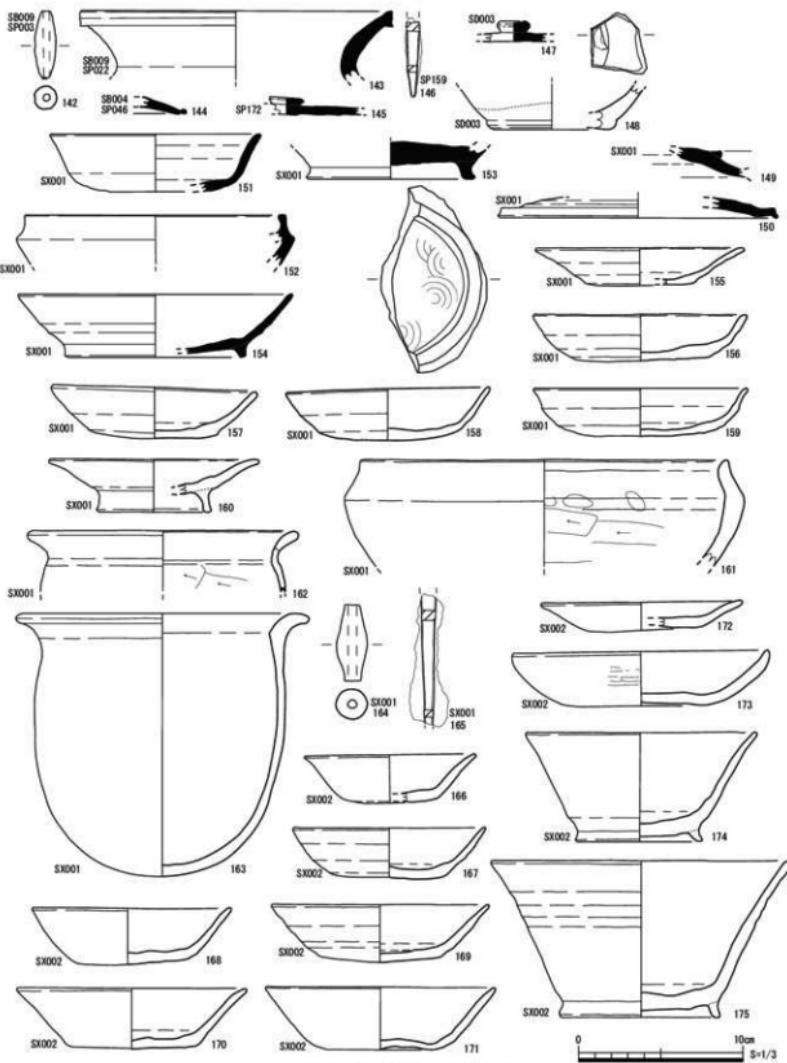


図31 SB、SP、SD、SX出土遺物

は土師器高台坏である。外面とも赤彩が施されているが、摩耗により剥落している。やや高い高台がつき、口縁部は外反する。161は土師器鉢で、外面は被熱を受けている。口縁部はやや内傾する。162は土師器小型壺である。調整は不明。体部は薄手で、口縁部は外方に短く開き、端部は肥厚する。163は土師器小型丸底壺である。外面の調整は不明。口縁部は短く外反し、端部は丸く仕上げる。底部内面から体部下半にかけてケズリ調整が施される。体部上半はナデ調整。164は土錘で、165は鉄釘である。

SX002 出土遺物 (図 31 図版 20)

166～171は土師器坏である。172、173は土師器皿で、173の体部は丸みを帯び、外面に横方向のミガキが施される。8世紀後半であろう。174、175は器高の高い高台坏で、体部は外方に延びる。

包含層出土遺物 (図 32・33 図版 20・21)

176、177は須恵器捕蓋である。178は須恵器無台坏である。179～181は須恵器高台坏である。179は低い高台がつき、X字状のヘラ記号が認められる。8世紀後半であろう。180はやや高い高台がつく。181は底部外面に墨書きが認められる。外面は摩耗しており、墨も薄い。「依麻口」と記される。9世紀前半であろう。

182～186は土師器無台坏である。182、183は箱型を呈する。184、185は口径 12 cm 台で断面はやや厚い。186は内湾する口縁部を有する。外面は強いナデが施される。187は口径 15 cm 台で土師器鉢である。188は高い高台がつき、口縁部は斜め上方に延びる。189はやや高い高台がつき、口縁部は外方に低く延びる。190は土師器高台坏である。191は土師器皿である。口縁部は外反する。192は土師器高坏である。脚部は円形で

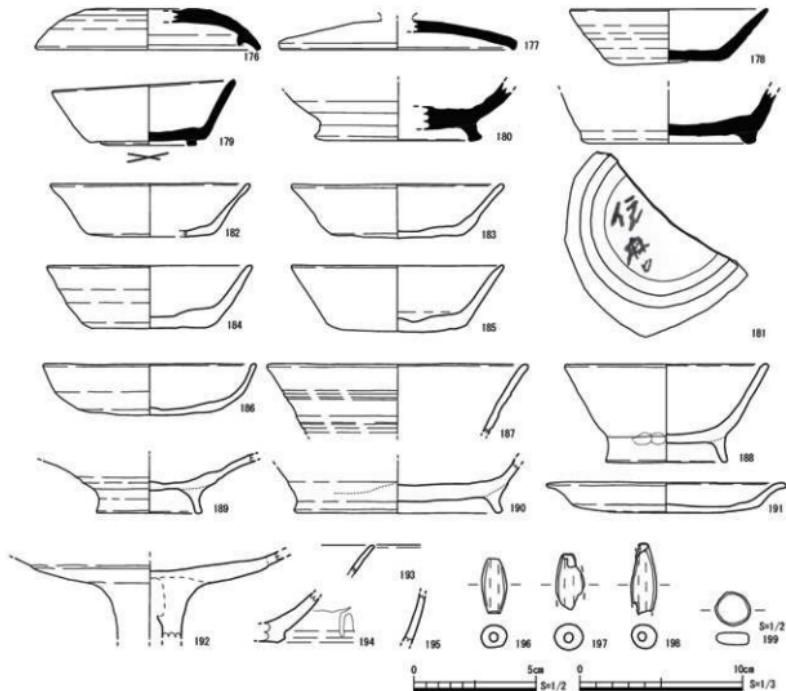


図 32 包含層出土遺物 - 1

ある。坏部下半に段差を持つ。

193～195は越州窯系青磁碗である。193は口縁部片で、釉は黄褐色を呈する。太宰府分類I類か。194は底部片である。釉は黄緑色で、胎土は赤褐色を呈する。太宰府分類I～5類か。195は体部片で、灰オーラブ色を呈している。太宰府分類III類か。196～198は土錘である。199は水晶製で上下面是研磨される。基石であろうか。

200は石皿である。裏面、側面にも研磨が認められ4面の加工面を有する。安山岩である。201は台石である。安山岩である。202は台石である。加工面は2面有する。203は安山岩で石皿である。

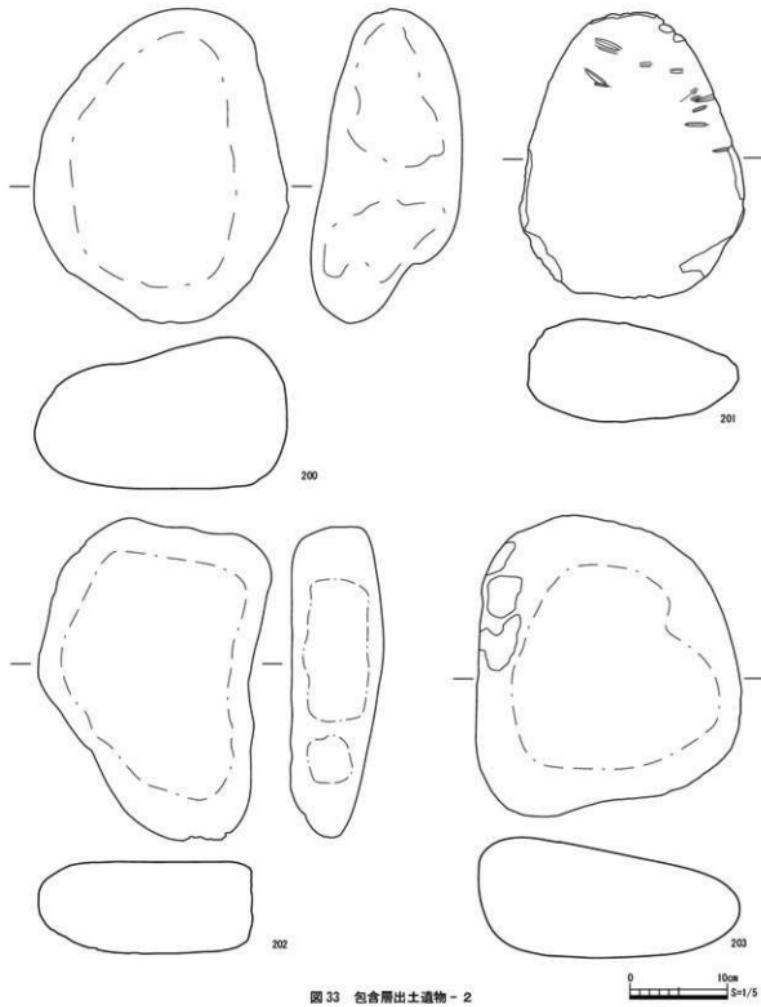


図33 包含層出土遺物 - 2

表4 土器観察表(1)

遺物 番号	桜井 番号	出土 位置	種類	基盤	部位	残存 率 (%)	口径 (cm)	底径 (cm)	基高 (cm)	色調(外面)	色調(内面)	備考	
1	-	SK001	須恵器	蓋	ツマミ	-	-	1.60	灰SY6/1	灰SY6/1	ツマミのみ残存		
2	-	SK001	須恵器	高台坪	底部	20	-	(6.0)	1.80	灰7 SY5/1	灰10SY5/1	内外面摩滅 貼付高台	
3	-	SK001	須恵器	高台坪	口縁部 ~底部	50	(14.2)	7.6	4.00	灰2 SY7/1	灰2 SY7/1	内外面摩滅 貼付高台	
4	-	SK001	須恵器	坪	口縁部 ~底部	20	(12.0)	(4.7)	3.10	灰7 SY6/1	灰7 SY4/1		
5	13	SK001	須恵器	坪	口縁部 ~底部	70	12.0	6.4	3.80	灰SY5/1	灰SY5/1	側面不良	
6	-	SK001	須恵器	高台坪	底部	20	-	(7.9)	1.40	灰SY6/	灰SY6/	貼付高台	
7	-	SK001	須恵器	蓋	口縁部	-	-	-	2.70	灰赤10SY6/1	にぶい赤2 SY8/3		
8	-	SK001	須恵器	蓋	口縁部	40	(9.0)	-	3.50	灰黄2 SY6/1	灰黄2 SY7/2		
9	13	SK001	須恵器	高台坪	口縁部 ~底部	50	(18.4)	9.6	9.50	にぶい赤褐7 SY8/4	黄褐2 SY5/3	外面薄・灰付蓋 垂み有	
10	-	SK001	須恵器	不明	底部 ~底部	15	-	(8.4)	12.50	赤褐10SY5/6	赤褐10SY5/3	外面薄・灰付蓋 室壁片付蓋か	
11	-	SK001	須恵器	長脚蓋	底部 ~底部	40	-	-	18.30	灰白SY/	灰白SY7/1	内外面に赤黒輪付帶 室壁片付蓋	
12	13	SK001	須恵器	高台付長脚蓋	底部 ~底部	90	-	8.0	19.00	灰SY5/1 明赤褐2 SY5/5	赤皮2 SY5/5	口縫部打ち欠きか 底部に打ち欠き穿孔 貼付高台	
13	-	SK001	須恵器	高台付長脚蓋	底部 ~底部	90	-	8.0	18.00	灰SY5/1	灰SY5/1	外面摩減・口縫部打ち欠きか 底部に歯り痕 貼付高台	
14	14	SK001	須恵器	蓋	口縁部 ~底部	40	18.6	-	37.00	灰 SY/	灰SY/		
15	-	SK001	土器器	坪	口縁部 ~底部	100	10.9	7.0	3.10	浅褐SY8/3	にぶい黄SY7/4	外外面に赤影	
16	-	SK001	土器器	坪	口縁部 ~底部	40	(11.8)	(6.2)	3.30	赤SY6/8	橙2 SY8/6	内外面摩滅 外外面赤斑状痕	
17	14	SK001	土器器	坪	口縁部 ~底部	80	12.2	7.4	2.95	にぶい黄褐10YR7/3	にぶい黄褐10YR7/3	外外面摩滅・外外面に赤影痕	
18	-	SK001	土器器	坪	口縁部 ~底部	20	(11.8)	(7.0)	3.20	明赤褐2 SY5/6	明赤褐2 SY5/6	外外面に赤影	
19	-	SK001	土器器	坪	口縁部 ~底部	30	(12.0)	(7.0)	2.85	にぶい黄SYR7/4	橙SYR7/6	外外面摩滅・板状底直稜 外外面に赤影痕	
20	-	SK001	土器器	坪	口縁部 ~底部	30	(12.4)	(6.1)	3.20	浅褐SYR8/2	にぶい黄SYR6/3	外外面に赤影・外底面に黒斑	
21	-	SK001	土器器	坪	口縁部 ~底部	20	(12.4)	(7.6)	2.70	にぶい黄2 SY8/6	にぶい黄2 SY8/6	外外面に赤影	
22	-	SK001	土器器	坪	口縁部 ~底部	20	(12.6)	(7.6)	3.20	橙2 SY8/6	浅赤褐2 SYR7/4	外外面摩滅・外外面に赤影痕	
23	-	SK001	土器器	坪	口縁部 ~底部	40	(11.8)	(6.4)	2.90	橙SYR7/6	橙SYR7/6	外外面摩滅・外外面に赤影痕	
24	-	SK001	土器器	坪	口縁部 ~底部	20	(13.0)	(7.7)	3.10	浅赤褐2 SYR7/4	浅赤褐2 SYR7/4	外外面に赤影 外底面赤斑状痕	
25	-	SK001	土器器	坪	口縁部 ~底部	50	(12.6)	7.6	2.90	にぶい黄褐10YR6/4	にぶい黄褐10YR6/4	外外面摩滅・被熱痕	
26	-	SK001	土器器	坪	口縁部 ~底部	20	(12.2)	(7.0)	3.20	橙SYR8/8	橙2 SYR7/6	内面に赤斑痕	
27	14	SK001	土器器	坪	口縁部 ~底部	80	12.1	7.8	3.40	浅黄褐10YR8/4	浅黄褐2 SYR8/4	外外面摩滅・外外面に赤影痕	
28	-	SK001	土器器	坪	口縁部 ~底部	50	(11.7)	7.3	3.70	にぶい黄2 SY8/6	橙7 SYR8/6	内底面に赤影痕	
29	-	SK001	土器器	坪	口縁部 ~底部	15	(12.6)	(7.2)	3.40	黑褐10YR3/1	黑褐10YR3/1	外外面摩滅	
30	-	SK001	土器器	坪	口縁部 ~底部	20	(12.0)	(8.8)	2.50	明赤褐SY5/6	明赤褐SY5/6	外外面に赤影	
31	14	SK001	土器器	皿	口縁部 ~底部	60	(12.5)	7.5	2.00	浅黄褐2 SYR8/4	浅黄褐2 SYR7/4	外外面摩滅・外外面に赤影痕	
32	-	SK001	土器器	皿	口縁部 ~底部	99	12.5	7.4	2.10	橙2 SY8/6	橙2 SY8/6	垂み有 外外面に赤影	
33	-	SK001	土器器	皿	口縁部 ~底部	60	(13.2)	6.2	2.20	浅褐SYR8/3	浅褐SYR8/3	外外面に赤影	
34	-	SK001	土器器	皿	口縁部 ~底部	30	(13.4)	(8.6)	2.80	明赤褐2 SYR5/8	明赤褐2 SYR5/8	外外面に赤影痕	
35	-	SK001	土器器	皿	口縁部 ~底部	25	(14.0)	(8.4)	2.40	橙SYR7/6	にぶい黄SYR7/4	垂み有 外外面に赤影 外底面赤切りか	
36	14	SK001	土器器	高台皿	口縁部 ~底部	97	12.6	6.7	3.30	橙2 SYR7/6	橙2 SYR7/6	外外面に赤影 外底面赤切りか	
37	15	SK001	土器器	高台坪	口縁部 ~底部	40	(13.6)	(6.8)	3.70	橙2 SYR6/6	橙2 SYR6/6	外外面摩滅 貼付高台	
38	-	SK001	土器器	高台坪	口縁部 ~底部	100	12.8	6.1	4.30	橙2 SYR7/6	浅黄褐2 SYR8/4	外外面摩滅 貼付高台	
39	-	SK001	土器器	高台坪	口縁部 ~底部	40	(13.4)	7.5	2.85	浅褐SYR8/4	浅褐SYR8/4	外外面に赤影 貼付高台	
40	-	SK001	土器器	高台付 高台坪	口縁部 ~底部	30	-	(7.2)	2.10	橙2 SYR7/6	橙SYR7/6	外外面摩滅 貼付高台	
41	-	SK001	土器器	坪	口縁部 ~底部	40	-	-	7.2	5.30	浅褐SYR8/3	橙SYR7/6	外外面に赤影 貼付高台
42	-	SK001	土器器	蓋	口縁部 ~底部	10	(20.8)	-	4.30	にぶい黄2 SYR6/4	にぶい黄2 SYR7/4	外外面摩滅	
43	-	SK001	土器器	蓋	口縁部 ~底部	10	(16.8)	-	5.70	褐皮SYR4/1	にぶい黄SYR6/4		
44	-	SK001	土器器	蓋	口縁部 ~底部	10	(10.4)	-	3.90	橙2 SYR7/6	にぶい黄2 SYR7/3		
45	16	SK002	須恵器	坪	口縁部 ~底部	20	(16.1)	-	9.00	にぶい黄褐10YR7/3	にぶい黄SYR6/4		
46	-	SK002	須恵器	坪	口縁部 ~底部	30	(11.8)	(6.5)	3.20	赤SY5/1	赤SY5/1	外外面に付着物、油焼か	
47	27	SK002	須恵器	坪	口縁部 ~底部	30	(11.8)	-	-	赤SY5/1	赤SY5/1		

表 5 土器観察表 (2)

通物 番号	掉國 番号	国版 番号	出土 位置	種別	器種	部位	残存 率 (%)	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	色調 (外面)	色調 (内面)	備考	
54	16	SK002	須恵器	坪	口縁部 ～底部	80	11.3	8.2	3.40	灰白SY7/1	灰白SY7/1		内底面摩滅 陶成不良	
55	-	SK002	須恵器	坪	口縁部 ～底部	15	(15.0)	-	4.70	灰 SY5/	灰SY5/			
56	-	SK002	須恵器	高台付 盤	脚部下 ～底部	30	-	(9.6)	4.10	にぶい黄褐色SY5/3	にぶい黄7 SYR5/3	貼付高台		
57	-	SK002	須恵器	平底	底部	100	-	-	5.10	にぶい赤褐色SY5/4	にぶい赤褐色SY5/4			
58	-	SK002	須恵器	盤	脚部～ 底部	20	-	-	8.90	黄2 SY4/1	オーリーブ2 SY6/1			
59	-	SK002	須恵器	盤	口縁部 ～底部	15	(10.6)	-	8.50	黄灰2 SY6/1	灰SY6/1			
60	27	SK002	須恵器	盤	底部	20	-	(12.0)	4.00	灰SY5/	灰SY5/1			
61	16	SK002	須恵器	盤	口縁部 ～底部	40	(19.6)	-	6.90	黄灰2 SY6/1	灰SY6/1		外表面タキ 内面同心円当真底	
62	-	SK002	須恵器	盤	口縁部 ～底部	30	(24.4)	-	6.90	灰2 SY5/1	灰2 SY5/1			
63	-	SK002	須恵器	盤	口縁部 ～底部	10	(28.0)	-	6.20	灰SY4/1	灰SY4/1		外面上へラ書き波文状と沈綱文	
64	-	SK002	須恵器	盤	口縁部 ～底部	40	(16.6)	(12.1)	1.40	オーリーブ灰100Y5/1	オーリーブ灰100Y5/1			
65	16	SK002	須恵器	皿	口縁部 ～底部	35	(18.0)	(14.2)	1.30	オーリーブ2 SY6/1	オーリーブ2 SY6/1			
66	-	SK002	須恵器	皿	口縁部 ～底部	20	(19.6)	(14.4)	1.30	オーリーブ灰100Y6/2	オーリーブ灰100Y6/2			
67	-	SK002	須恵器	耳皿	口縁部 ～底部	50	(2.5)	(4.0)	3.10	灰2 SY4/1	灰黄褐色SY5/2			
68	16	SK002	土師器	坪	口縁部 ～底部	75	12.0	7.2	3.10	暗SY7/6	暗SY7/6		垂み有	
69	-	SK002	土師器	坪	口縁部 ～底部	25	(12.0)	(7.0)	3.40	にぶい黄褐色SY7/4	明赤褐2 SYR5/6		油脂付着(紅明褐) 外面摩滅 内面に赤影痕	
70	-	SK002	土師器	坪	口縁部 ～底部	20	(11.4)	(8.6)	3.20	暗7 SYR7/6	にぶい暗7 SYR7/4	内外面摩滅		
71	-	SK002	土師器	坪	口縁部 ～底部	40	(11.4)	7.1	3.30	にぶい暗7 SYR7/4	にぶい暗7 SYR7/4			
72	-	SK002	土師器	坪	口縁部 ～底部	25	(10.8)	(7.2)	3.20	暗SYR6/6	暗SYR6/6		内面に赤影痕	
73	16	SK002	土師器	坪	口縁部 ～底部	75	13.0	6.7	3.10	赤褐2 SYR4/8	赤褐2 SYR4/8		内外面に赤影 外面上に赤影物	
74	-	SK002	土師器	坪	口縁部 ～底部	25	(11.8)	(8.8)	3.20	にぶい黄褐色SY7/4	にぶい黄褐色SY7/4		内外面摩滅 内面に赤影痕	
75	16	SK002	土師器	坪	口縁部 ～底部	50	11.8	7.7	3.10	明黄褐2 SYR5/6	明黄褐2 SYR5/6		内面に付着物、植物か 内外面に赤影物 外表面に斜削状にへら切り底	
76	-	SK002	土師器	坪	口縁部 ～底部	25	(11.8)	(8.8)	2.90	にぶい黄褐色SY7/4	にぶい黄褐色SY7/4		内外面摩滅 内面に赤影痕	
77	-	SK002	土師器	坪	口縁部 ～底部	25	(12.4)	(8.8)	3.20	暗SYR6/6	暗SYR6/6		内外面に赤影痕	
78	28	SK002	土師器	坪	口縁部 ～底部	40	(11.6)	6.6	3.25	明赤褐2 SYR5/6	明赤褐2 SYR5/6		内外面に赤影	
79	-	SK002	土師器	坪	口縁部 ～底部	20	(10.8)	(6.9)	3.50	暗2 SYR6/6	暗2 SYR6/6			
80	16	SK002	土師器	坪	口縁部 ～底部	55	(11.8)	18.5	3.30	赤褐2 SYR4/8	赤褐2 SYR4/8		内外面に赤影	
81	-	SK002	土師器	坪	口縁部 ～底部	25	(12.8)	(8.2)	3.80	にぶい暗7 SYR7/4	にぶい暗7 SYR7/4	内外面摩滅		
82	17	SK002	土師器	坪	口縁部 ～底部	30	(12.6)	(8.1)	4.20	にぶい暗7 SYR7/4	明赤褐2 SYR5/6		内外面摩滅 内外面に赤影痕	
83	-	SK002	土師器	坪	口縁部 ～底部	25	(12.2)	(8.0)	2.90	暗2 SYR6/6	暗2 SYR6/6		内外面に赤影痕	
84	17	SK002	土師器	坪	口縁部 ～底部	40	(12.4)	(7.6)	3.50	明赤褐2 SYR5/6	明赤褐2 SYR5/6		内外面に赤影	
85	-	SK002	土師器	坪	口縁部 ～底部	55	(14.0)	8.0	3.30	にぶい黄褐色SY7/3	にぶい黄褐色SY7/3		内外面摩滅 内外面に赤影痕	
86	-	SK002	土師器	坪	口縁部 ～底部	40	(14.6)	(8.3)	3.30	明赤褐2 SYR5/6	明赤褐2 SYR5/6		内外面に赤影痕	
87	-	SK002	土師器	坪	口縁部 ～底部	20	(16.6)	(11.4)	3.60	暗SYR7/6	暗SYR7/6		内外面摩滅 内外面に赤影痕	
88	-	SK002	土師器	大型坪1	口縁部 ～底部	15	(24.2)	-	8.40	暗7 SYR7/6	暗7 SYR7/6			
89	17	SK002	土師器	高台付 盤	口縁部 ～底部	30	(11.6)	(5.6)	2.20	にぶい黄褐色SY7/4	にぶい黄褐色SY7/4		内外面摩滅 内外面に赤影痕 貼付高台金大橋	
90	-	SK002	土師器	高台付 盤	口縁部 ～底部	30	(13.0)	(7.6)	3.20	暗SYR6/6	暗SYR6/6		貼付高台	
91	17	SK002	土師器	高台付 盤	口縁部 ～底部	70	13.6	8.0	3.10	にぶい暗7 SYR7/4	にぶい暗7 SYR7/4		内外面摩滅 内外面に赤影痕 貼付高台	
92	29	SK002	土師器	高台付 盤	口縁部 ～底部	40	(14.0)	7.8	3.40	暗7 SYR7/6	暗7 SYR7/6		内外面摩滅 内外面に赤影 貼付高台	
93	-	SK002	土師器	高台付 盤	口縁部 ～底部	30	(14.8)	(8.8)	4.40	暗SYR6/6	暗SYR6/6		貼付高台	
94	17	SK002	土師器	高台付 盤	口縁部 ～底部	70	14.4	8.7	3.95	暗7 SYR7/6	明赤褐2 SYR5/6		内面に赤影、外面に赤影痕 貼付高台	
95	-	SK002	土師器	高台付 盤	口縁部 ～底部	25	(12.6)	(8.0)	5.00	暗2 SYR6/6	暗2 SYR6/6		貼付高台	
96	17	SK002	土師器	高台付 盤	口縁部 ～底部	40	(13.6)	7.2	5.70	浅赤褐2 SYR8/4	浅赤褐2 SYR8/4		内面に赤影 貼付高台	
97	29	17	SK002	土師器	高台付 盤	口縁部 ～底部	30	(14.8)	(8.4)	6.20	暗7 SYR7/6	暗7 SYR6/6		貼付高台
98	29	17	SK002	土師器	高台付 盤	口縁部 ～底部	25	(20.0)	(13.0)	5.10	明赤褐2 SYR5/6	明赤褐2 SYR5/6		貼付高台
99	-	SK002	土師器	高台付 盤	脚部下 ～底部	30	-	(12.9)	3.70	暗7 SYR6/6	暗7 SYR6/6		内外面摩滅 外面に赤影痕 貼付高台	

表 6 土器観察表(3)

遺物 番号	桝印 番号	國版 番号	出土 位置	種別	基盤	部位	残存 率 (%)	口径 (cm)	底径 (cm)	基高 (cm)	色調(外面)	色調(内面)	備考
100	29	-	SK002	土師器	高台坪	底部	90	-	10.4	3.20	にぶい黄褐色10YR7/4	にぶい黄褐色10YR7/4	内外面摩擦 高台外面に赤彩痕か 貼付高台
101		-	SK002	土師器	皿	口縁部 ～底部	40	(13.0)	8.6	2.10	灰白色10YR8/2	明黄褐色10YR7/6	内外面に赤彩痕 内面摩擦
102		-	SK002	土師器	皿	口縁部 ～底部	75	(13.0)	8.6	2.10	橙7.SYR7/6	にぶい橙7.SYR7/4	内外面摩擦
103		-	SK002	土師器	皿	口縁部 ～底部	25	(14.2)	(8.4)	1.60	橙7.SYR7/6	にぶい橙7.SYR6/4	
104		-	SK002	土師器	皿	口縁部 ～底部	20	(18.2)	(15.0)	1.60	橙7.SYR7/6	橙7.SYR6/8	
105		-	SK002	黑色土器	皿	口縁部 ～底部	20	(13.0)	(8.6)	2.50	にぶい赤褐SYR5/4	にぶい赤褐SYR5/4	
106		-	SK002	黑色土器	皿	口縁部 ～底部	25	(14.8)	(8.4)	2.60	灰黒褐色10YR8/2	灰黒褐色10YR5/2	
107		-	SK002	土師器	盤	口縁部	20	(25.0)	-	3.20	橙7.SYR6/6	橙7.SYR6/6	
108		-	SK002	土師器	盤	口縁部	25	(13.2)	-	4.20	橙7.SYR7/6	橙7.SYR7/6	外表面摩擦
109		-	SK002	土師器	盤	脚部	-	-	5.20	にぶい赤褐SYR5/4	橙7.SYR6/6		
110		-	SK002	土師器	瓶	把手	100	-	-	6.90	橙7.SYR7/6	にぶい橙7.SYR7/4	
111	17	-	SK002	土師器	耳皿	口縁部 ～底部	75	4.3~ 8.5	5.0	3.90	橙SYR6/6	橙SYR6/6	底部破壊穿孔 内外面に赤彩
112	-	-	SK002	輪胎 陶器	碗	口縁部	10	(16.0)	-	2.70	(輪) 赤褐 (陶) 淡白2.SYB/2	(輪) 淡白2.SYB/2	輪胎殆ど赤痕 (輪) 淡白2.SYB/2
116	18	-	SK005	渦巻器	高台坪	口縁部 ～底部	40	(14.1)	8.7	3.80	灰白色SY7/1	灰白色SY7/1	側成不良 内外面摩擦 貼付高台
117		-	SK005	土師器	高台坪	口縁部 ～底部	45	(13.2)	7.3	3.40	明赤褐色2.SYR5/6	明赤褐色2.SYR5/6	内外面に赤彩 貼付高台
118		-	SK005	土師器	高台坪	脚部 ～底部	60	-	6.5	4.00	明赤褐色2.SYR5/6	明赤褐色2.SYR5/6	内外面に赤彩 貼付高台
119		-	SK005	土師器	坪	口縁部 ～底部	20	(12.4)	(8.0)	3.00	橙7.SYR7/6	橙7.SYR7/6	内外面摩擦 口縫部にスリ付痕 外面に赤彩
120		-	SK005	土師器	坪	口縁部 ～底部	40	(11.8)	(8.0)	3.40	にぶい赤褐SYR6/4	にぶい赤褐SYR6/4	
121		-	SK005	土師器	盤	口縁部	15	(25.8)	-	4.80	橙SYR6/6	橙SYR6/6	内外面摩擦
122		-	SK005	輪胎 陶器	碗	口縁部	10	(16.4)	-	2.00	(輪) 淡褐色 (陶) 淡褐色 (地上) 淡白SYB/1	(輪) 淡褐色 (陶) 淡褐色 (地上) 淡白SYB/1	輪胎殆ど赤痕 (輪) 淡褐色 (陶) 淡褐色
124		-	SK013	渦巻器	坪	底部	20	-	(8.2)	2.20	灰SY6/1	灰SY6/1	貼付高台
125		-	SK013	渦巻器	高台坪	底部	20	-	(7.0)	1.20	灰白色SY6/1	灰SY6/1	貼付高台
126		18	SK013	土師器	高台坪	口縁部 ～底部	60	12.8	7.0	3.15	にぶい赤褐SYR6/4	にぶい赤褐SYR6/4	外面に赤彩 貼付高台
127		-	SK013	土師器	高台坪	口縁部 ～底部	25	(14.0)	(7.4)	5.25	橙SYR6/6	橙SYR6/6	内外面に赤彩 貼付高台
128	30	-	SK013	土師器	皿	口縁部 ～底部	100	12.0	7.2~ 7.8	2.60	明赤褐色2.SYR5/6	明赤褐色2.SYR5/6	赤み銀器 内外面に赤彩 底部に燒成後打ち欠き穿孔
129		18	SK013	土師器	坪	口縁部 ～底部	50	(11.6)	7.0	3.50	にぶい赤褐SYR7/4	にぶい赤褐SYR7/4	内外面摩擦
130		-	SK013	土師器	坪	口縁部 ～底部	45	(12.8)	(8.4)	3.20	にぶい赤褐SYR6/4	にぶい赤褐SYR6/4	内外面に赤彩 口縫部に擦り痕
131		-	SK013	土師器	坪	口縁部 ～底部	25	(12.0)	(7.3)	2.90	淡赤褐色2.SYR7/3	淡赤褐色2.SYR7/4	内外面に赤彩
132		-	SK013	土師器	坪	口縁部 ～底部	15	(14.6)	(9.8)	2.85	橙2.SYR6/6	橙2.SYR6/6	赤み有 内外面に赤彩
133		-	SK013	土師器	盤	口縁部 ～底部	15	(14.6)	-	5.15	にぶい黄褐色SYR6/3	にぶい黄褐色10YR8/3	外面に若干被熱跡
134		-	SK013	土師器	盤	口縁部	10	-	-	3.40	淡赤褐色2.SYR2/2	淡赤褐色2.SYR2/2	内外面に赤彩 口縫部に黒斑
135		-	SK013	土師器	盤	口縁部	10	-	-	2.30	橙2.SYR6/6	橙2.SYR6/6	内外面に赤彩
136		-	SK014	渦巻器	高台坪	脚部下 ～底部	35	-	(8.2)	2.60	明黄褐色10YR7/6	にぶい黄褐色10YR7/4	側成不良 貼付高台
137		-	SK014	渦巻器	盤	脚部 ～脚部	10	(20.6)	-	6.00	灰SY6/1	灰SY6/1	内外面に自然釉
138	31	-	SK014	渦巻器	盤	脚部	10	-	-	4.10	灰SY5/1	灰SY5/1	内外面及び口縫部に自然釉 内外面及び口縫部に自然釉 内外面鏡面に自然釉
139		-	SK014	渦巻器	盤	脚部 ～脚部	15	-	-	5.80	赤7.SR4/6	赤褐10RS/4	内外面鏡面タキ 内面同上(赤当真痕)
140		-	SK014	土師器	盤	口縫部 ～脚部	15	(26.4)	-	3.80	にぶい赤褐SYR7/3	にぶい赤褐SYR6/3	
141		-	SK014	土師器	盤	把手	95	-	-	6.10	にぶい赤褐SYR6/4	にぶい赤褐SYR6/4	
142		-	SK009	渦巻器	皿	口縁部	10	(19.0)	-	4.30	灰白色SY7/1	灰白色SY7/1	内外面一部に自然釉
144		-	SK004	渦巻器	皿	口縁部	10	-	-	1.00	灰黒2.SY7/2	灰黒2.SY7/2	側成不良 内外面摩擦
145		-	SP172	渦巻器	皿	天井部	-	-	-	1.10	灰SY6/1	灰SY6/1	ツマミ有
147		-	SP003	渦巻器	皿	ツマミ	-	-	-	1.20	灰SY6/1	灰SY6/1	ツマミの外側
148		19	SK003	越州原田	破	脚部下 ～底部	10	-	(7.0)	2.80	赤褐色10RS/3	赤SY5/1	側成不良 口縫部内外有 大字屏分野 破1-5号か
149		-	SK001	渦巻器	盤	脚部	15	-	-	2.00	灰SY6/6	灰SY6/6	内外面に粘付板
150		-	SK001	渦巻器	盤	口縫部	10	(17.0)	-	1.20	灰褐7.SYR5/1	にぶい橙7.SYR6/2	内外面に粘付板
151		-	SK001	渦巻器	坪	口縫部 ～底部	25	(12.8)	(9.6)	3.50	灰白色SY7/2	灰白色SY7/2	内外面摩擦 内面一部に煤付着
152		-	SK001	渦巻器	坪	口縫部	10	(15.0)	-	3.10	灰SY6/6	灰SY6/6	口縫部に覆付板
153	19	SK001	渦巻器	坪	底部	35	-	(10.2)	2.20	暗灰褐2.SY5/2	暗灰褐2.SY5/2	内外面に粘付板 内外面に凹凸円筒具痕 内外面に自然釉 貼付高台	
154	-	SK001	渦巻器	高台坪	底部	25	(16.0)	(11.0)	3.00	灰白色SY7/1	灰白色SY7/1	内外面摩擦 貼付高台	
155	-	SK001	土師器	坪	口縫部 ～底部	30	(12.4)	(6.5)	2.30	橙2.SYR6/6	橙2.SYR6/6		
156	19	SK001	土師器	坪	口縫部 ～底部	95	12.8	7.7	2.90	橙SYR7/6	橙SYR6/6	内外面に赤彩	

表7 土器観察表(4)

遺物 番号	掉國 番号	國版 番号	出土 位置	埋位	器種	部位	残存 率 (%)	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	色調(外面)	色調(内面)	備考
157	19	SX001	土師器	坪	口縁部 ～底部	80	12.5	7.8	3.20	褐SYR6/6	褐SYR6/6	内外面に赤彩痕 並み有	
158		SX001	土師器	坪	口縁部 ～底部	100	12.4	8.6	3.20	褐SYR6/6	褐SYR6/6	内外面摩滅 並み有	
159	-	SX001	土師器	坪	口縁部 ～底部	45	(13.0)	8.3	2.90	にぶい褐2.SYR7/4	にぶい褐2.SYR7/4	内外面摩滅	
160	-	SX001	土師器	高台坪	口縁部 ～底部	25	(12.0)	(9.4)	3.20	明赤褐2.SYR5/6	明赤褐2.SYR5/6	内外面に赤彩 貼付高台	
161	-	SX001	土師器	鉢	口縁部 ～底部	15	(21.0)	-	6.50	淡赤褐2.SYR7/4	褐2.SYR6/6	外面に赤彩痕 外面被熱による摩滅	
162	-	SX001	土師器	甕	口縁部 ～底部	20	(16.0)	-	3.70	褐2.SYR6/6	にぶい褐2.SYR6/4	外面摩滅	
163	19	SX001	土師器	甕	口縁部 ～底部	95	17.8	丸底	15.90	褐2.SYR7/6	にぶい褐2.SYR7/4		
166		SX002	土師器	坪	口縁部 ～底部	30	(10.3)	(5.2)	2.90	褐2.SYR6/8	褐2.SYR6/8	内外面摩滅 内面に赤彩痕	
167	31	SX002	土師器	坪	口縁部 ～底部	50	11.6	6.7	3.00	褐2.SYR6/6	褐2.SYR6/6	内外面摩滅 内面に赤彩痕	
168		SX002	土師器	坪	口縁部 ～底部	100	12.1	7.4	3.40	明赤褐SYR5/6	明赤褐SYR5/6	完形 内外面に赤彩痕 外面摩滅	
169	20	SX002	土師器	坪	口縁部 ～底部	90	(13.1)	7.4	3.50	褐2.SYR6/6	褐2.SYR6/6	内外面摩滅 赤彩剥落	
170		SX002	土師器	坪	口縁部 ～底部	25	(13.8)	(7.7)	3.70	褐2.SYR6/6	褐2.SYR6/6	内外面摩滅	
171		SX002	土師器	坪	口縁部 ～底部	40	(13.9)	6.5	3.80	褐2.SYR7/6	褐2.SYR7/6	内外面摩滅	
172	-	SX002	土師器	甕	口縁部 ～底部	20	(12.0)	(7.6)	1.70	にぶい黄褐10YR7/4	にぶい黄褐10YR7/4	内面に赤彩痕	
173		SX002	土師器	甕	口縁部 ～底部	65	(15.4)	8.0	3.30	褐2.SYR6/6	にぶい褐2.SYR6/4	外面上部にミガキ残存	
174	20	SX002	土師器	高台坪	口縁部 ～底部	70	13.9	7.5	6.10	明黄褐10YR6/6	明黄褐10YR6/6	内外面摩滅 貼付高台	
175		SX002	土師器	高台坪	口縁部 ～底部	30	(18.0)	(9.5)	9.50	明黄褐10YR6/6	明黄褐10YR6/6	内外面摩滅 内面に赤彩痕 貼付高台	
176	-	包含層	渦渦器	甕	口縁部 ～底部	20	(13.5)	-	2.50	黄2.5 SY5/1	黄2.5 SY5/1	外周薄く灰白色	
177	20	包含層	渦渦器	甕	口縁部 ～底部	45	(14.2)	-	1.80	灰M4/	オーリーブ2.S0Y5/1	ツマミ有かは不明	
178	21	包含層	渦渦器	坪	口縁部 ～底部	80	12.1	6.7	3.40	灰M5/	灰M5/		
179		包含層	渦渦器	高台坪	口縁部 ～底部	45	(11.0)	(5.0)	4.00	灰M4/	灰10Y4/1	泥付有 外表面にヘラ記号 貼付高台	
180	-	包含層	渦渦器	高台坪	底部	15	-	(8.6)	3.60	灰オリーブPSY5/2	灰オリーブPSY5/2	燒成不良 外表面に墨書き「赤麻口」 貼付高台	
181	21	包含層	渦渦器	高台坪	底部	50	-	(9.6)	3.20	灰M7/	灰M7/		
182	-	包含層	土師器	坪	口縁部 ～底部	20	(12.0)	(7.6)	3.25	にぶい褐SYR6/4	にぶい褐SYR6/4	内外面僅かに赤彩痕	
183	-	包含層	土師器	坪	口縁部 ～底部	40	(12.8)	(7.4)	3.30	褐2.SYR6/6	にぶい褐2.SYR6/4	内面に赤彩	
184		包含層	土師器	坪	口縁部 ～底部	90	(12.4)	7.0	3.90	褐2.SYR6/8	褐2.SYR6/8	並み有	
185	21	包含層	土師器	坪	口縁部 ～底部	70	(12.9)	7.7	4.00	にぶい褐2.SYR7/4	にぶい褐2.SYR7/4	内外面摩滅 赤彩剥落	
186	32	包含層	土師器	坪	口縁部 ～底部	35	(12.8)	(7.6)	3.15	淡赤褐2.SYR7/4	褐SYR7/6	内外面摩滅 赤彩剥落	
187	-	包含層	鉢	口縁部 ～底部	30	(15.6)	-	4.30	褐2.SYR6/6	褐2.SYR6/6	内面に赤彩		
188	21	包含層	土師器	高台坪	口縁部 ～底部	50	(12.2)	7.0	6.00	褐2.SYR6/6	褐2.SYR6/6	内外面摩滅 外面上部に赤彩痕 貼付高台	
189	-	包含層	土師器	高台坪	口縁部 ～底部	50	-	5.8	3.60	褐2.SYR6/6	褐2.SYR6/6	内面に赤彩 貼付高台	
190	-	包含層	土師器	高台坪	底部	40	-	(12.2)	3.30	褐SYR7/6	褐SYR7/6	内外面摩滅 貼付高台	
191	-	包含層	土師器	甕	口縁部 ～底部	25	(14.0)	(11.0)	2.90	褐SYR6/6	褐SYR6/6		
192	-	包含層	土師器	高坪 ～ 脚上端	坪底部	60	-	-	5.30	褐SYR7/6	にぶい褐2.SYR7/4	外面上部に赤彩痕 何かに転用か	
193	-	包含層	越州窯系 青磁	碗	口縁部	-	-	-	1.70	(輪) 黄褐2.SY5/4 (動土) 灰M6/1	(輪) 黄褐2.SY5/4 (動土) 灰M6/1	輪の色赤不眞 大府府分類類1類か	
194	21	包含層	越州窯系 青磁	碗	底部	-	-	-	3.00	(輪) 黄褐色 (動土) 赤褐2.0Y4/3	(輪) 黄褐色 (動土) 赤褐2.0Y4/3	輪の色赤不眞 大府府分類類1-5類か	
195	-	包含層	越州窯系 青磁	碗	脚部	-	-	-	3.10	灰オリーブPSY5/2	灰オリーブPSY5/2	輪の色赤不眞 大府府分類類類か	

表 8 土器品(土錠)観察表

造物 番号	桜田 番号	國坂 番号	出土位置	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	孔径 (cm)	重量 (g)	色調	備考
46	15	SK001	3.8	1.0	1.1	0.55	3.1	浅黄緑 10YR8/3	ほぼ完形	
47			4.7	1.6	1.4	0.55	10.1	明褐色 7.5YR7/2		
48	15	SK001	3.0	1.2	1.2	0.45	3.9	浅黄緑 10YR8/4	完形	
49			5.0	1.7	1.8	0.70	12.9	浅黄緑 10YR8/4		
113	17	SK002	3.2	1.2	1.3	0.50	4.9	にぶい黄緑 10YR5/3	ほぼ完形	
114			3.7	1.8	1.6	0.70	9.7	にぶい黄緑 10YR7/4		
142	31	SK009 (SP003)	4.1	1.3	1.4	0.40	7.4	浅黄 2.5Y7/3	完形	
164			4.6	1.9	1.8	0.50	12.0	にぶい黄緑 10YR7/3		
196	21	包含層	3.4	1.4	1.4	0.50	5.6	オリーブ緑 7.5Y3/1	完形	
197		包含層	3.4	1.7	1.6	0.55	5.7	にぶい黄 2.5Y6/3		
198		包含層	4.4	1.6	1.5	0.50	8.4	浅緑 5YR8/3		

表 9 鉄製品観察表

造物 番号	桜田 番号	國坂 番号	出土位置	種類	全長 (cm)	残存長 (cm)	備考
50	26	15	SK001	鉄釘	-	7.1	
123	30	18	SK005	鉄釘	6.1	L字長 2.6	完形 木質付着
146	31	19	SP159	鉄釘	-	4.5	断面は長方形 木質一部付着
165			SK001	鉄釘	-	7.8	

表 10 石製品観察表

造物 番号	桜田 番号	國坂 番号	出土位置	種類	石材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	欠損	備考
51	26	15	SK001	砾石	砂岩	6.4	7.4	2.7	147.9	断面4面	
115	29	17	SK002	砾石	白色凝灰岩	3.8	3.1	-	44.1	断面2面 断面裏面に擦挫痕あり	
199	32	21	包含層	玉	水晶	柱1.5	-	0.35~0.5	2.4	上面と底面は研磨 側面に敲打痕あり	
200	33	-	包含層	石皿	安山岩	32.0	26.0	15.2	18200.0		
201		-	包含層	台石	安山岩	29.2	22.9	10.3	8900.0	有り	
202		-	包含層	台石	安山岩	32.7	21.9	9.4	11400.0		
203	-	包含層	石皿	安山岩	30.8	27.2	11.8	16100.0	有り		

第2節 赤星灰塚遺跡

1 遺構

概要

赤星灰塚遺跡で発見された遺構は2棟の掘立柱建物、土坑、小穴、溝状遺構、不明遺構、流路跡がある。同一検出面で縄文時代晚期の流路、平安時代の掘立柱建物を確認した。

表11 掘立柱建物計測値（2）

遺構番号	桁行×梁行	規模（m）	桁行柱間寸法	梁行柱間寸法	方位	面積（m ² ）	備考
SB001	3×2	6.6×4	1.8+2.7+2.1	2.0	N-11° -E	26.4	側柱
SB002	3×2	6.75×4.5	2.25	2.25	N-13° -E	30.4	側柱

SB001（図35 図版12）

調査区北側中央部に位置する。棟方位N-11° -Eで桁行6.6 m（3間）梁間4 m（2間）の東西棟の側柱建物である。桁行の柱間は1.8 m（6尺）、2.7 m（9尺）、2.1 m（7尺）で、梁間の柱間は2 m（6.5尺）等間である。柱形状は楕円形で径0.5～0.3 mである。深さは0.4～0.3 mで段掘りの掘り方もあることから柱痕跡もあった可能性が高い。柱穴から遺物は出土していない。SB002と棟方位は同一軸であること、建物面積も近似することから同時期に建てられた建物としたい。

SB002（図36 図版12）

調査区東側寄りに位置する。棟方位N-13° -Eで桁行6.75 m（3間）梁間4.5 m（2間）の東西棟の側柱建物である。桁行の柱間は2.25 m（7.5尺）等間で、梁間の柱間は2.25 m（7.5尺）等間である。柱形状は楕円形で径0.5～0.3 mである。深さは0.4～0.3 mで、段掘りの掘り方もあることから柱痕跡もあった可能性が高い。柱穴からの遺物の出土は少なく、土師器、須恵器甕、土師器甕の小片が出土したに過ぎない。構築時期を明確にすることはできないが、8～9世紀代としておきたい。

小穴、土坑（図34 図版11）

小穴はSB001の周辺、調査区北東寄り、調査区南側寄りで検出された。小穴内から出土する遺物は少なく、SP004、SP021で須恵器甕、土師器甕片が出土しているに過ぎない。小穴の覆土の状況、遺物の出土から小穴は概ね8～9世紀代から平安時代のものと考えられる。土坑は不整形なものが多く、遺物は出土していない。

SD001（図34 図版11）

調査区の北西隅で確認され、下部にはSX001が重複する。残存長7.1 m、幅0.2 m、溝は調査区よりさらに北に延びる。遺物は土師器甕が出土している。下層の遺構は平安時代であることからそれ以降のものであると考えられる。

NR001（図34 図版11）

調査区の南東隅から調査区東壁にかけて検出された。蛇行して検出されており、砂礫層を含むことから流れの早い流路跡とした。遺物は縄文時代晚期を中心とした土器、石器が出土した。流路方向は地形の傾斜から南から北にかけて流れていると考えられる。縄文時代晚期の遺物はこの流路から出土した。

SX001（図37 図版11）

調査区の北西隅付近で検出された。南北7 m、東西残存3.4 mの方形形状を呈する。掘り込みは浅く、3基の焼土範囲が認められ、そのうち、焼土b、焼土cについては径0.5 m深さ0.1 mの掘り込みを有していた。堅穴建物の可能性も否定できないが、カマド、床面など堅穴建物を構成するものが少ないと、不明遺構とした。また、遺物は少ないものの、土師器甕が出土したことから平安時代の遺構と考えられる。

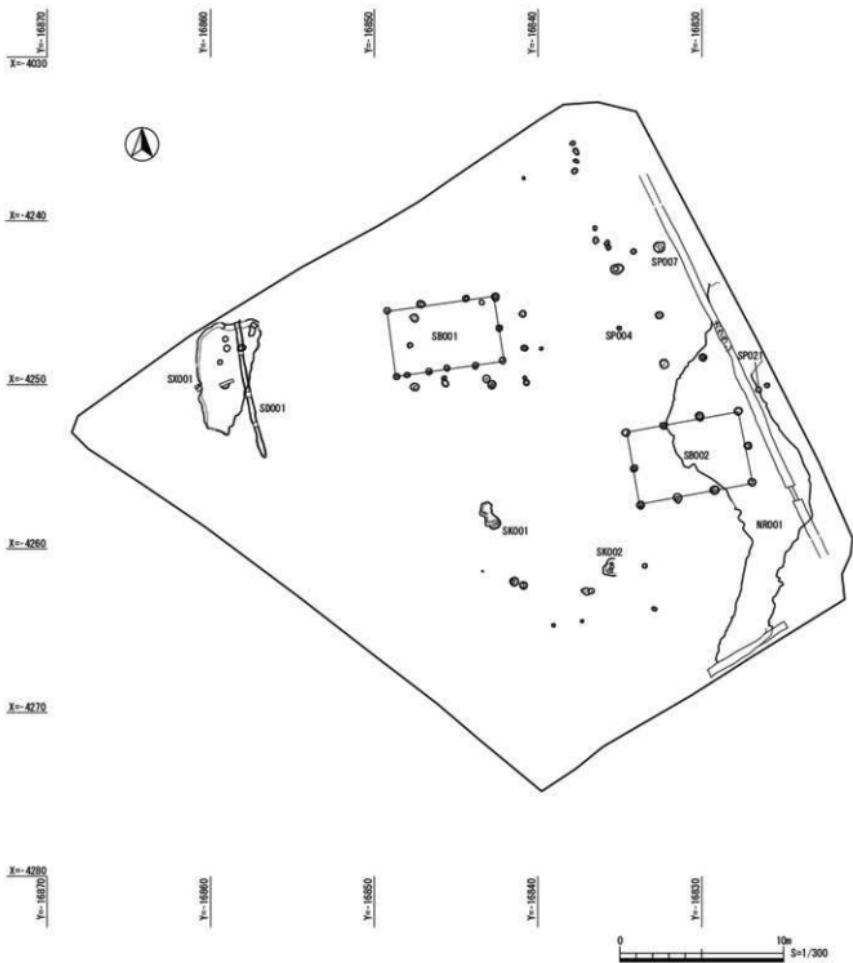


图 34 赤星灰堆遗物遗存分布图

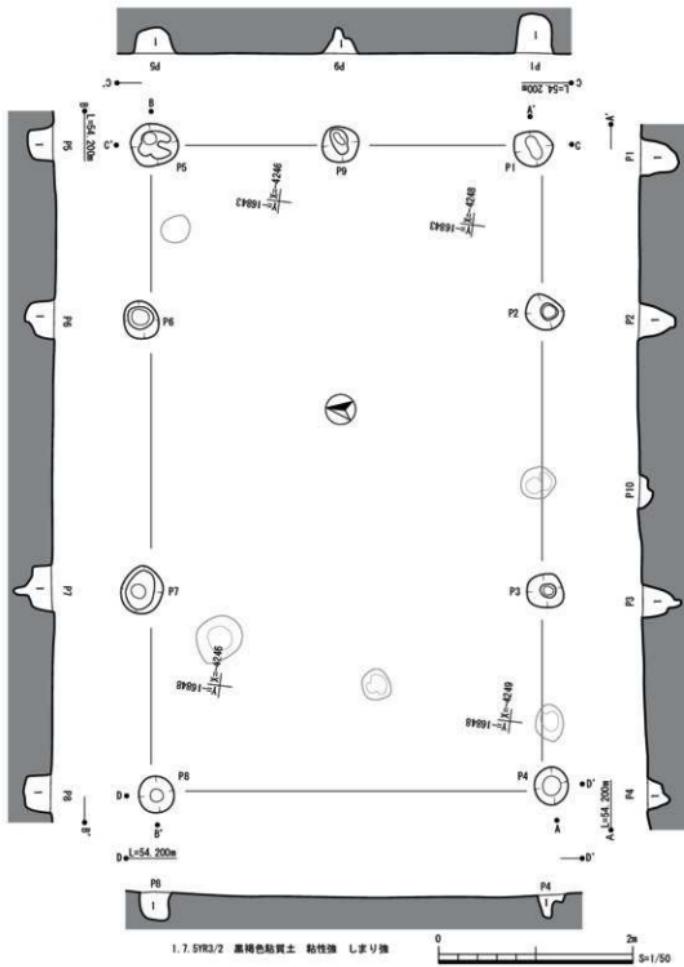


図 35 SB001 実測図

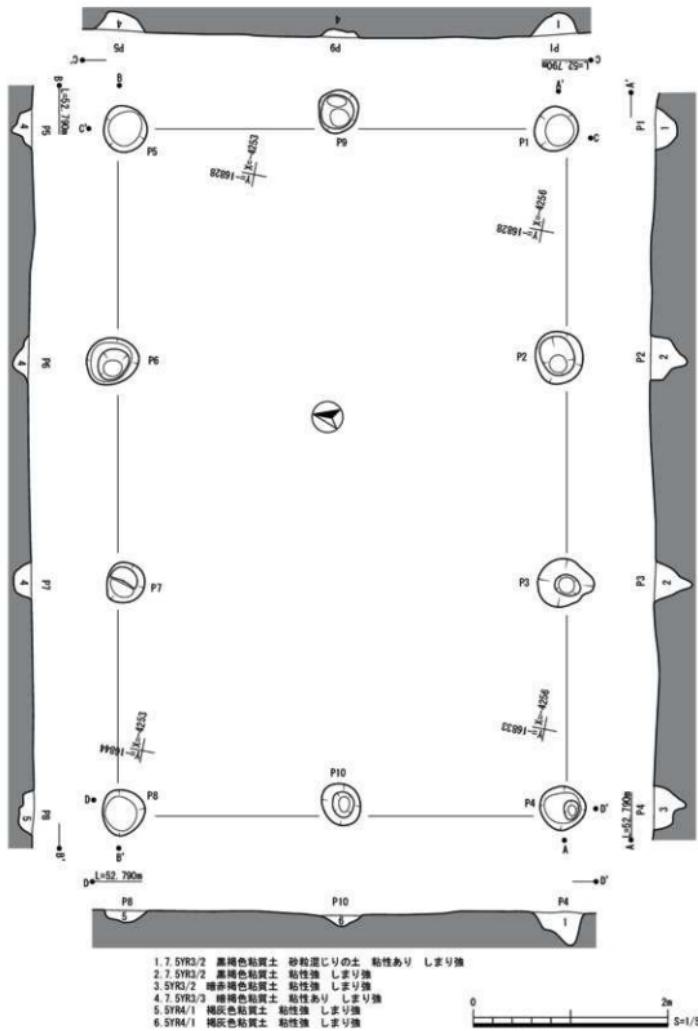


図 36 S8002 実測図

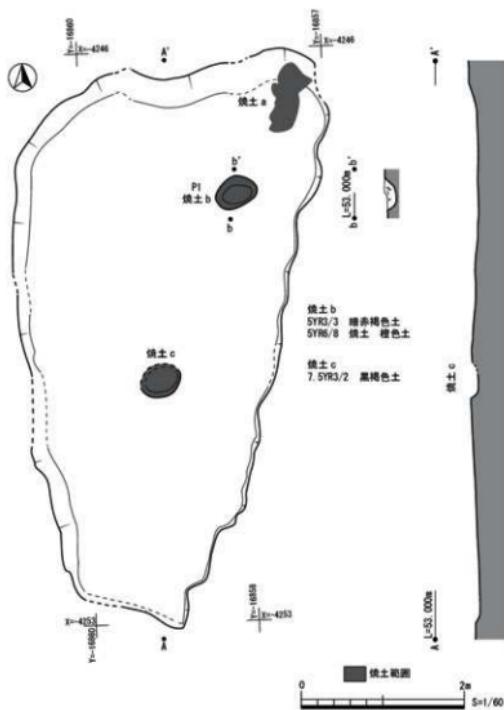


図37 SX001 実測図

2 遺物

概要

遺物は須恵器収納箱に換算して1箱程度で、赤星石道遺跡の出土量と比して極めて少ない。奈良～平安時代の遺物は包含層及び遺構出土のもので、縄文時代晩期の黒川式土器、石器は流路内からの出土であった。

SB、SK、SP、SX、包含層出土遺物（図38 図版22）

204は須恵器甕である。内面に同心円状、外面に平行タタキが施される。205は土師器坏である。口縁端部はやや外反する。206は土師器甕の口縁部である。207・208は須恵器摘蓋である。口縁端部はわずかに突出する。209は須恵器坏である。210は須恵器坏で、外面はケズリが施される。色調は、浅黄橙色で生焼けである。211は土師器坏で、口縁部は内湾しながら立ち上がる。212は土師器坏で、口縁端部は面取りされる。213は土師器甕で、口縁部は短く緩やかに外反し、肥厚する。体部内面はケズリが認められる。

214～217は須恵器摘蓋である。口縁端部は短く突出する。218は須恵器坏である。219は土師器甕で、口縁部が回んでいることから片口がつくかもしれない。220は須恵器坏である。221は、土師器甕の把手である。222～224は土師器甕である。222は口縁部を折り返し、断面は方形状を呈する。223、224の口縁部は短

く外反する

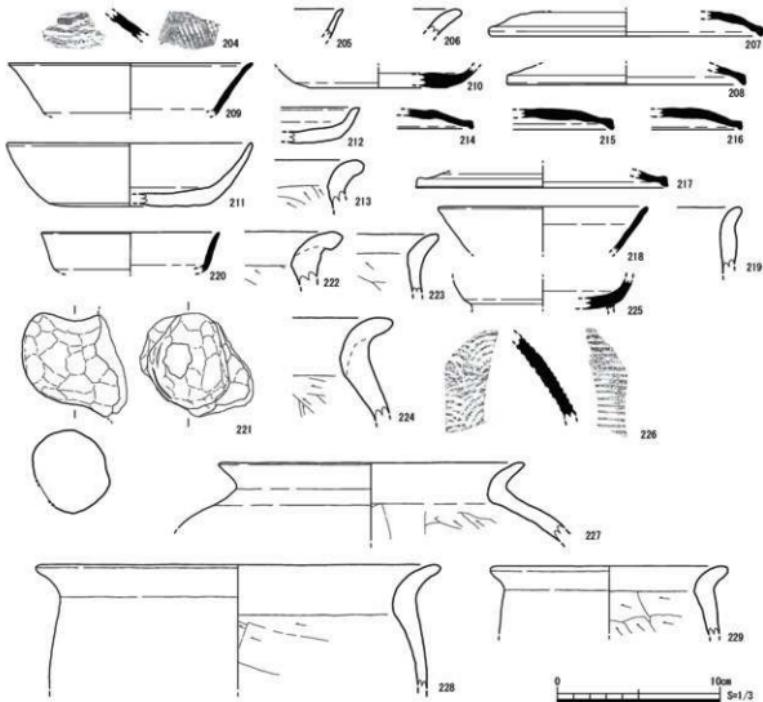
225は須恵器高台坏である。226は須恵器甕の破片である。

227～229は土師器甕である。227の外面は赤彩が施される。口縁部は「ぐ」の字に短く延びる。228の口縁部は肥厚しながら外反する。内面は斜め方向のケズリ調整が認められる。229は小型の甕で、口縁部は肥厚しながら短く外反する。内面はケズリ調整が施される。

NR001 出土遺物 (図39 図版22)

230は波状口縁で、外面に凸帯が巡る。厚手である。231は、緩やかに外反し、口縁端部に刻みが入る。232は肥厚した口縁端部に刻みが入り、体部にも刻みがみられる。内面は粘土紐接合痕が明瞭である。233は2条の低い突帯が巡り、いずれも縦方向の刻みが入る。235は、端部に縦方向の刻みが入る。

236は口縁端部に凸帯がつき、やや下垂する。237は、緩やかに外反し、端部はわずかにつまみ上がる。238は、外面は条痕文が施され、刻み凸帯がつく。239は屈曲する体部にリボン状突起がつく。240は浅鉢で、口縁部は垂直気味に立ち上がり、端部内側はわずかに肥厚し、1条の沈線が巡る。241は浅鉢で短く「ぐ」字に屈曲し、端部内面は肥厚する。242は浅鉢で、わずかに口縁部が肥厚する。243は浅鉢の口縁部で、内外面ともにミガキが施される。外面は屈曲し、端部下に1条の沈線が巡る。端部上面には突起がつく。244は口縁端部



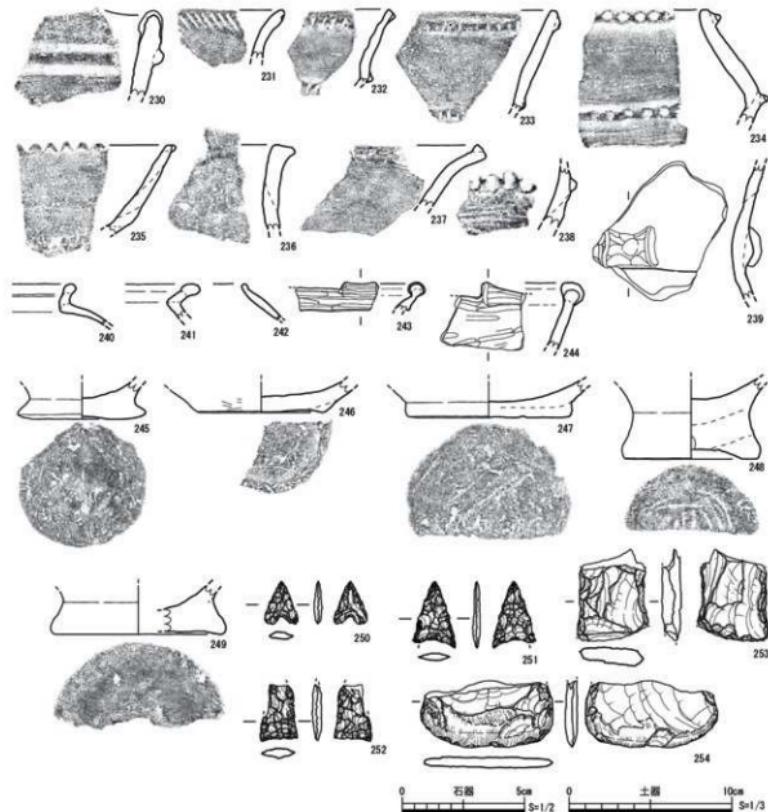
第38図 SB、SK、SP、SX、包含層出土遺物

に突起がつく。

245～249は縄文土器の底部である。245、249は円盤貼り付け状の底部である。248は断面が厚く、上げ底である。

250～252は石鏃である。250は凹基無茎鏃で完形である。抉りは三角形状を呈する。姫島産の黒曜石であろう。251は凹基無茎鏃で、西北九州産の黒曜石であろう。脚部の一部は欠損し、抉りは、わずかに内湾する程度である。252は平基無茎鏃で、先端部、側縁部の一部を欠損しているが、全体の形状は二等辺三角形を呈すると思われる。

253は打製石斧で刃部、基部を欠いている。刃部は欠損後、再加工が施される。254は磨製石斧である。刃部のみ残存しており、摩耗している。断面は扁平で薄い。緑色片岩であろう。



第39図 NR001出土遺物

表 12 土器観察表

造物番号	擇国番号	國版番号	出土位置	種別	器種	部位	残存率	口径(cm)	底径(cm)	高さ(cm)	色調(外)	色調(内)	備考	
204	SK002 P1+2	SK002 P1+2	須恵器	甕	頭部	破片	—	—	—	1.2~	黄灰2.5Y5/1	黄灰2.5Y6/2		
205		SK002 P1+4	土師器	坪	口縁部	破片	—	—	—	1.8~	褐5YR6/6	褐5YR7/6		
206	—	SK002 P1+4	土師器	甕	口縁部	破片	—	—	—	1.6~	浅黄裡10YR6/4	にぶい黄裡10YR7/4		
207	—	SK001	須恵器	甕	口縁部	破片	(16.6)	—	—	1.5~	灰白M7/0	灰白M7/0		
208	—	SK001	須恵器	甕	口縁部	破片	(14.6)	—	—	1.2~	灰M7/1	灰白M7/1		
209	—	SK001	須恵器	甕	口縁部	破片	(15.0)	—	—	3.2~	暗黄裡5Y3/1	暗黄裡5Y3/1		
210	—	SK001	須恵器	甕	頭部	破片	—	(8.5)	—	1.2~	純白9YR6/5	淡黄裡10YR6/4		
211	22	SK001	土師器	甕	口縁部~底部	破片	(15.0)	(9.9)	—	3.9	浅黄裡7.5YR6/4	淡黄裡7.5YR6/4		
212	—	SK001	土師器	甕	口縁部~底部	破片	—	—	—	2.2~	褐7.5YR7/6	褐7.5YR7/6		
213	—	SK001	土師器	甕	口縁部	破片	—	—	—	3.0~	浅黄裡10YR8/4	にぶい黄裡10YR7/4		
214	—	SK002	須恵器	甕	口縁部	破片	—	—	—	1.2~	灰7.5YR6/1	灰白7.5Y7/1		
215	—	SK002	須恵器	甕	口縁部~天井部	破片	—	—	—	1.3~	灰白M7/1	灰白M7/1		
216	38	SK002	須恵器	甕	口縁部	破片	—	—	—	1.3~	灰白M7/0	灰白M7/0		
217	—	SK002	須恵器	甕	口縁部	破片	(15.5)	—	—	1.4~	灰7.5YR6/1	灰白7.5Y7/1		
218	—	SK002	須恵器	甕	口縁部	破片	(12.8)	—	—	2.6~	灰白M7/1	灰白M7/1		
219	—	SK002	土師器	甕	口縁部	破片	—	—	—	4.1~	褐7.5YR7/6	褐7.5YR7/6	片口か?	
220	—	SP004	須恵器	甕	口縁部	破片	(10.8)	—	—	2.5~	灰M6/0	灰白M7/1		
221	22	SP007	土師器	甕	把手	破片	—	—	—	6.3~	淡黄裡10YR8/4	淡黄裡10YR8/3		
222	—	SP021	土師器	甕	口縁部	破片	—	—	—	3.3~	浅黄裡7.5YR6/4	淡黄裡7.5YR6/4		
223	—	SD001	土師器	甕	口縁部	破片	—	—	—	3.6~	褐5YR7/6	褐5YR7/6		
224	—	SD001	包含層	甕	口縁部	破片	—	—	—	6.2~	褐7.5YR7/6	褐7.5YR7/6		
225	—	SD001	須恵器	高台甕	頭部	破片	(10.8)	—	—	1.9~	褐2.5YR6/2	褐5YR6/1		
226	—	SD001 P1+1	須恵器	甕	頭部	破片	—	—	—	5.9~	灰白M6/0	灰5YR6/1		
227	22	SD001 土	土師器	甕	口縁部	破片	(18.6)	—	—	4.8~	浅黄裡10YR8/3	淡黄裡10YR8/3	(外)赤彩痕あり	
228	—	SD001 土	土師器	甕	口縁部~胴部	破片	(24.8)	—	—	7.6~	褐2.5YR7/6	にぶい黄裡10YR7/4		
229	—	SD001	土師器	甕	口縁部	破片	(14.4)	—	—	4.1~	褐2.5YR6/6	褐2.5YR7/6		
230	—	NR001	編文土器	深鉢	口縁部	破片	—	—	—	5.3~	黄5YR6/6	黄5YR7/6	波状口縁	
231	—	NR001	編文土器	深鉢	口縁部	破片	—	—	—	2.9~	褐10YR4/4	にぶい黄5YR6/4		
232	—	NR001	編文土器	深鉢	口縁部	破片	—	—	—	4.2~	墨5YR3/1	墨5YR3/1	袖縫痕あり	
233	—	NR001	編文土器	深鉢	口縁部	破片	—	—	—	6.0~	(にぶい黄裡7.5YR6/6)	(にぶい黄裡7.5YR6/6)		
234	—	NR001	編文土器	深鉢	口縫部~胴部	破片	—	—	—	7.0~	(にぶい黄裡7.5YR6/6)	(にぶい黄裡7.5YR6/6)		
235	22	NR001	編文土器	深鉢	口縫部	破片	—	—	—	5.4~	(にぶい黄裡7.5YR6/6)	(にぶい黄裡7.5YR6/6)		
236	—	NR001	編文土器	深鉢	口縫部	破片	—	—	—	5.2~	褐7.5YR6/4	にぶい黄裡7.5YR6/4		
237	—	NR001	編文土器	深鉢	口縫部	破片	—	—	—	3.8~	明褐7.5YR5/6	にぶい黄裡7.5YR6/3		
238	—	NR001	編文土器	深鉢	頭部	破片	—	—	—	3.5~	明褐7.5YR6/4	にぶい黄裡7.5YR6/4		
239	39	NR001	編文土器	深鉢	頭部	破片	—	—	—	8.6~	(にぶい黄裡7.5YR5/6)	反黄裡10YR4/2		
240	—	NR001	編文土器	深鉢	口縫部	破片	—	—	—	2.5~	(にぶい黄裡10YR2/4)	にぶい黄裡10YR6/3	リボン状突起	
241	—	NR001	編文土器	深鉢	口縫部	破片	—	—	—	2.1~	(にぶい黄裡7.5YR5/3)	褐7.5YR6/6		
242	—	NR001	編文土器	深鉢	口縫部	破片	—	—	—	2.2~	墨5YR2/2	にぶい黄裡10YR5/3		
243	—	NR001	編文土器	深鉢	口縫部	破片	—	—	—	2.2~	灰M4/0	暗灰M4/0		
244	—	NR001	編文土器	深鉢	口縫部	破片	—	—	—	4.0~	褐10YR6/5	にぶい黄裡10YR6/4	リボン状突起	
245	—	NR001	編文土器	深鉢	頭部	破片	—	—	—	7.8~	2.3~	明褐7.5YR5/6	明褐色7.5YR5/6	
246	—	NR001	編文土器	深鉢	頭部	破片	(7.4)	—	—	1.9~	にぶい黄裡10YR7/4	にぶい黄裡10YR7/4		
247	—	NR001	編文土器	深鉢	頭部	破片	(9.9)	—	—	2.3~	にぶい黄裡10YR7/4	にぶい黄裡10YR7/3		
248	—	NR001	編文土器	深鉢	頭部	破片	(8.2)	4.9~	—	37.09	明赤褐5YR5/6	明赤褐7.5YR5/6		
249	—	NR001	編文土器	深鉢	頭部	破片	(10.4)	3.0~	—	3.0~	褐7.5YR6/6	反黄裡10YR5/2		

表 13 石製品観察表

造物番号	擇国番号	國版番号	出土位置	埋理	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	欠陥	備考
250	NR001	打製石器	黑曜石(鹿島産)	1.75	1.35	0.35	0.56	完形			出基無基盤
251		NR001	打製石器	(2.75)	(1.7)	(0.3)	(1.12)	左側縫及び鋸歯の一部に新しい欠損			出基無基盤
252	22	NR001	打製石器	黑曜石(西北九州産)	2.3	1.5	0.4	(1.44)	先端及び側面に上部少部分欠損		平基無基盤
253		NR001	打製石器	緑色片岩	(5.65)	(4.35)	(1.2)	(37.09)	刃部及び基部欠損		刃部は欠損後に再加工
254	—	NR001	磨製石斧	緑色片岩	(4.1)	8.15	0.75	(41.35)	刃部のみ残存		刃部は著しく摩耗する

第4章 総 括

第1節 菊池市赤星所在の集落遺跡の性格について

1 菊池市赤星所在の集落遺跡

熊本県の北部、阿蘇北外輪山から有明海へと西流する菊池川。その中流域の左岸に菊池市大字赤星がある。この赤星の地は、菊池川中流域に発達した肥沃な菊鹿盆地の東端近くに位置し、その生産基盤を背景に中世には赤星庄が置かれ、菊池氏の重臣であった赤星氏の拠点であったことで知られる。

古代律令制下においてこの地は、肥後國菊池郡にあたる。その郡家（郡役所）は赤星と同じく菊鹿盆地内を菊池川沿いに少し下った右岸に位置する西寺遺跡（菊池市大字西寺）に比定されている。そこから北上した台（うてな）台地の南縁には菊池郡の郡寺（官寺）に比定される十連寺跡（菊池市七城町水次）がある。さらに北上した中心標高 145 m 程の独立丘陵上には、東アジア情勢が緊迫する 7 世紀後半、国土防衛のため中央政府により築城された古代山城の一つ、菊智城跡（山鹿市菊鹿町米原～菊池市大字木野）がある。ほかにも、菊鹿盆地内には 6 つの条里地割が推定されており、さらに郡内を「車路」等の地名から復元された古代官道が通るなど、古代の様相が比較的明らかな地域である。

こうした古代の周辺環境のなか、この赤星の地で早くから知られる古代の集落遺跡に、赤星福土・水溜遺跡がある。現在の赤星集落の東方、菊池川左岸に拡がる沖積扇状地の微高地の一つに位置する遺跡で、昭和 51 年度に国道 325 号線拡幅工事並びに圃場整備事業に伴い発掘調査が実施されている。その調査において、西側の福土遺跡からは方形土坑 7 基（9 世紀中頃～後半）、柱穴群、溝状遺構（9 世紀前半の土器が多く出土）、東側の水溜遺跡のほうからは竪穴建物跡 5 基と掘立柱建物跡 3 基（8 世紀後半～9 世紀後半）がそれぞれ検出され、越州窯系青磁、黒色土器、墨書き土器などの遺物が出土する古代の集落遺跡として知られることとなった。

そうしたなかで、国道 325 号線改築工事に伴い新たに発見されたのが、赤星灰塚遺跡と赤星石道遺跡である。両遺跡は赤星福土・水溜遺跡の南東方向、花房台地北縁から派生した扇状地の基部近くに位置しており、平成 29 年度に南側の灰塚遺跡、平成 30 年度に北側の石道遺跡の発掘調査がそれぞれ実施された。灰塚遺跡からは掘立柱建物跡 2 基、石道遺跡からは掘立柱建物跡 9 基と土坑 14 基、廐棄土坑 2 基がそれぞれ検出され、遺物としては越州窯系青磁、黒色土器、墨書き土器が出土するなど、8 世紀後半～9 世紀中頃の年代が与えられる古代の集落遺跡であった。

以上が、菊池市大字赤星一帯の古代の集落遺跡で、個々の遺跡として認知されているものであるが、いずれも花房台地の北縁から派生した扇状地上に位置し、8 世紀後半から 9 世紀中頃までとほぼ符合する年代が与えられることから、一連の大規模な集落遺跡として認知されるべきものといえる。

2 菊地郡内の集落遺跡との比較

古代律令制下における菊池郡内にある古代の集落遺跡で、過去に発掘調査が実施され、その一端が明らかになっているものとしては、菊池市大字赤星の遺跡群のほか、菊池川の右岸、支流内田川・支流木野川と支流迫間川に挟まれた標高約 70 ～ 80 m の台（うてな）台地西端部に位置するうてな遺跡（菊池市七城町台）や、同じく台（うてな）台地南縁に位置する岡田遺跡（菊池市七城町岡田）、菊池川の右岸、菊鹿盆地内の菊池川と支流迫間川とに挟まれた微高地に位置する深川遺跡（菊池市深川）、菊池郡の南部、菊池川と支流合志川に挟まれた標高 90 ～ 110 m の花房台地上に位置する万太郎遺跡（菊池市森北）などがある。（図 40）これら遺跡の発掘調査の成果について、以下にみていくこととする。

まず、うてな遺跡であるが、2 次にわたる発掘調査が実施されている。既報告の I ・ II ・ III 区では竪穴建



図40 猿池町内における古代遺跡分布図

物跡 46 基、掘立柱建物跡 5 基、道路跡 1 条、土坑、溝等、未報告のセッ枝 I・II 区及び大原 I~III 区では堅穴建物跡約 150 基、掘立柱建物跡 20 数基がそれぞれ検出されており、8 世紀後半から 9 世紀初頭の大規模な集落であったことが判明している。同じく台（うてな）台地南縁、うてな遺跡から東に約 1.0km の地点に位置する岡田遺跡では、堅穴建物跡 2 基が確認されており、8 世紀後半の年代が与えられている。おそらくうてな遺跡と一連の集落遺跡として認知されるものであろう。

次に、深川遺跡では掘立柱建物跡 6 基、堅穴建物跡 2 基が検出されている。いずれも年代は定かではないが、同じく確認された幅約 8.0 m の溝跡から出土した土器の年代から 8 世紀末～9 世紀初頭の年代が考えられている。菊池郡の都家に比定される西寺遺跡（菊池市西寺）とは数百メートルしか離れておらず、関係性が指摘されている遺跡である。

最後に、万太郎遺跡であるが、堅穴建物跡 22 基と掘立柱建物跡 1 基、土坑、溝等が検出されており、さらに、底部幅 1.0 m 以上の溝状の道路遺構が 5 条検出されている。7 世紀前半から 9 世紀後半の年代が与えられ、8 世紀末～9 世紀初頭に最大規模になることが想定されている。

以上が、菊池郡内にある集落遺跡の発掘調査の成果であるが、菊池市赤星の遺跡群との比較において、掘立柱建物跡の規模を取り上げてみていただきたい。

菊池市大字赤星の遺跡群の中で掘立柱建物跡が確認されているのは、赤星塚遺跡、赤星石道遺跡、赤星水溜遺跡である。赤星塚遺跡では、2 間（4 m）×3 間（6.6 m）の側柱建物跡〔SB001〕、2 間（4.5 m）×3 間（6.75 m）の側柱建物跡〔SB002〕とほぼ同規格の側柱建物跡 2 基があり、赤星石道遺跡では、2 間（3.6 m）×3 間（4.05 m）の総柱建物跡〔SB001〕、2 間（3.3 m）×3 間（4.5 m）の総柱建物跡〔SB002〕、2 間（3.6 m）×3 間（4.05 m）の総柱建物跡〔SB007〕などの総柱建物跡と 2 間（3.9 m）×5 間（6.75 m）の大型の側柱建物跡〔SB003〕、そしてその両脇に並列する形で 2 間（4.2 m）×3 間（6.3 m）の側柱建物跡〔SB004〕、2 間（4.5 m）×3 間以上（5.0 m 以上）の側柱建物跡〔SB005〕などがある。なお、赤星水溜遺跡で 3 基の掘立柱建物跡を確認しているが、建物の規模等は明らかとされていない。

これらに対して、そのほかの集落遺跡をみていくと、まずうてな遺跡であるが、調査区の I・II・III 区に 2 間（3.0 m）×1 間以上（2.4 m 以上）の側柱建物跡〔1 号建物跡〕、2 間（3.3 m）×2 間以上（3.9 m）の側柱建物跡〔2 号建物跡〕、3 間（3.45 m）×3 間以上（4.35 m）の側柱建物跡〔3 号建物跡〕、2 間（2.4 ~ 2.55 m）×3 間（4.05 ~ 4.35 m）の側柱建物跡〔4 号建物跡〕、2 間（2.55 m）×3 間（3.3 m）の側柱建物跡〔5 号建物跡〕などがあり、セッ枝 II 区では 3 間×4 間、3 間×5 間の比較的大型の側柱建物跡が確認されている。このようにうてな遺跡では比較的多くの掘立柱建物跡が見つかっており、なかには柵列を伴うものや柱間に石を並べたものもあり、周辺から三彩壺片や銅鏡片、黒色土器が出土していることなどから官衙的様相を帯びることが指摘されている。次の深川遺跡では、建物規模が判別できるものとして、2 間（4.0 m）×3 間（6.0 m）の側柱建物跡〔SB03〕、2 間（4.0 m）×3 間（6.0 m）の側柱建物跡〔SB04〕、2 間（3.5 m）×2 間（4.0 m）の側柱建物跡〔SB02〕がある。このほか、万太郎遺跡においては、掘立柱建物跡 1 基が確認されているが、建物規模等は判然としない。

これら他遺跡の掘立柱建物跡をみると、赤星石道遺跡の大型の側柱建物跡〔SB003〕は、他の遺跡の掘立柱建物と比較しても大規模で、うてな遺跡の大型側柱建物に匹敵する規模を誇り、一般的な 2 間×3 間の側柱建物跡とは異なる様相を呈することがわかるが、さらに両脇に並列した建物も見られ、隣接して総柱建物群が配置された状況は、他の遺跡では見られない様相といえる。

3 遺跡の性格

冒頭で述べたとおり、菊池市大字赤星の遺跡群は一連の大規模集落遺跡として位置づけられるものであり、古代律令制下、郡の下の行政区画である「郷」を彷彿させる様相を呈する遺跡群といえる。なかでも遺跡群の中央近くに位置する赤星石道遺跡は、総柱建物群に隣接する大型の側柱建物が確認されるとともに、意図

的に割った土器等を廃棄した土坑が存在し、さらに越州窯系青磁や「依麻口」銘墨書土器が出土するなど、「郷家（郷の行政施設）」を想起させるような様相で、遺跡周辺は「郷」の中心であった可能性が指摘できる。

『和名抄』によると、菊池郡は9つの郷に分かれており、郷名（候補地）を列記すると、城野郷（山鹿市菊鹿町木野・菊池市木野付近）、水島郷（菊池市七城町水島付近）、辛家郷（菊池市七城町加恵付近）、夜開郷（菊池市七城町夜間付近）、子養郷（菊池市七城町五海付近）、山門郷（不明）、上甘郷（菊池市七城町蟹穴付近）、日理郷（菊池市亘付近）、柏原郷（菊池市河原付近）となる。ちなみに、子養郷については、東大寺の発掘調査で出土した木簡に「肥後国菊地郡子養郷人 大伴部稻依 大伴部鳥上」とあり、『和名抄』以外にも「子養郷」の記載が認められることで知られる。

菊池郡9郷のうち城野郷については、具体的な集落遺跡は見つかっていないものの、候補地内の丘陵裾部に大同2年（807）年に山城国葛野郡の松尾神を勧請したと由来される「城野松尾神社」が鎮座しており、候補地としての可能性は高いものと考えられる。また水島郷については、うてな遺跡が所在する台（うてな）台地裾部の地名であり、うてな遺跡一帯を水島郷の中心部として捉えてよいものと思われる。こうしたなか、菊池市大字赤星の集落遺跡群は、江戸時代からの地名を基に各郷を当てはめる危険性はあるものの、9世紀前半～中頃を最盛期とする大規模な集落遺跡でありながら、現地名から類推できる郷は認められないことから、現在のところ唯一候補地が推定されていない「山門郷」を候補地として浮かび上がらせることも可能ではなかろうか。

次に、古代山城、鞠智城跡との関係性についても見ていくたい。

鞠智城跡は、周囲約3.5km、面積約55haの大規模な官営の城跡である。昭和42（1967）年度に始まる鞠智城跡の発掘調査により、これまでに3箇所の城門や土壘、石壁といった城壁、兵舎や倉庫、官舎、貯水池などの内部施設の構造が発見されるなど、城の構造解明が進むとともに、7世紀後半～10世紀中頃までの存続期間と5期に及ぶ時期区分（鞠智城Ⅰ～Ⅴ期）とその変遷が明らかとなっている。遺跡の大まかな変遷をたどると、鞠智城Ⅰ期（7世紀第3四半期～第4四半期）は創建期で城門、城壁、掘立柱建物、貯水池が構築されるなど城の最低限の機能が整備され、鞠智城Ⅱ期（7世紀末～8世紀第1四半期前半）で縛治（修理）され、官衙的様相を持つ建物が出現する。次の鞠智城Ⅲ期（8世紀第1四半期後半）で倉庫に礎石建物が採用されるなど変化が生じ、鞠智城Ⅳ期（8世紀第4四半期～9世紀第3四半期）で礎石建物が大型化する。そして鞠智城Ⅴ期（9世紀第4四半期～10世紀）で魔城を迎えたものと考えられている。

この時期区分のうち、赤星の遺跡群と年代的に符合するのが、鞠智城Ⅳ期である。礎石立ちの大型倉庫が出現することが特徴として挙げられるが、このことから城の主たる機能が軍事的機能から食糧の備蓄機能へと変化が生じた段階との指摘がある。鞠智城に備蓄されていた穀については、鞠智城跡の貯水池跡から出土した「秦人忍口五斗」銘付木簡に郡名の記載がないことから、菊池郡などの周辺地域から直接徵取されたものであるとの指摘があり、そうであるならば鞠智城周辺では、相当量の穀が生産されていたことになる。その生産量の一翼を担っていた集落がこの菊池市大字赤星の遺跡群であり、のちに赤星荘が置かれたことを考へるならば、生産量の多くを占めていた可能性も否定できない。また、遺跡群の近傍には、復元された古代官道が通り、北側には菊池川水運の赤星の津の所在が想定されるなど、陸上・水上交通の要衝に位置する遺跡群としても評価でき、郡内の食糧等の物資が集まる物資集積地としての役割を果たしていたことも想起される。

以上のことから、菊池市大字赤星の遺跡群は、鞠智城への穀の供給や物資の集積地としての役割を担うなど、菊池郡内の有力な郷の中心地として発展していき、9世紀前半～中頃に最盛期を迎えたものとして古代律令制下における地域社会の一端を解き明かしてくれる遺跡といえよう。

第2節　まとめ

1 特筆すべきことがら

今回の発掘調査は、国道325号線改築工事の道路部分に限り本発掘調査を実施した。狭い面積であったが、赤星石道遺跡では菊池川左岸の標高48mの沖積微高地に9世紀前半から9世紀後半の集落が立地していたことを明らかにすることができた。とくに道路部分より北側、東側、南側において遺跡がさらに広がっていることは確実である。

赤星灰塚遺跡は、赤星石道遺跡より直線距離にして約350m南東の標高52～53mの微高地に立地し、同様の遺構・遺物が確認された。標高差はあるものの沖積微高地に赤星石道遺跡と同様の時代の遺跡が分布していることが明らかになった。

また、昭和51年に現325号線及び圃場整備事業に伴い調査を実施した赤星福士・水溜遺跡においては、奈良時代から平安時代の掘立柱建物、竪穴建物、方形土坑が見つかっている。

赤星地区的調査成果を併せると菊池川水系の微高地には奈良時代後半から平安時代の集落が立地しており、赤星遺跡群ともいべき8世紀後半から9世紀前半を中心に大規模な集落景観が広がっていたと評価することができる。

以下、特筆すべき遺構・遺物を中心赤星石道遺跡の様相、変遷についてみていただきたい。

赤星石道遺跡 9世紀前半から9世紀後半にかけての存続期間の短い集落が確認されている。見つかった遺構は掘立柱建物、土坑、溝、小穴、不明遺構である。掘立柱建物を主体とし、側柱建物5棟、4棟の総柱建物の合計9棟の建物で構成される。

掘立柱建物は調査区外に延びるもの建物のタイプは3×2間の側柱建物、5×2間の側柱建物、3×2

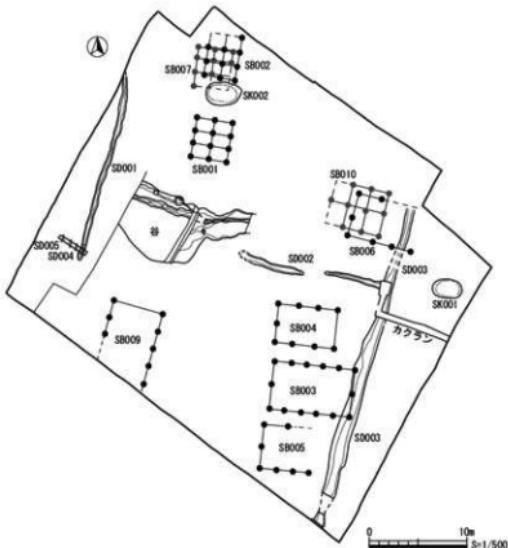


図41 赤星石道遺跡建物配置図

間の総柱建物に分類することができる。

調査区中央には谷地形があり、その周囲に建物群が分布している状況であった。

掘立柱建物の特徴（図41） 南東部の掘立柱建物は5間×2間の建物と3間×2間の建物で構成される。これらの建物は概ね西側の梁行きを擡え、建物間は1.8m間隔で、規格に基づき配置されたものと考えられる。この建物群と同一方向をとるものとして、北西側のSB001、SB007が該当する。

調査区南西部では、5間以上×2間の南北棟の側柱建物があり、柱穴規模も他の建物よりも大きく、調査区内で最大規模を有する側柱建物と考えられる。この建物と同一方位をとる建物は総柱建物のSB002、北東の側柱建物である。

土坑の性格（図42） 土坑は16基検出しているが、遺物を含む土坑はSK001、002、005、013である。とくに遺物を多く含むSK001、SK002は長軸3m以上の長楕円形を有する。これらの土坑は土師器を主体とし、底部穿孔の耳皿、皿、口縁部を打ち欠いた長頸瓶があることから、祭祀・儀礼行為後に廃棄された土坑と考えられる。

そして、SK002はSB002、SB001と切り合っていることから構築順序としてSB007→SK002→SB002と辿ることができ、総柱建物SB007廃絶後、SK002を構築し、再び総柱建物SB002は配置されるようになる。

また、この構築順序と建物方位との関係から大まかな遺構の変遷は1期：SB003、004、005、総柱のSB001、007、2期：SK002、3期：SB009、SB002、SB010、SB006で1期を9世紀前半、2期を9世紀中葉、3期を9世紀後半としたい。

このほか、SK001は堅穴状遺構としたが、炉やカマドがなく、堅穴の形状も不定形であることから住居跡であるとは評価しがたい。推測の城を出ないが、覆土内に焼土が含まれることからなんらかの作業場もしくは工房の可能性が考慮される。

遺物は遺物収納箱にして約40箱の出土であり、大半がSK001をはじめとした土坑からの出土であった。土

遺構		主要遺物
SK001		
SK002		

図42 大型土坑と出土遺物

師器坏が多く、甕、瓶の煮沸具は非常に少ない傾向で、9世紀中葉の土器が主体を占めていた。須恵器は荒尾産の壺が認められた。このほか、鉄鉢形の須恵器、緑釉陶器碗、越州窯系青磁の碗などがあり、通常の集落では出土しないものもある。また、須恵器、土師器の耳皿、底部穿孔の坏、壺類、口縁部を打ち欠いた壺など祭祀・儀礼に関わる土器が出土した。

菊池川中流域の集落遺跡の特徴（図43） うてな遺跡、万太郎遺跡、伊坂上ノ原遺跡などの菊鹿盆地における集落遺跡では8世紀後半にあらたな集落が展開し、9世紀前半には建物が急減するとされる。また、堅穴建物も9世紀前半までは残存する（能登原2014）

このほか、この地域では道路構造が確認されており、中でも複数の硬化面をもつ道路遺構があるなど頻繁な使用があつたとされる（阿南2012）

赤星石道遺跡の評価 今回の赤星石道遺跡では掘立柱建物を主体とすること、9世紀前半から9世紀後半と集落の存続時期が短いことが挙げられ、菊鹿盆地における古代集落の変遷と概ね同様の経過を辿ることが明らかになった。

しかし、掘立柱建物で構成されること、緑釉陶器、越州窯系青磁の出土、「依麻口」の墨書き土器の出土から、有力者の館、あるいはその周辺施設である可能性を指摘することができ、集落構造において階層差があることを示唆している。また、人名を記した墨書き土器の出土からこの地で開発・経営に携わった有力者をも想起することができよう。

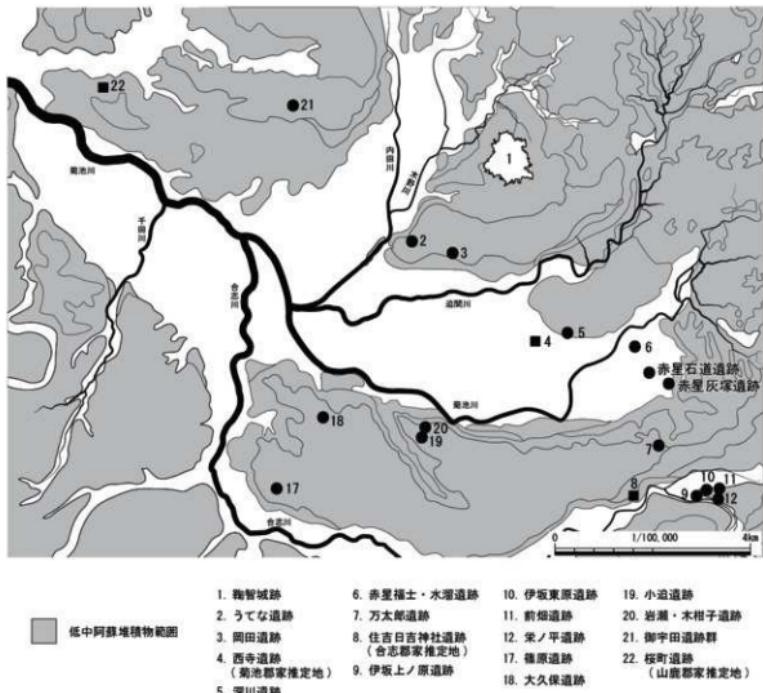


図43 菊池川中流域の古代集落遺跡

2 今後の課題

以上の調査成果により9世紀代における菊池川流域の集落構造、古代官道や菊池川水系の水上交通を含めた交通の要衝地に関するなどこれから追及すべき課題は多い。菊鹿盆地は、地形的に完結性が高く、今後の発掘調査においておおいに期待することができるとともに赤星石道遺跡・赤星灰塚遺跡の調査成果が地域史を物語る資料として多方面において活用されることを願う。

【参考文献】

- 松本雅明 「菊池市西寺の土墳」 1965『熊本県文化財調査報告』熊本県文化財報告第5集 熊本県教育委員会
桑原憲影・野田拓治（編） 1977『赤星福士・水溜遺跡』熊本県文化財調査報告第27集 熊本県教育委員会
橋本康夫 1983『上鶴頭遺跡』熊本県文化財調査報告第63集 熊本県教育委員会
松本雅明 1985『日本歴史地名体系第44巻 熊本県の地名』平凡社
村井真輝（編） 1986『伊坂上原遺跡・石佛遺跡』熊本県文化財報告第78集 熊本県教育委員会
高木正文 1988「熊本県菊池郡七城町うてな遺跡」『日本考古学年報（1988年版）』41 日本考古学協会
西住欣一郎（編） 1992『うてな遺跡』熊本県文化財調査報告第121集 熊本県教育委員会
江本 直 1993『岡田』熊本県文化財調査報告第135集 熊本県教育委員会
帆足俊文 2001『瀬戸口横穴墓群・深川遺跡』熊本県文化財調査報告第193集 熊本県教育委員会
坂本憲昭（編） 2004『伊坂上ノ原遺跡』旭志村文化財調査報告第8集 旭志村教育委員会
阿南 亨 2012『万太郎遺跡・森北院ノ馬場・追畠遺跡』菊池市文化財調査報告第6集 菊池市教育委員会
能登原孝道 2014「菊池川中流域の古代集落と鞠智城」『鞠智城II 論考編1』 熊本県教育委員会

図 版

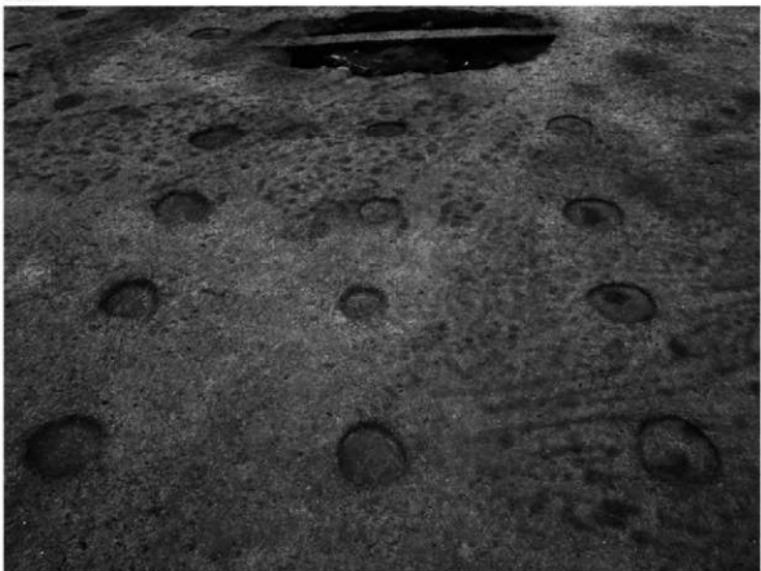


赤星石道跡 全景 (東より)



赤星石道跡 全景 (西より)

図版 2



SB001 探出状況（南より）



SB001 半裁状況（南より）



SB003 検出状況（西より）



SB003 完掘状況（西より）

図版 4



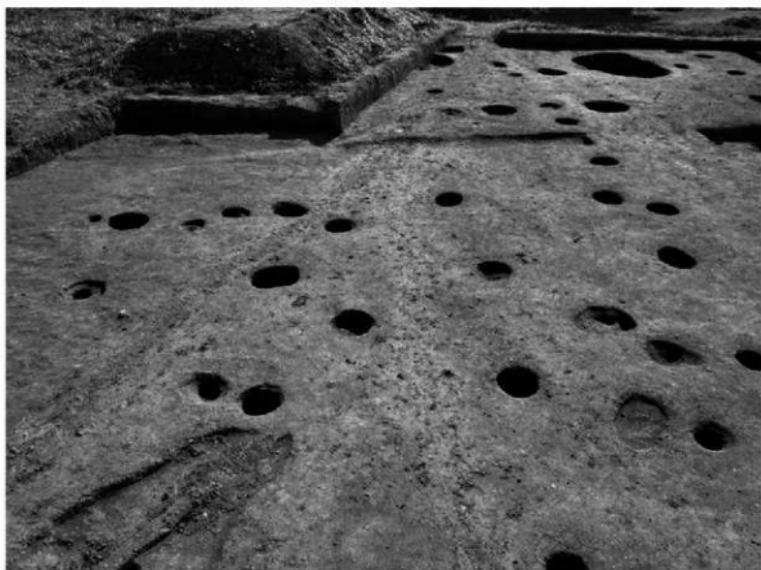
SB004 検出状況（西より）



SB005 検出状況（西より）



SB002・SB007 検出状況（南より）



SB006 完掘状況（西より）

図版 6



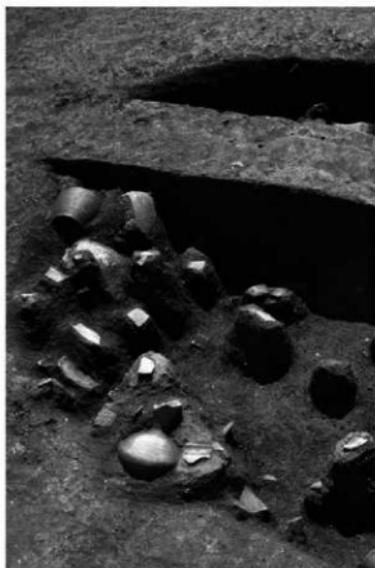
SB009 検出状況（北より）



SB009 実測状況（北より）



SK001 遺物出土状況 全景 (北東より)



SK001 遺物出土状況上層 (北より)



SK001 遺物出土状況下層 - 1 (北より)



SK001 遺物出土状況下層 - 2 (北より)

図版 8



SK002 造物出土状況（南西より）



SK002 造物出土状況詳細（南西より）



SK002 土層堆積状況（南西より）



SK005 遺物出土状況（西より）



SK013 遺物出土状況（南西より）

図版 10



SX002 遺物出土状況 全景 (南西より)



SX002 遺物出土状況 - 1 (南西より)



SX002 遺物出土状況 - 2 (南西より)



赤星灰塚遺跡 全景（北西より）

図版 12



赤星灰塚遺跡 SB001 完掘状況（西より）

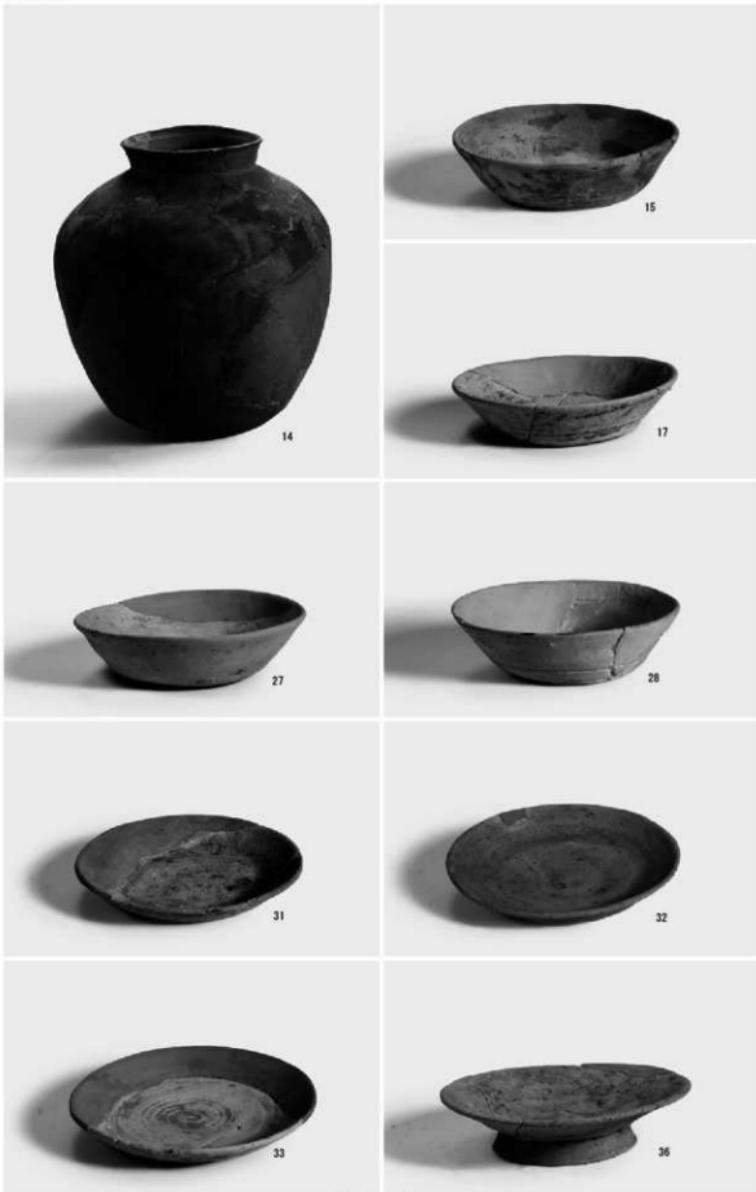


赤星灰塚遺跡 SB002 完掘状況（南西より）



SK001 出土遺物 - 1

図版 14



SK001 出土遺物 - 2

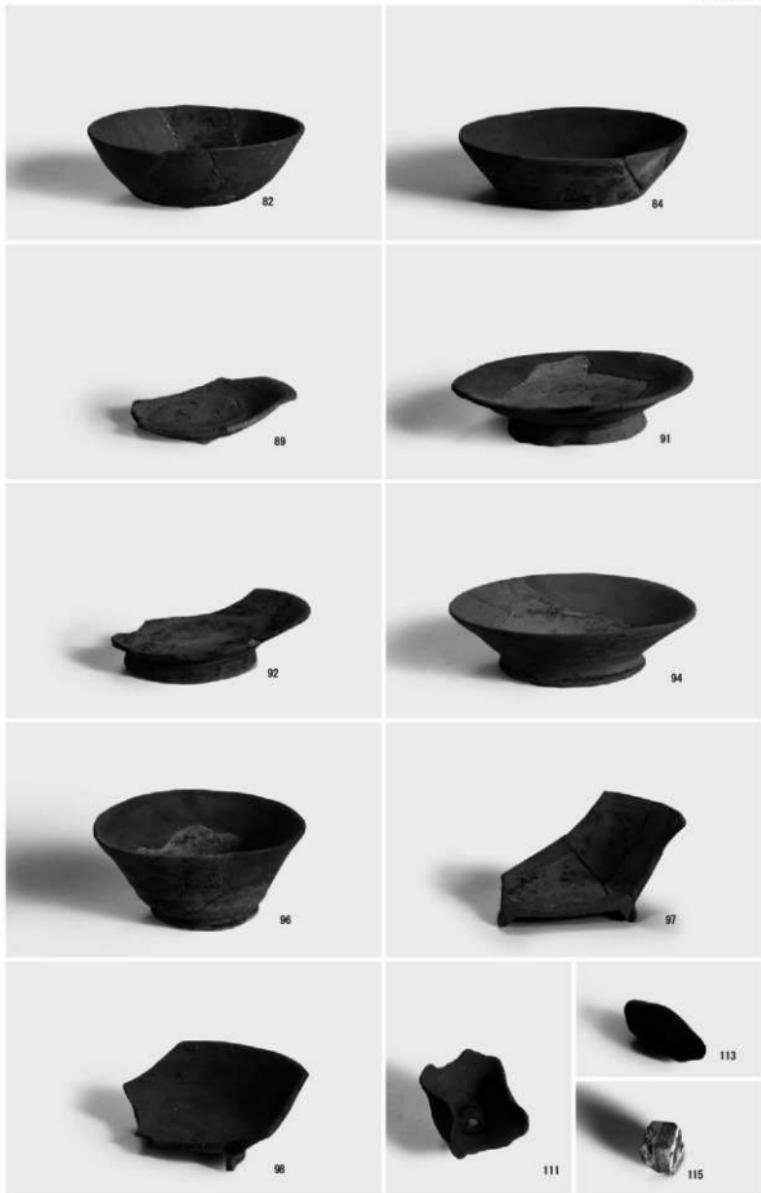


SK001 出土遺物 - 3

図版 16



SK002 出土遺物 - 1



SK002 出土遺物 - 2

図版 18



SK005(116～123)・SK013(126～130) 出土遺物



SB009(142)、SP159(146)、SD003(148)、SX001(153～165) 出土遺物

圖版 20

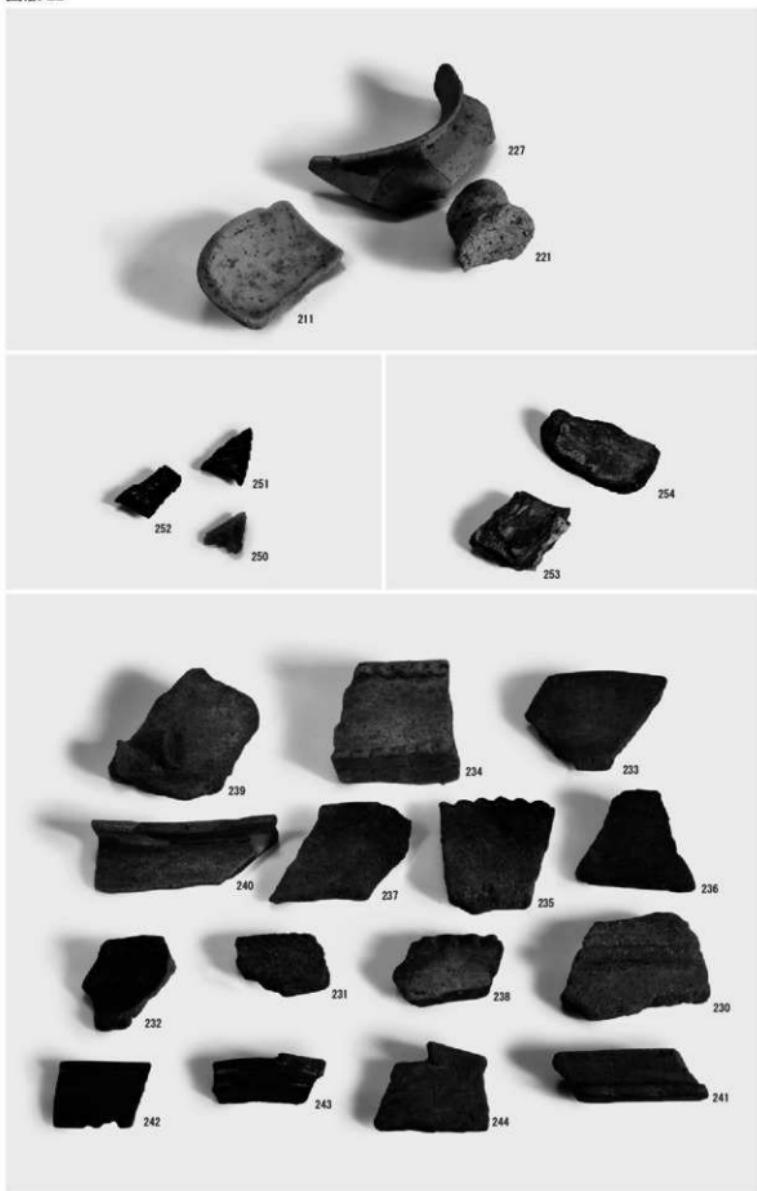


SX002、包含層（177）出土遺物



包含層出土遺物

図版 22



赤星灰塚遺跡出土遺物

報告書抄録

ふりがな	あかほしいしみらいせき・あかほしはいづかいせき
書名	赤星石道遺跡・赤星灰塚遺跡
副書名	国道325号線改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告
シリーズ名	熊本県文化財調査報告
シリーズ番号	第339集
編著者名	矢野裕介 井鍋薗之（編）
編集機関	熊本県教育委員会
所在地	〒862-8609 熊本県熊本市中央区水前寺6丁目18番1号 TEL 096-333-2706 Fax 096-384-7220
発行年月日	2020年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
あかほしいしみらいせき 赤星石道遺跡	菊池市赤星 石道 2131 他	210	186	32° 57' 46"	130° 48' 57"	20180701 ～ 20181031	1396	道路
あかほしいしみらいせき 赤星灰塚遺跡	菊池市赤星 灰塚 2184 他	210	185	32° 57' 41"	130° 49' 11"	20171201 ～ 20180228	1087	道路

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
赤星石道遺跡	集落跡	奈良時代～ 平安時代	掘立柱建物 土坑 小穴 溝 不明遺構	須恵器 土師器 越州窯系青磁 縁軸陶器 黒色土器 土鍤 水晶製玉	掘立柱建物を主体とした奈良時代後半から平安時代前半の集落「依麻口」を記した墨書き土器の出土
赤星灰塚遺跡	集落跡	縄文時代 奈良時代～ 平安時代	流路跡 掘立柱建物 土坑 小穴 溝 不明遺構	縄文土器 土師器 須恵器 打製石斧 石繖 磨石 石皿	

要約	赤星石道遺跡	赤星石道遺跡は沖積扇状地の微高地に立地する。掘立柱建物を主体とする奈良時代後半から平安時代にかけての集落跡を把握した。建物は大型の建物で規則的な配置をもち、縦柱建物を備える。このほか、建物の周囲には大型の土坑が2基確認された。土坑内には多量の土器が廃棄された状態で見つかり、底部穿孔の耳皿、皿、意図的に口縁部を欠いた長頸壺などから周辺で儀礼を行ったのちに廃棄されたものとした。高台壙の底部外面に「依麻口」の墨書き土器が出土したことからこの地域の開発・経営に関わった有力者が居住していた可能性を指摘することができる。
	赤星灰塚遺跡	奈良時代から平安時代の掘立柱建物を2棟確認した。流路内からは縄文時代晩期の土器が少量出土した。

2020年3月31日 発行

熊本県文化財調査報告第339集

赤星石道遺跡・赤星灰塚遺跡

国道325号線改築工事に伴う埋蔵文化財埋蔵文化財発掘調査報告

著作権所有 熊本市中央区水前寺6丁目18番1号

発行者 熊本県教育委員会

印刷者 社会福祉法人

熊本県コロニー協会(コロニー印刷)

熊本市西区二本木3丁目12番37号

発行者：熊本県教育委員会
所屬：教育庁教育総務局文化課
発行年度：令和元年度

この電子書籍は、熊本県文化財調査報告第339集を底本として作成しました。閲覧を目的としていますので、精確な図版などが必要な場合には底本から引用してください。

底本は、熊本県内の市町村教育委員会と図書館、都道府県の教育委員会と図書館、考古学を教える大学、国立国会図書館などにあります。所蔵状況や利用方法は、直接、各施設にお問い合わせください。

書名：赤星石道遺跡・赤星灰塚遺跡

発行：熊本県教育委員会

〒862-8609 熊本市中央区水前寺6丁目18番1号

電話：096-383-1111

URL：<http://www.pref.kumamoto.jp/>

電子書籍制作日：西暦2021年3月31日

なお、熊本県文化財保護協会が底本を頒布している場合があります。詳しくは熊本県文化財保護協会にお問い合わせください。

熊本県文化財保護協会

URL：<http://www.kumamoto-bunho.jp/>